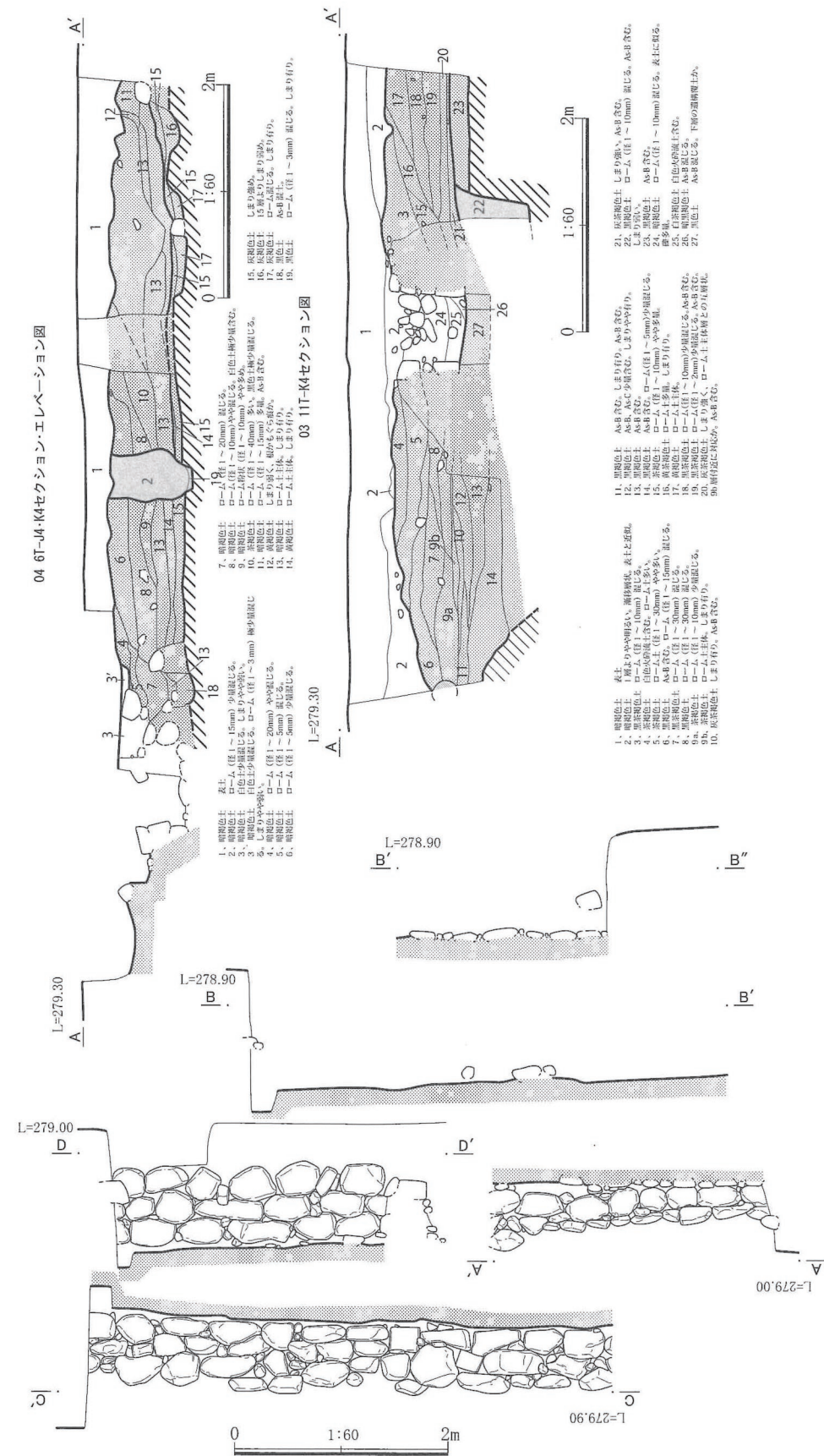
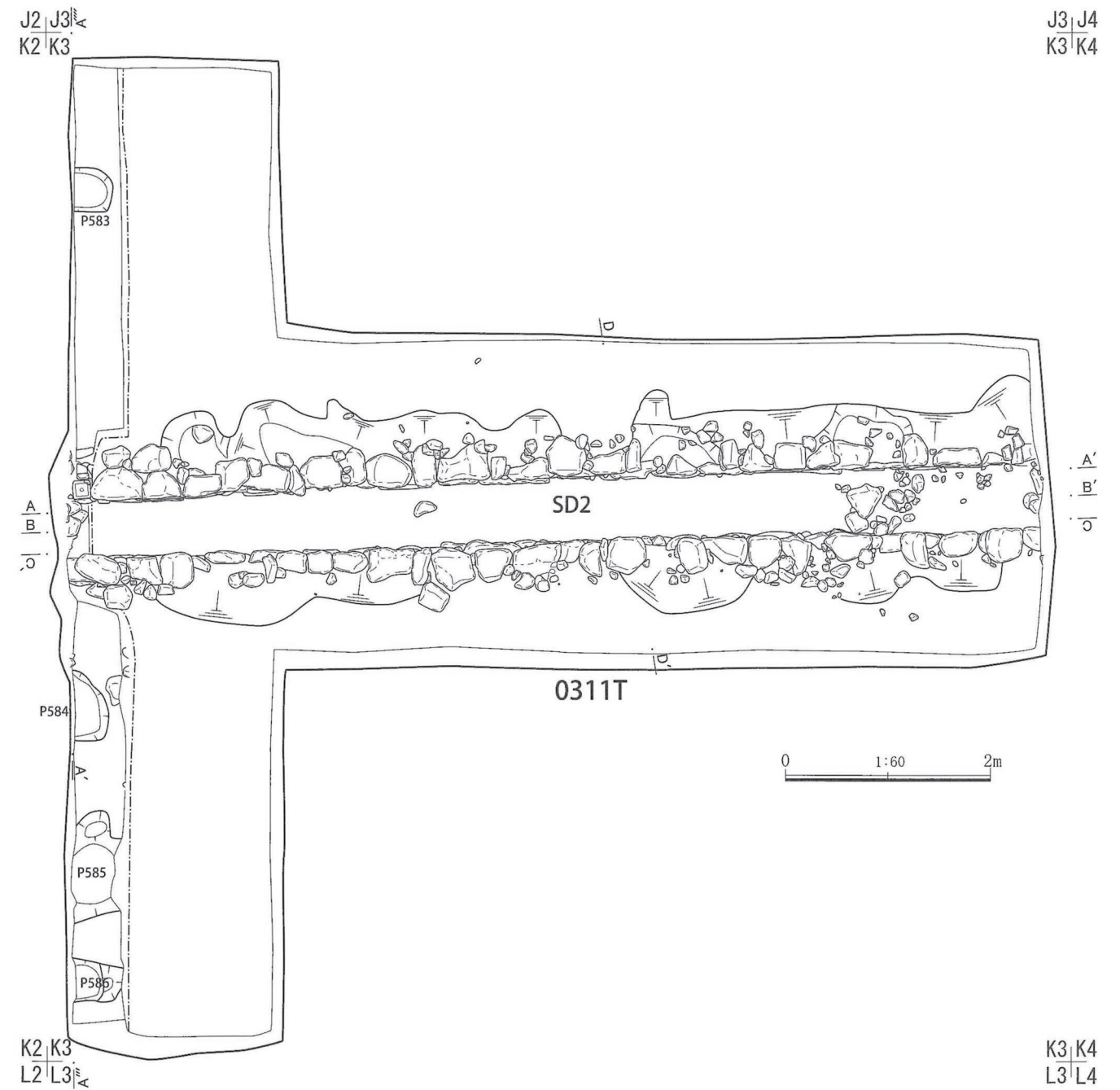
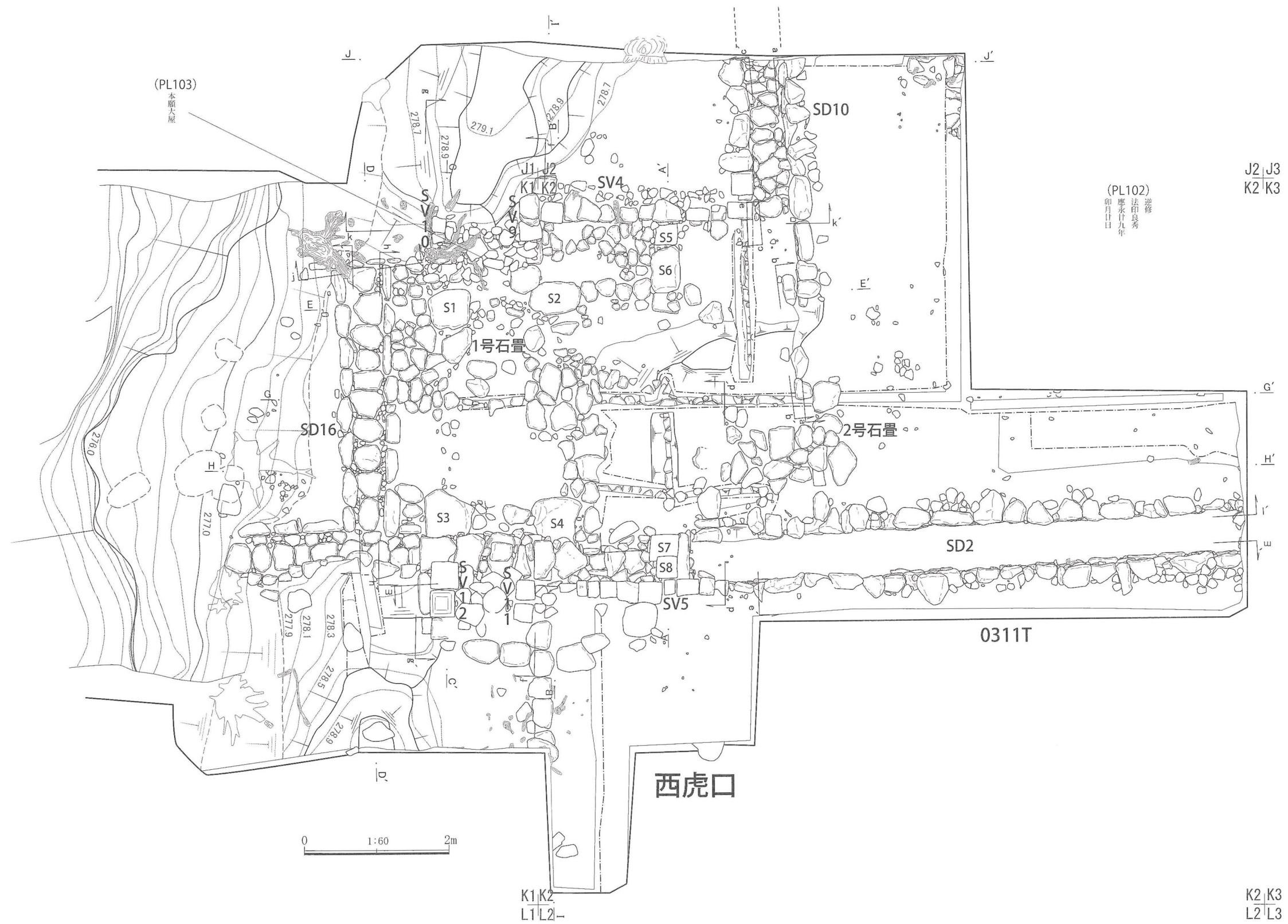




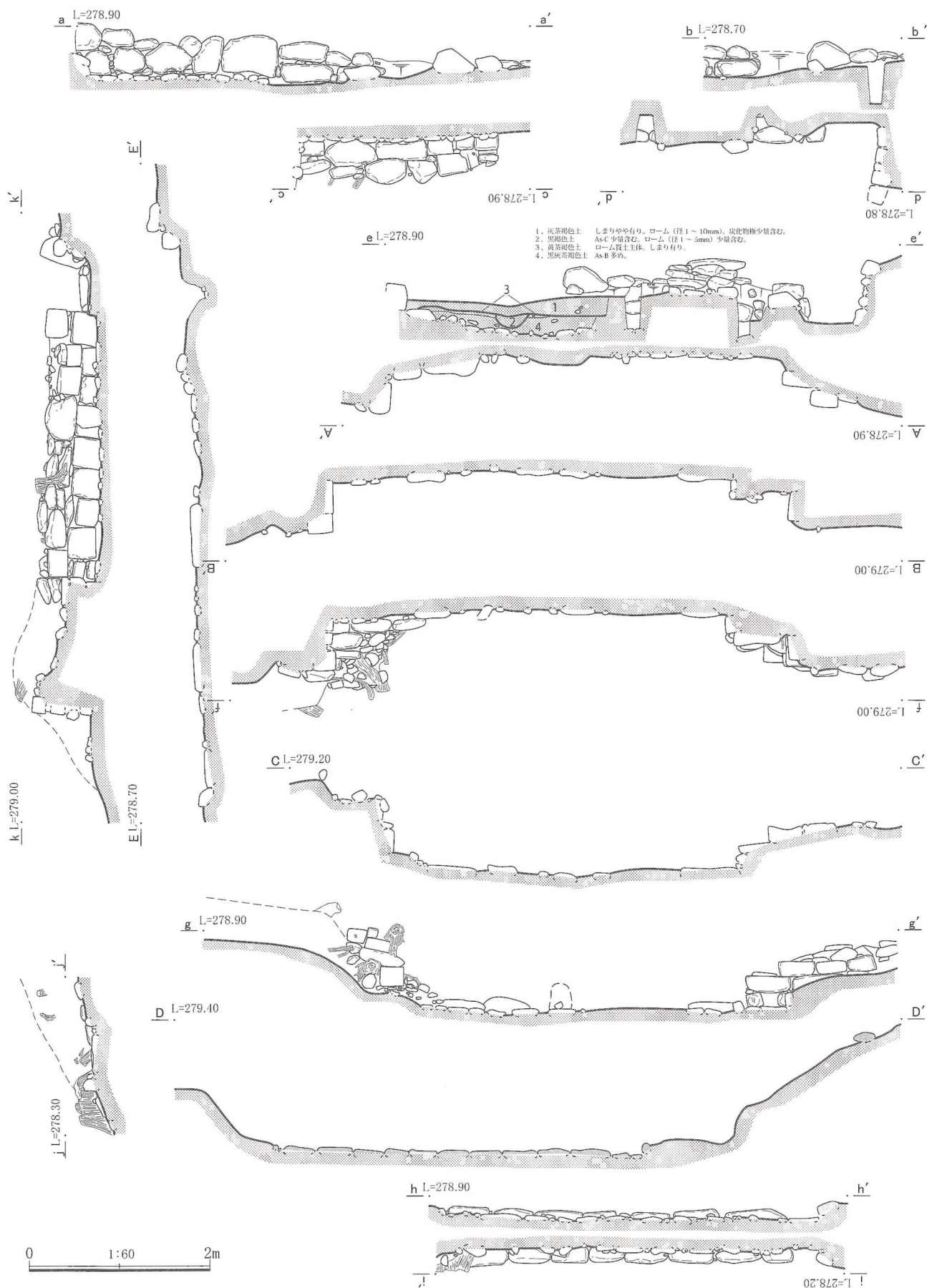
第198図 本丸地区K4・L4グリット046T・0311T(セクション図・立面図・エレベーション図)



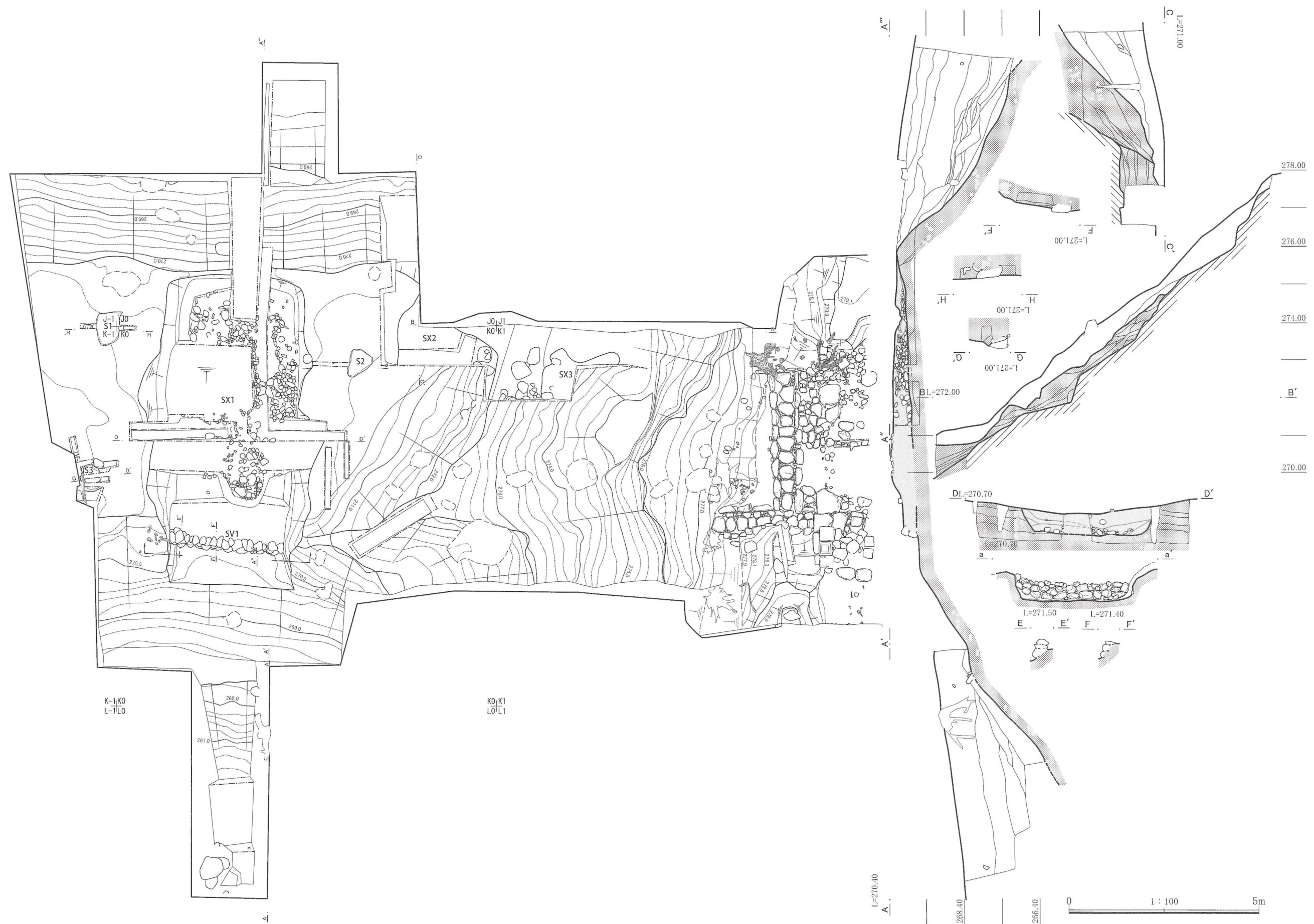
第 199 図 本丸地区 K3 グリット 0311T (平面図)



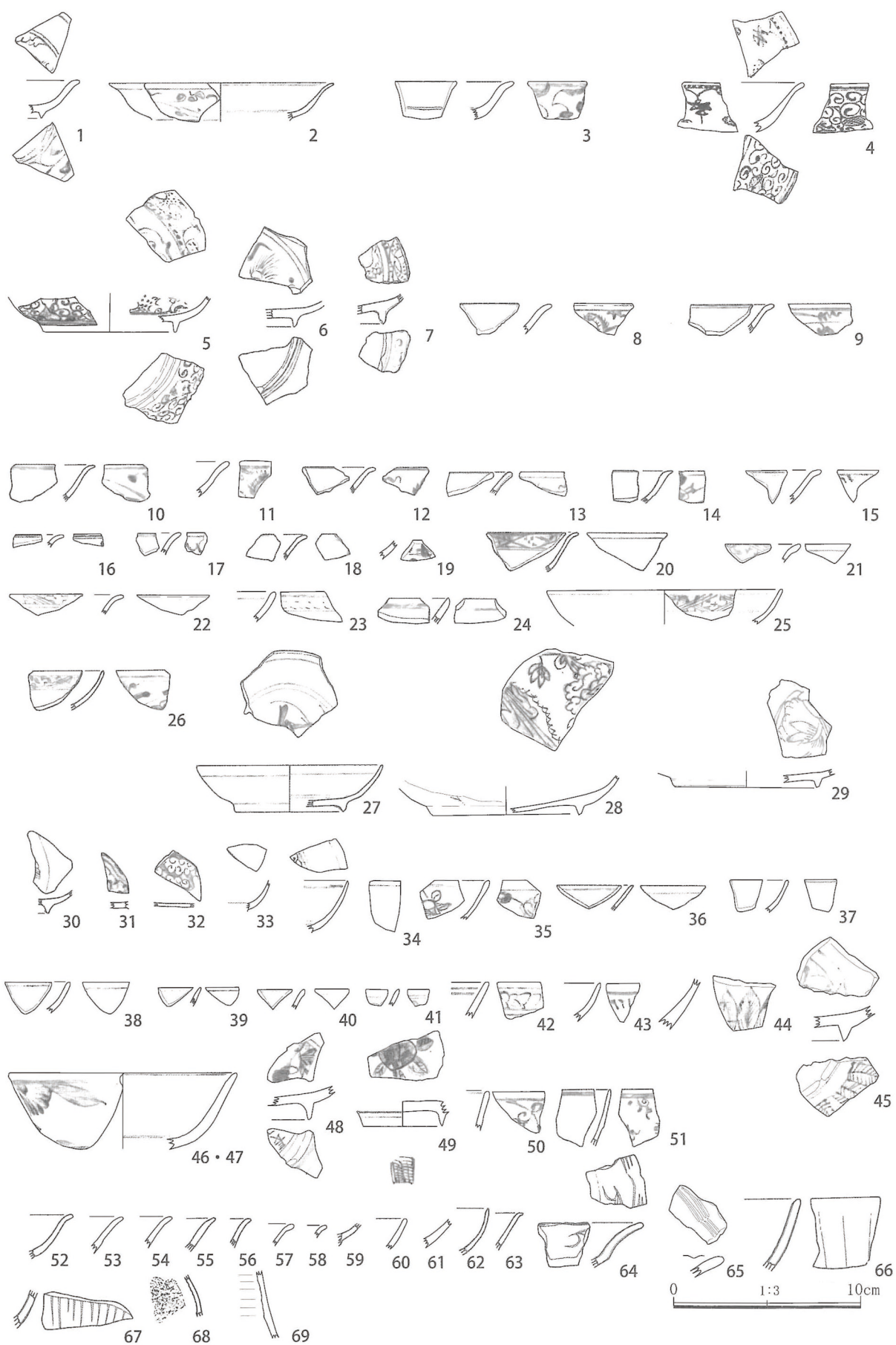
第 201 図 本丸地区 J1・J2・K1・K2 グリット本丸西虎口 (平面図)



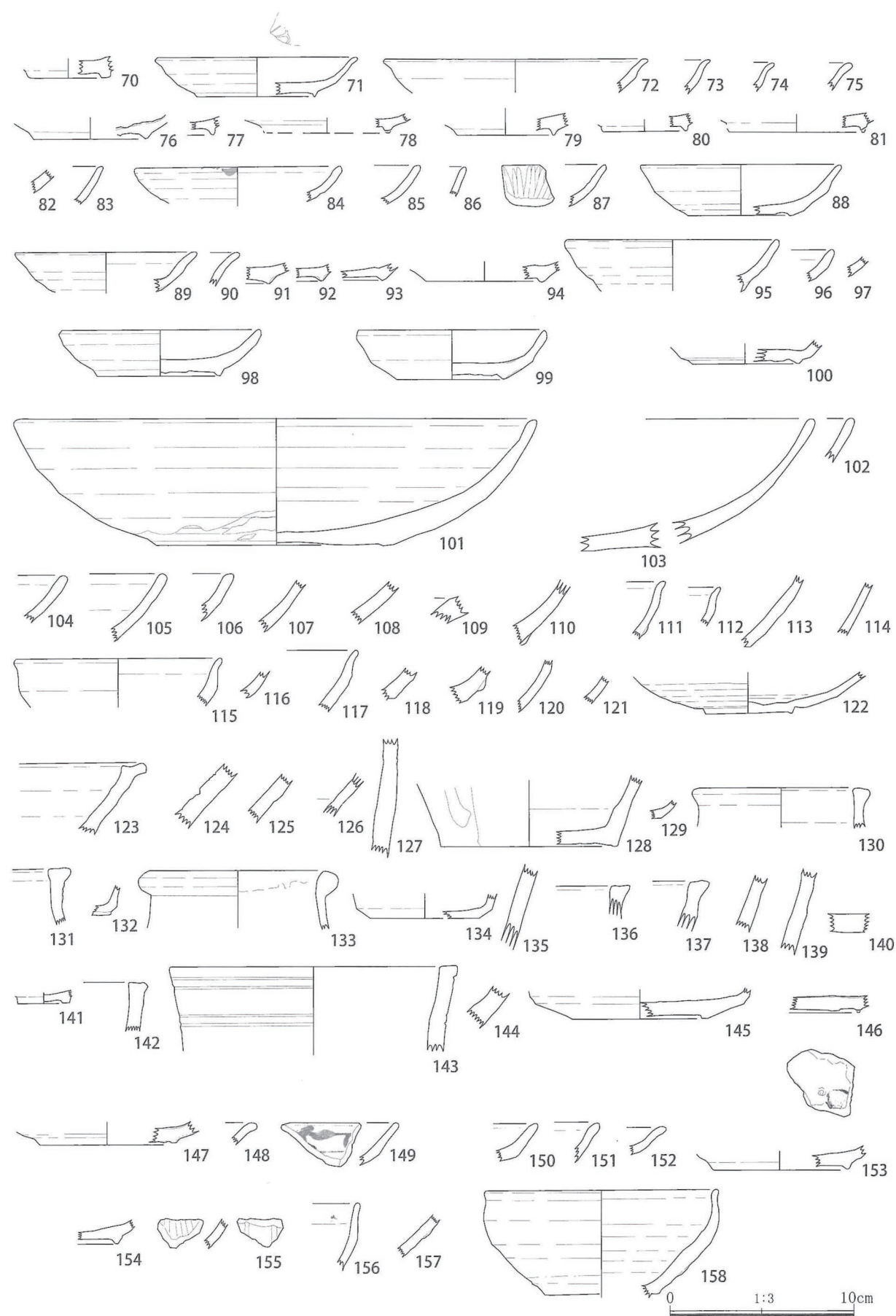
第 202 図 本丸地区 J1・J2・K1・K2 グリット本丸西虎口（立面図①・エレベーション図）



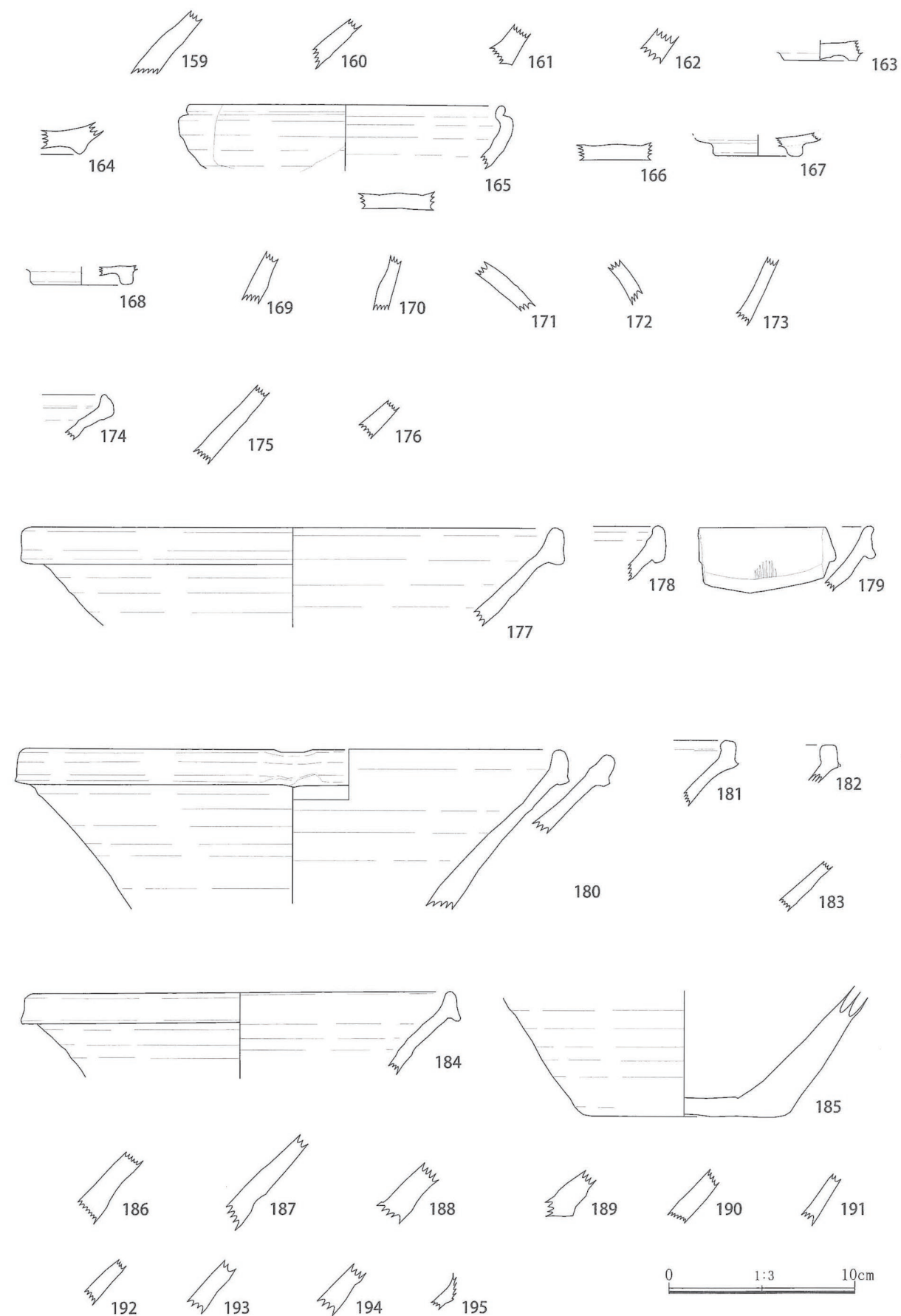
第204図 本丸地区J-1～K1・K-1～K1・L-1～L1 グリット本丸・蔵屋敷間部（平面図・セクション図・立面図・エレベーション図）



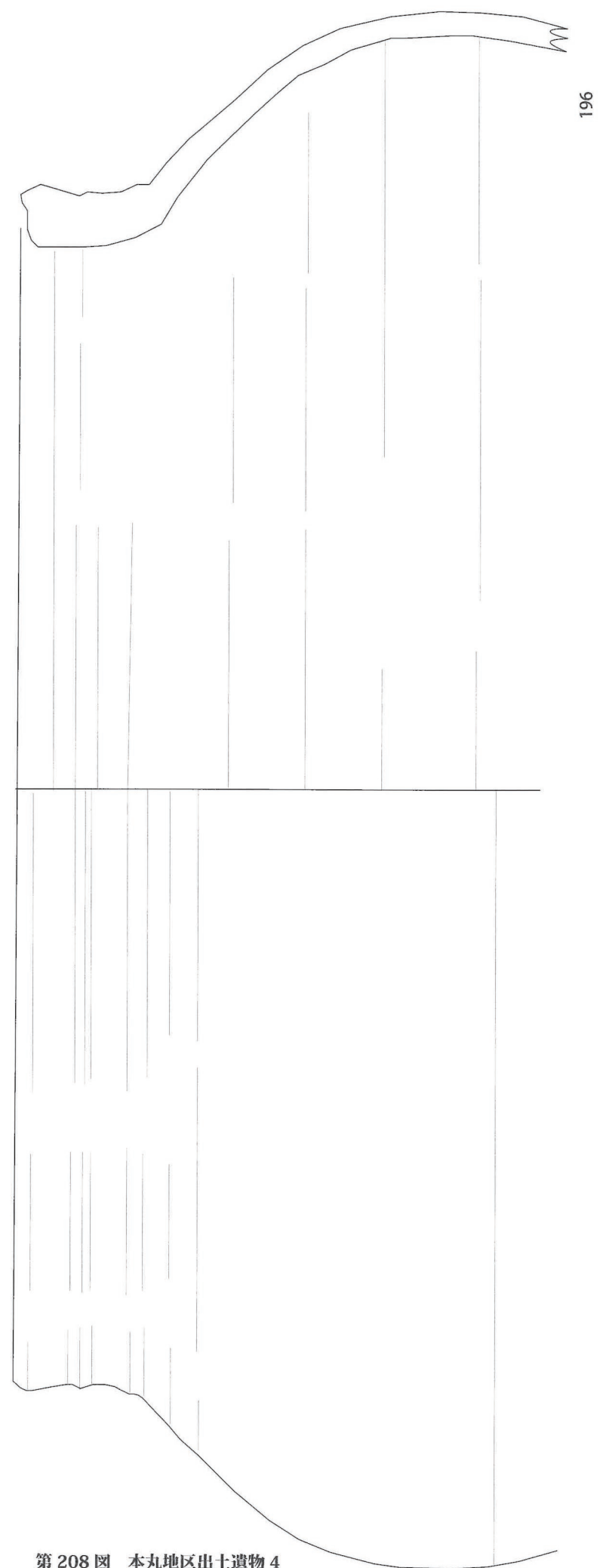
第 205 图 本丸地区出土遗物 1



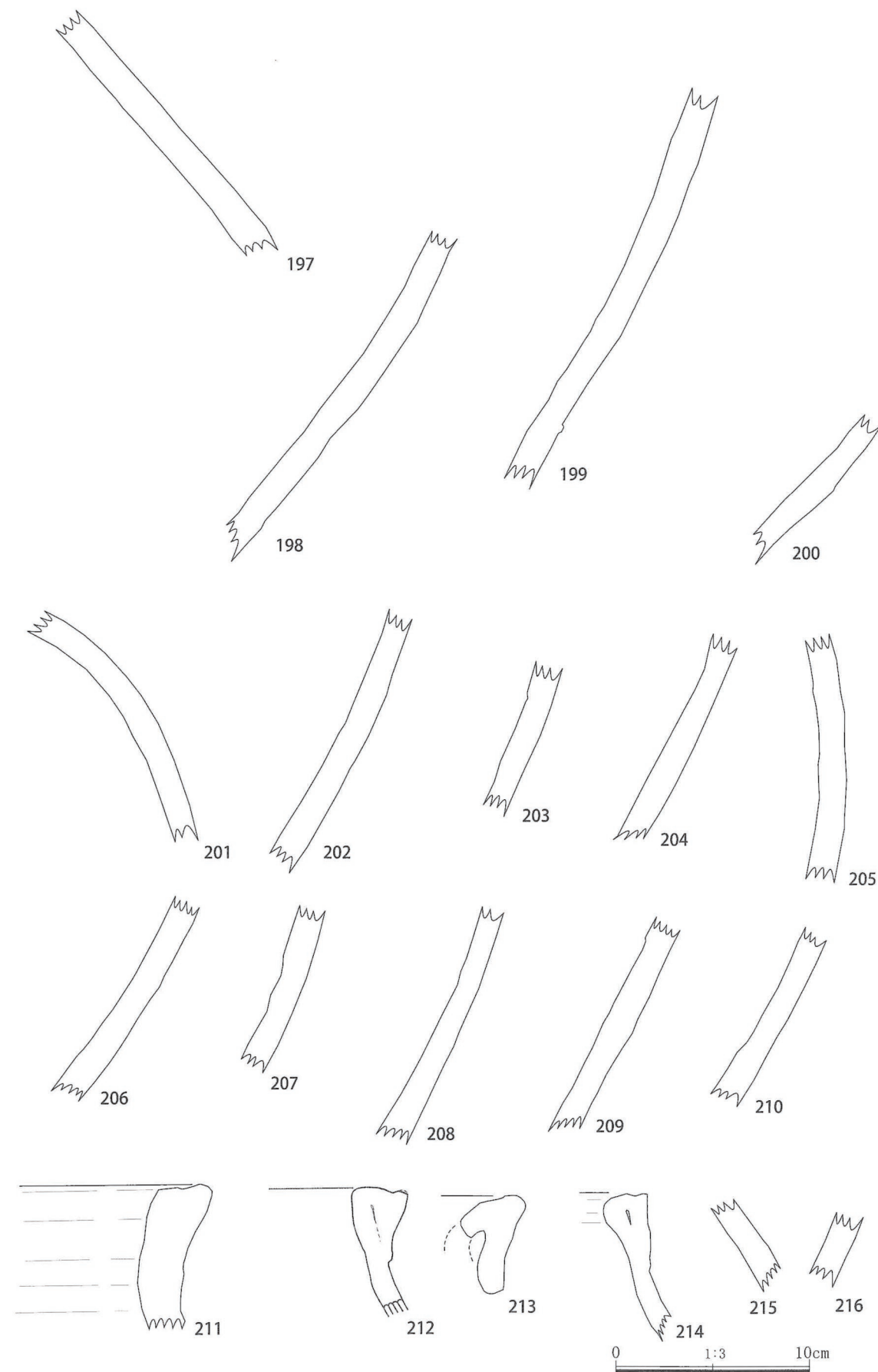
第 206 图 本丸地区出土遗物 2



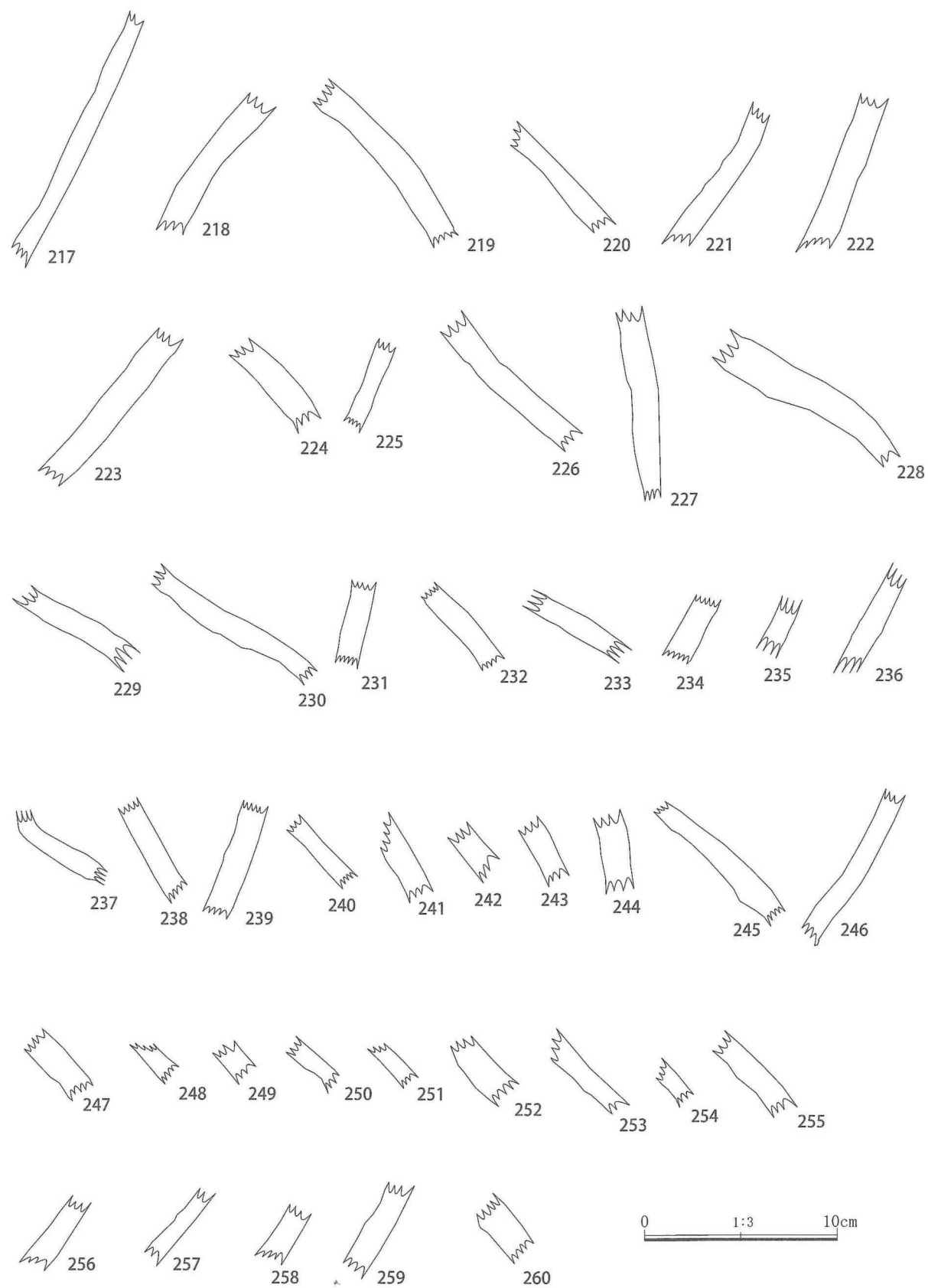
第 207 图 本丸地区出土遗物 3



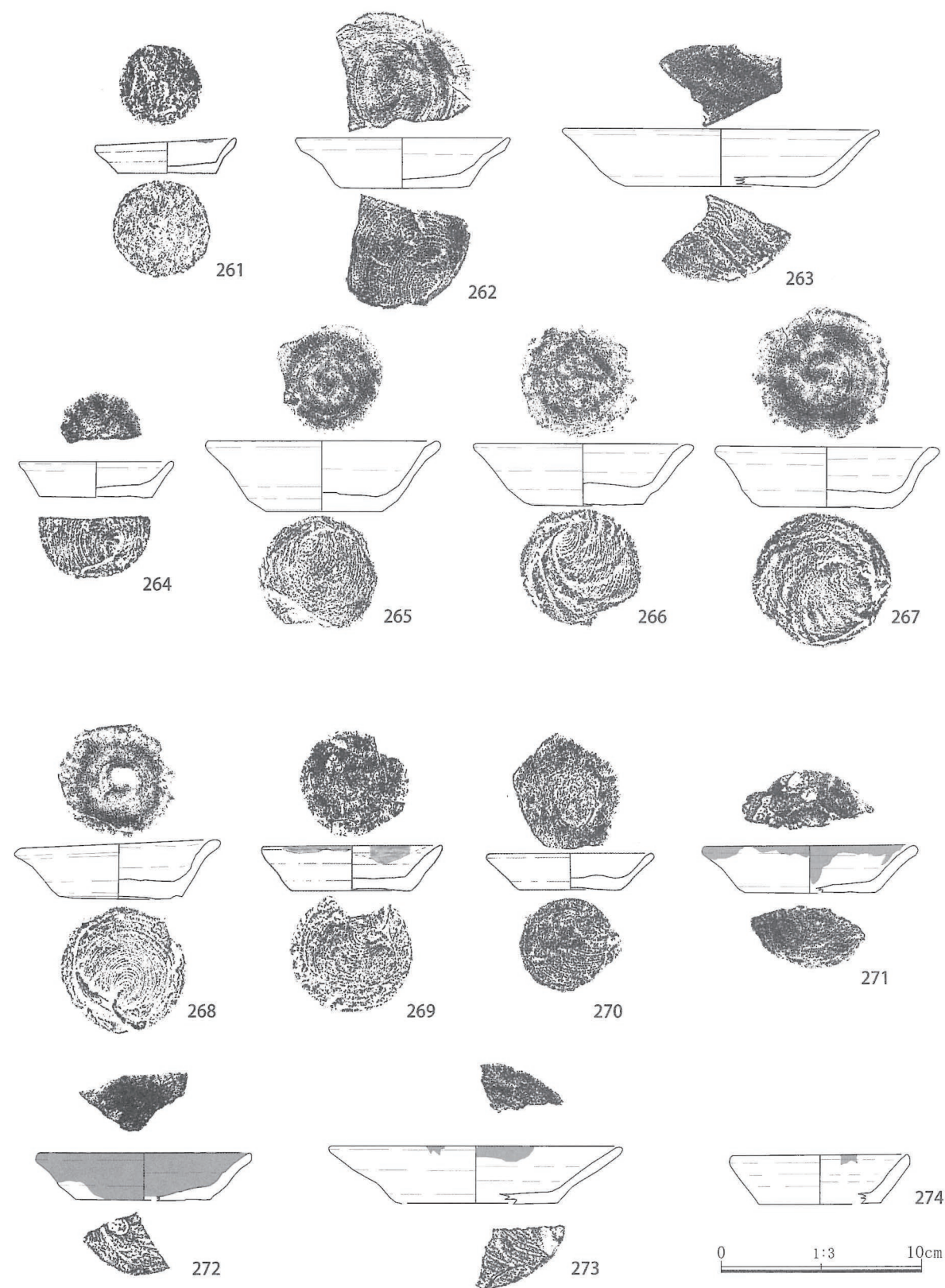
第 208 図 本丸地区出土遺物 4



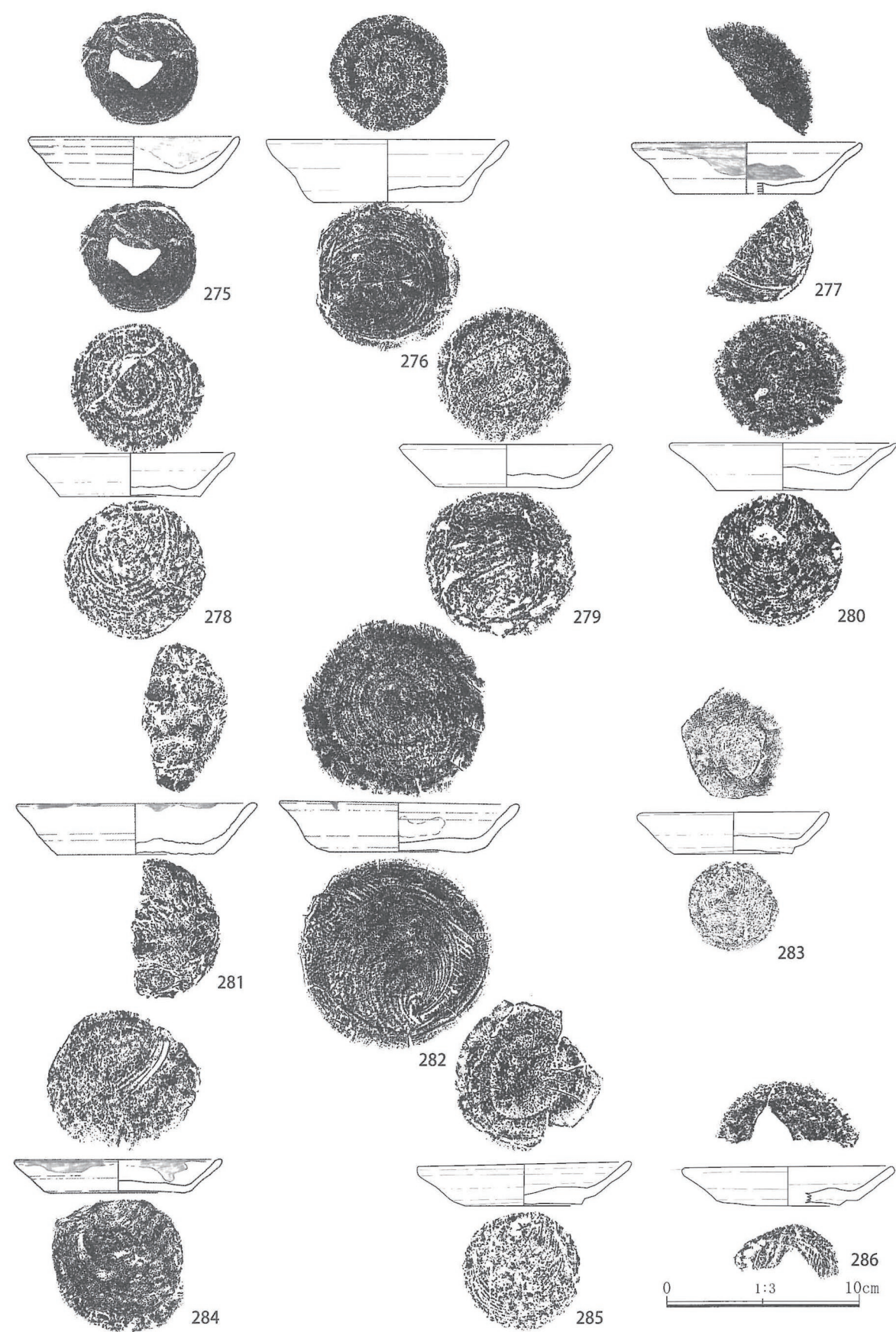
第 209 図 本丸地区出土遺物 5



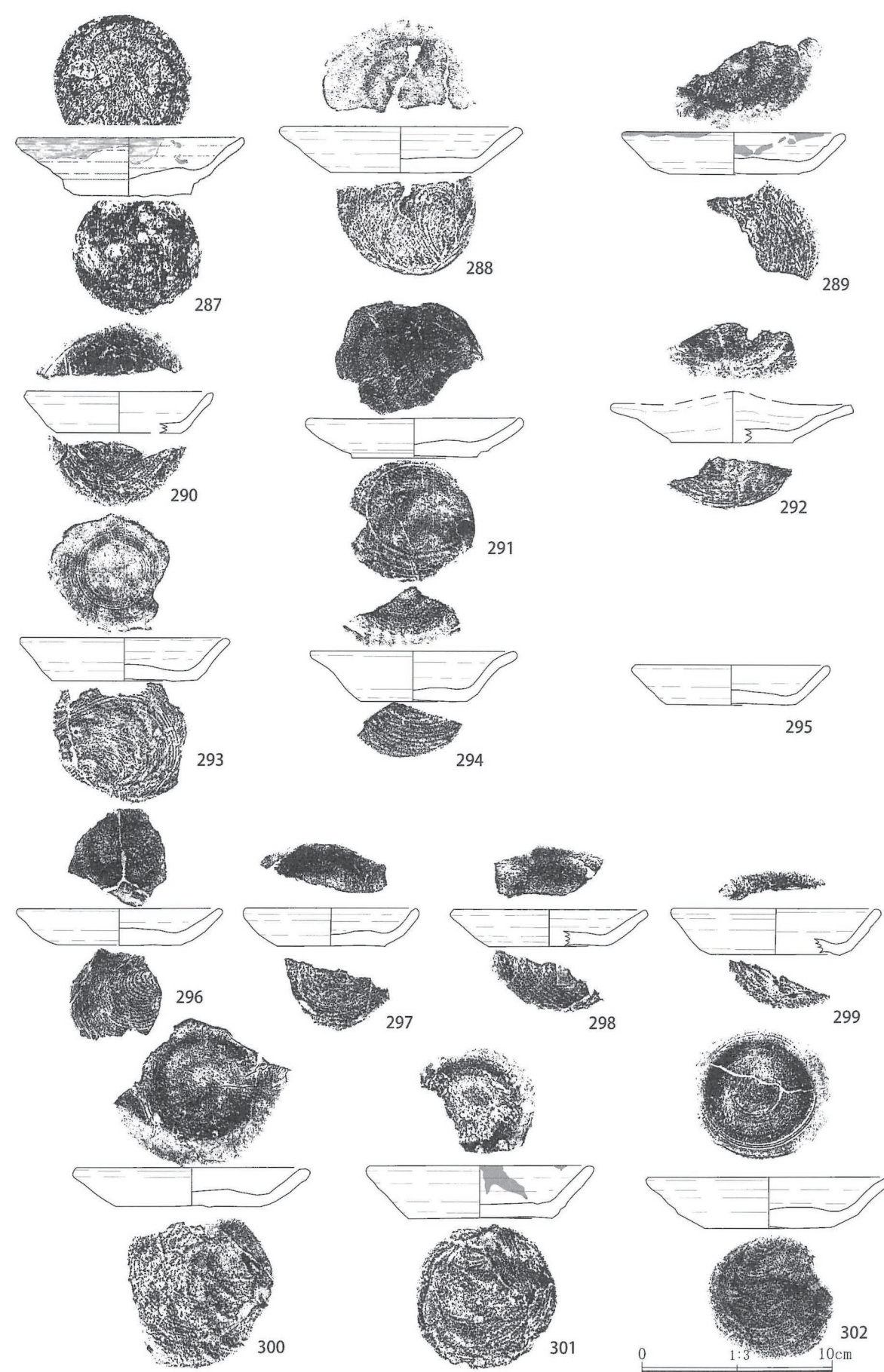
第 210 图 本丸地区出土遺物 6



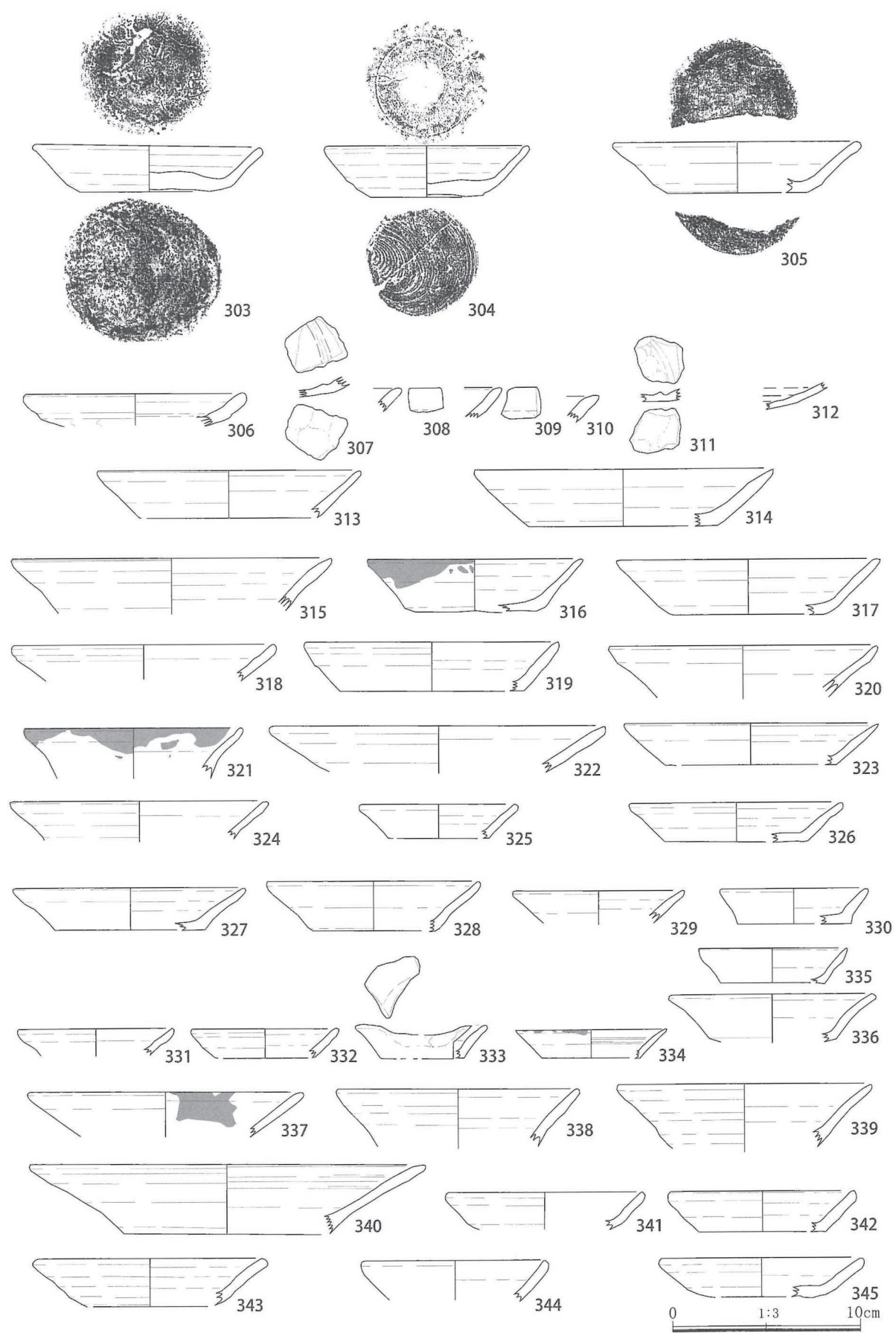
第 211 图 本丸地区出土遺物 7



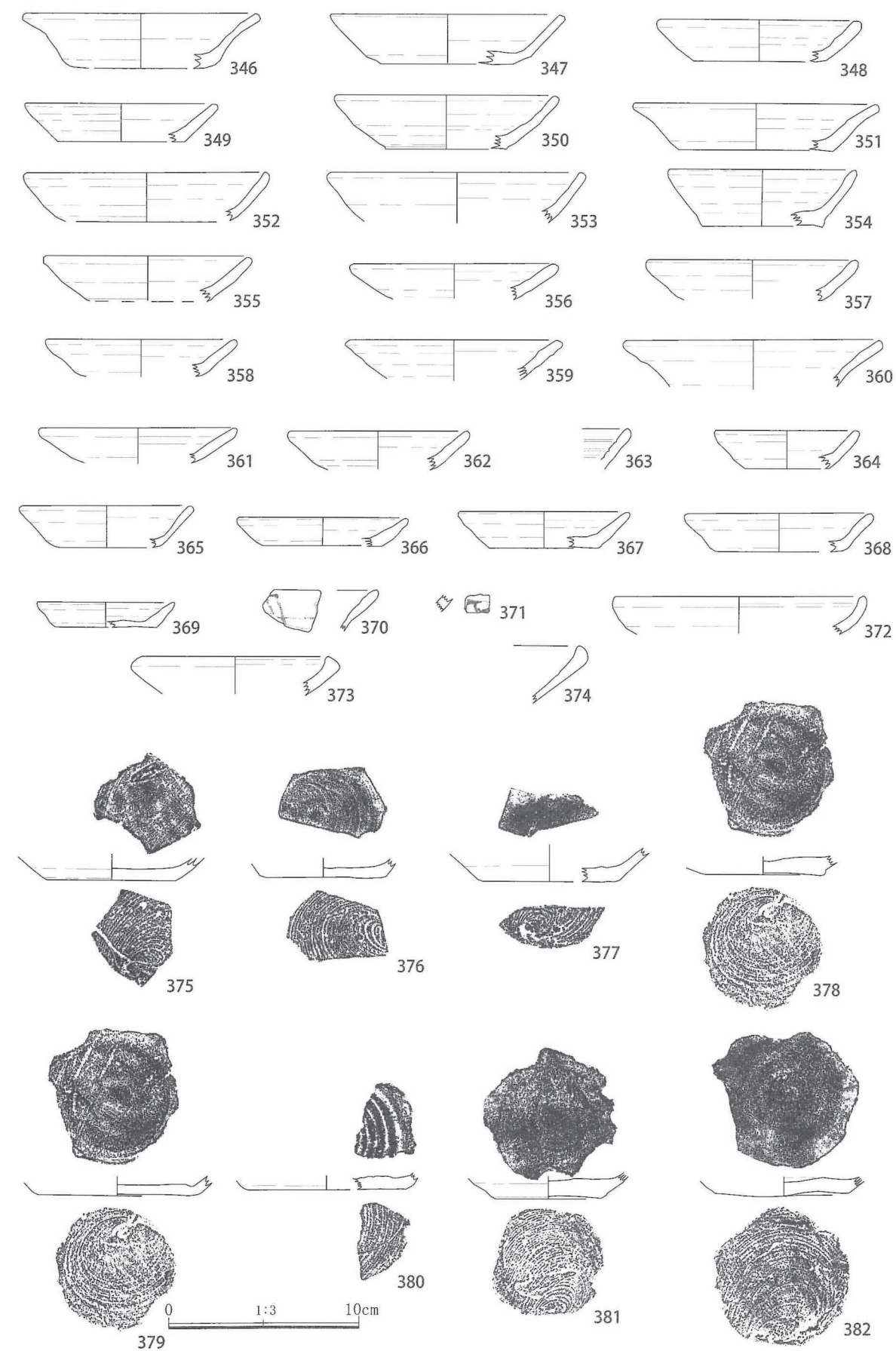
第 212 図 本丸地区出土遺物 8



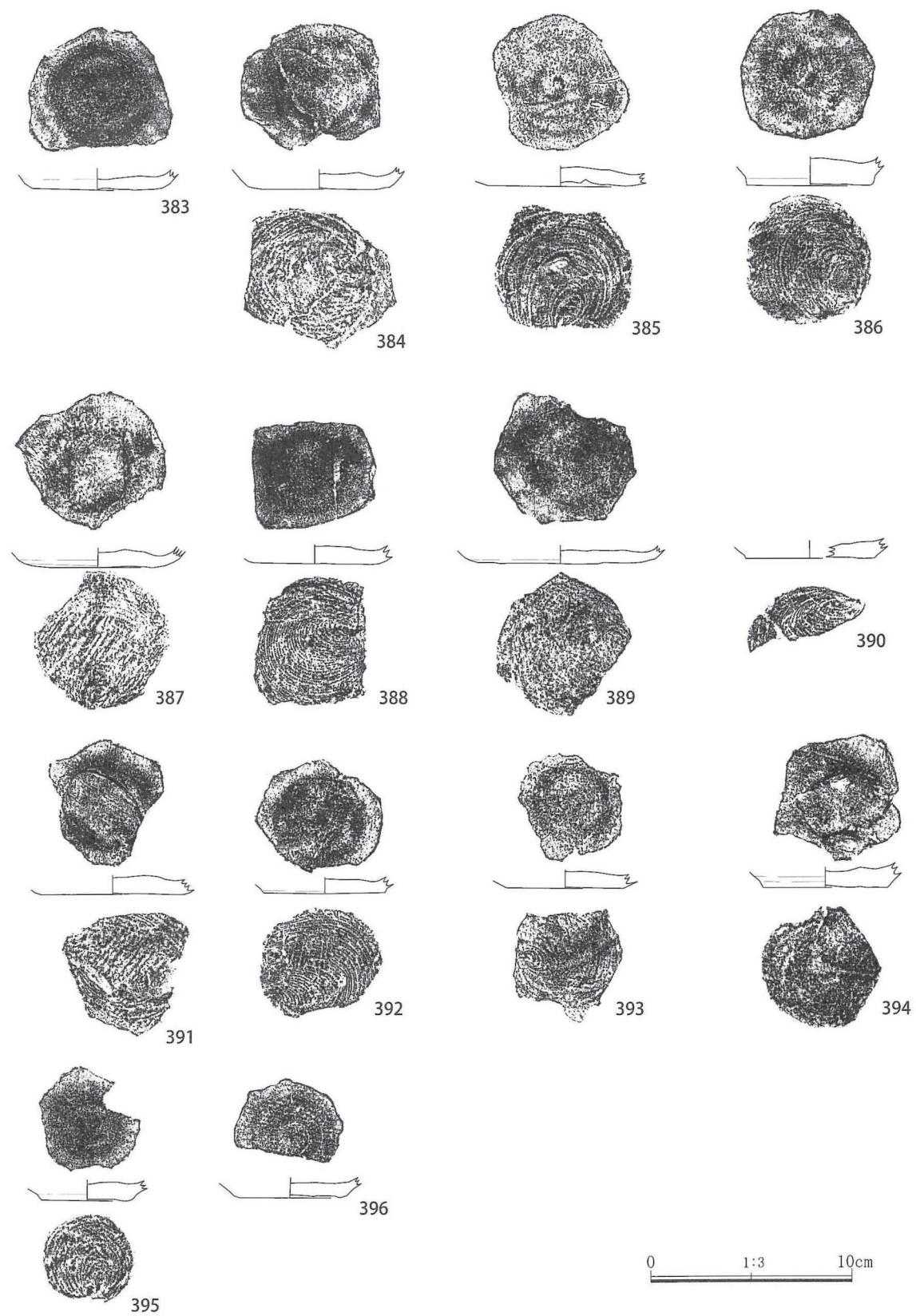
第 213 図 本丸地区出土遺物 9



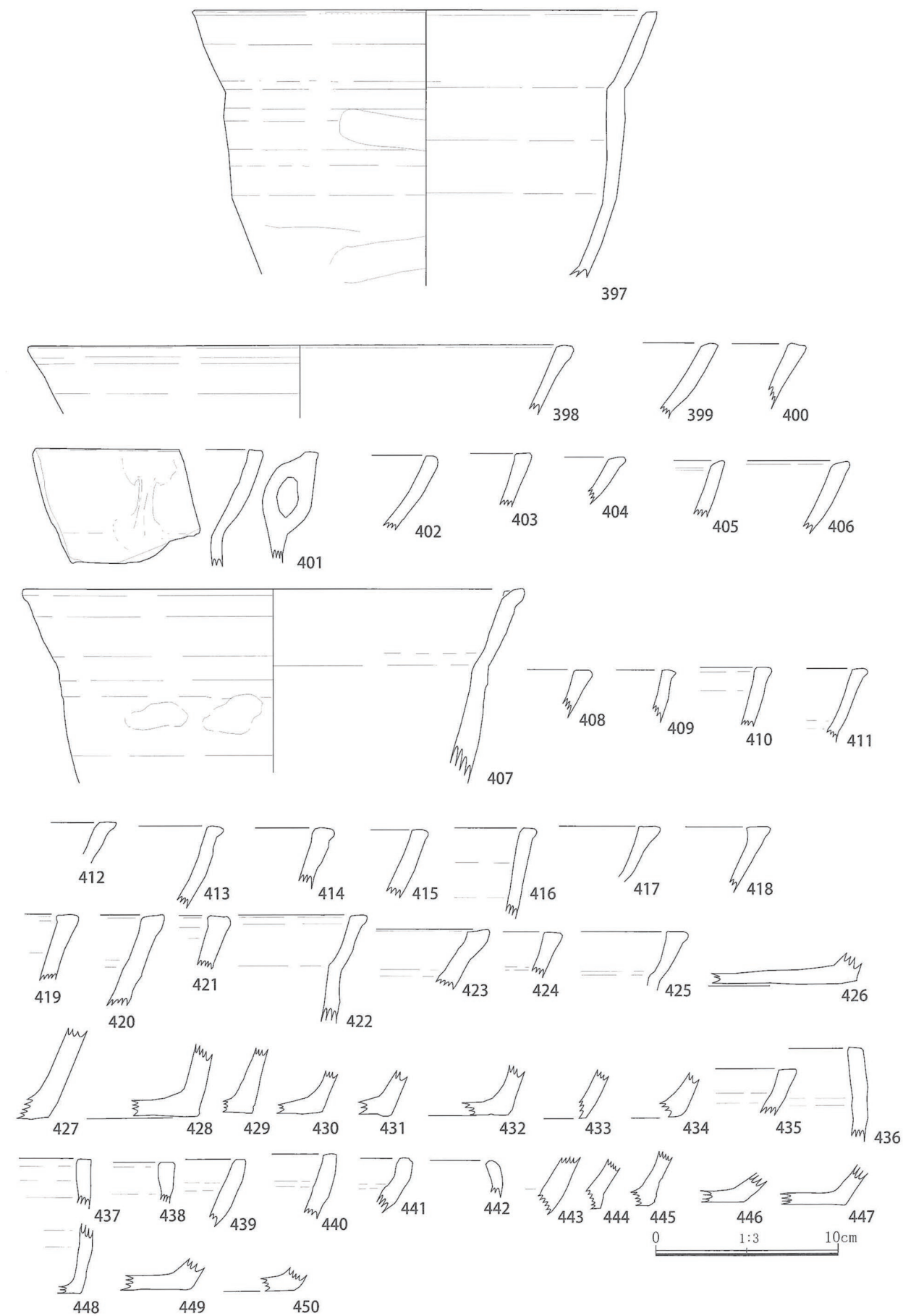
第 214 图 本丸地区出土遗物 10



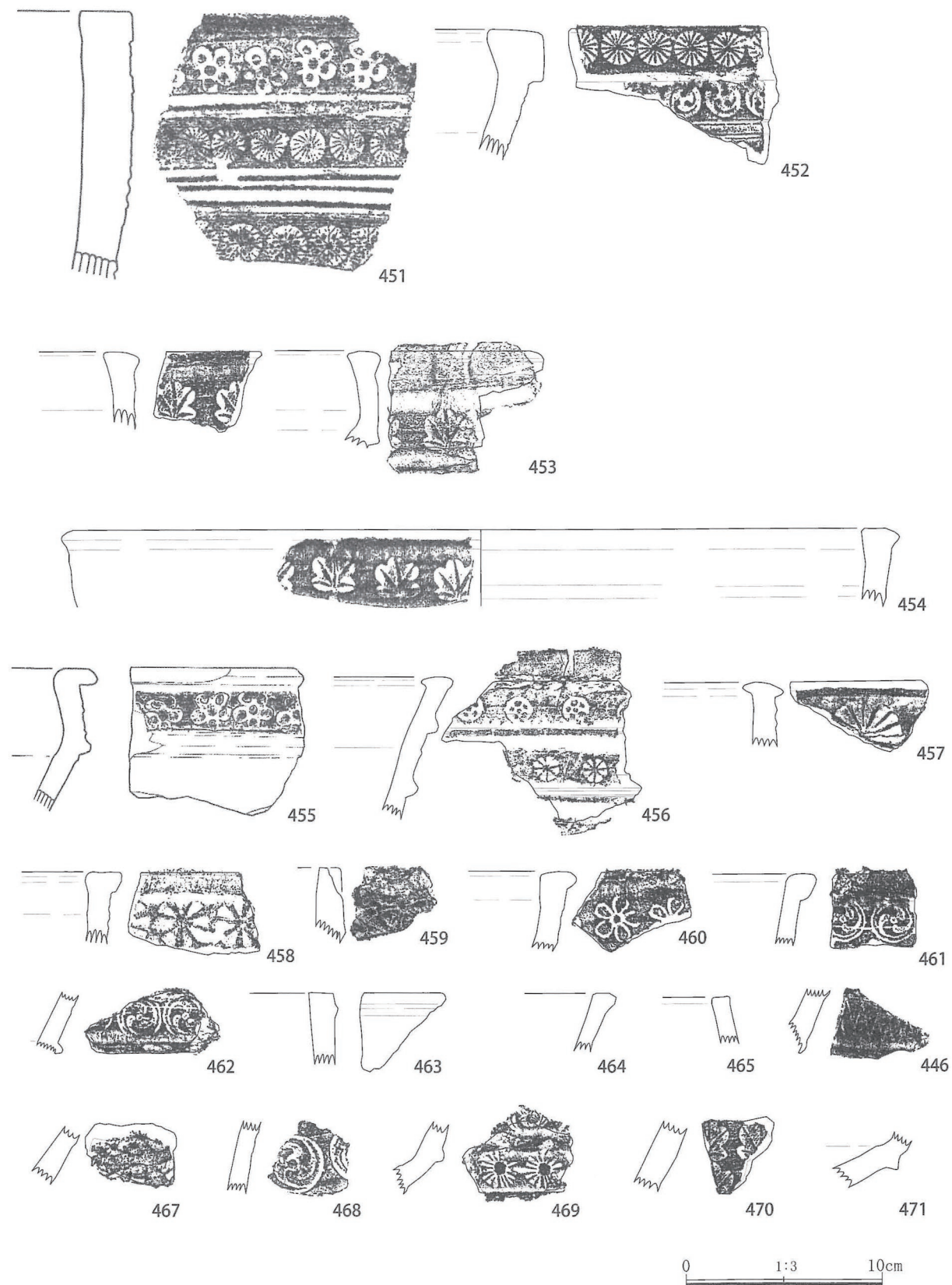
第 215 图 本丸地区出土遗物 11



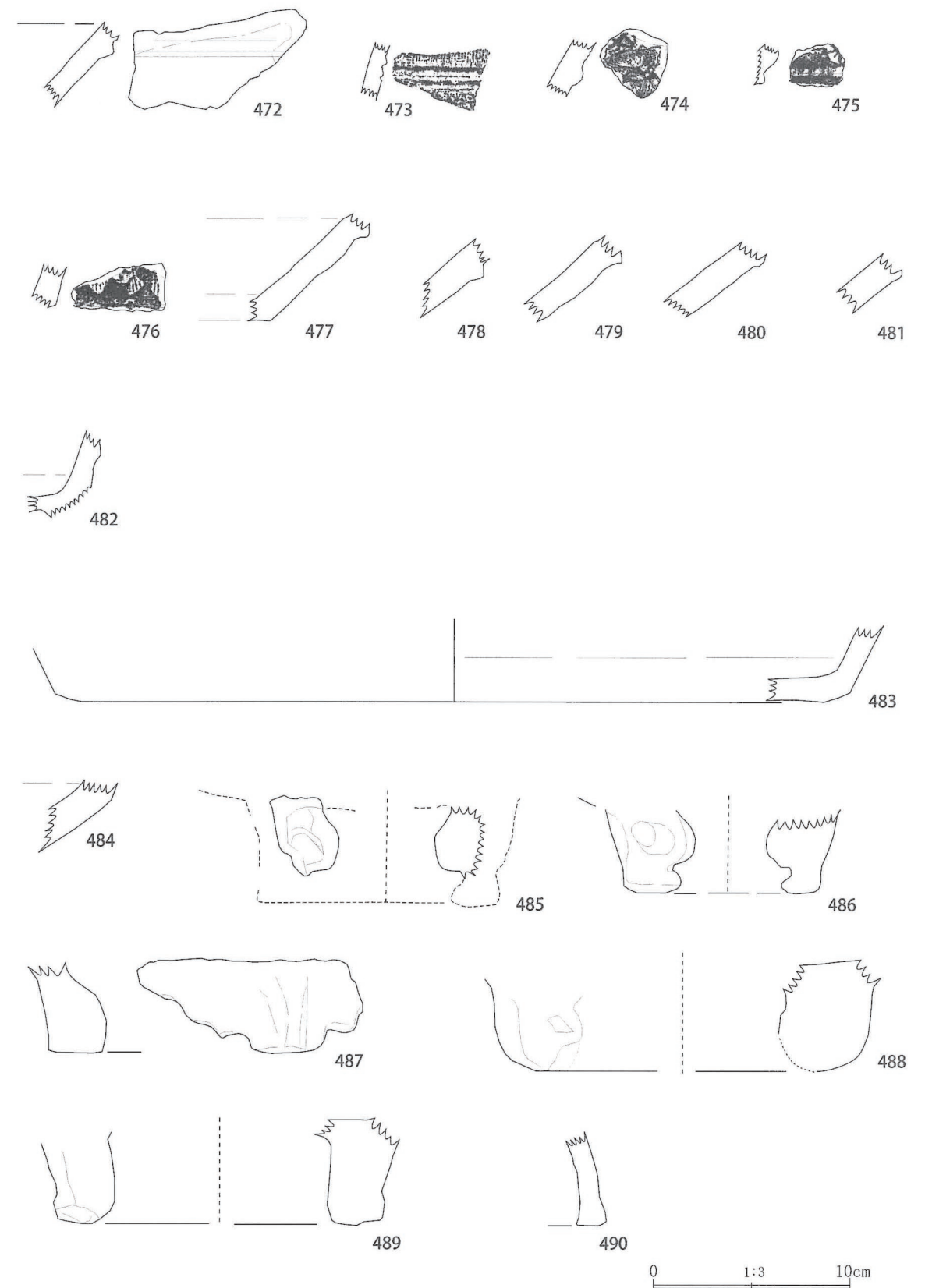
第 216 图 本丸地区出土遺物 12



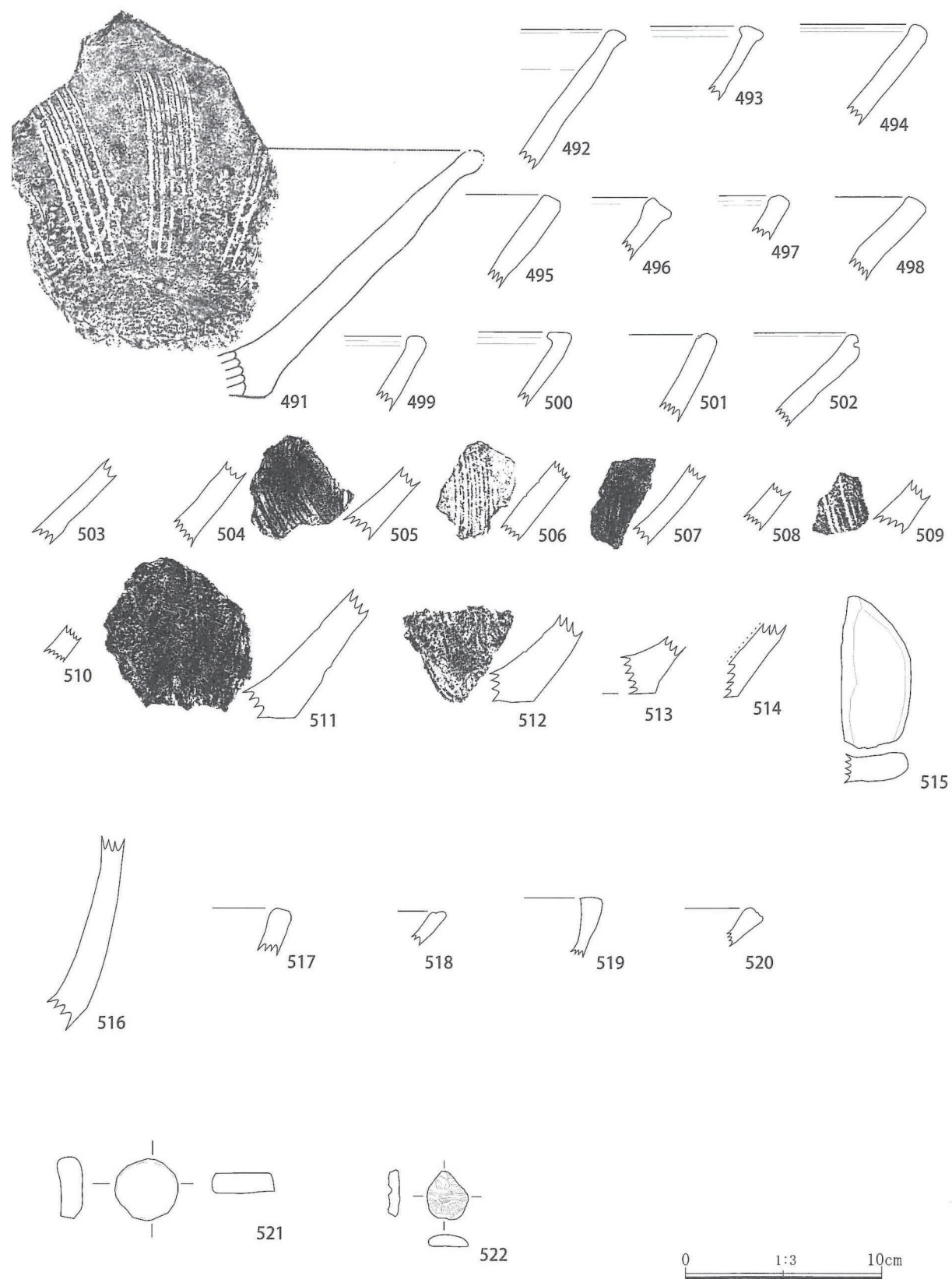
第 217 图 本丸地区出土遺物 13



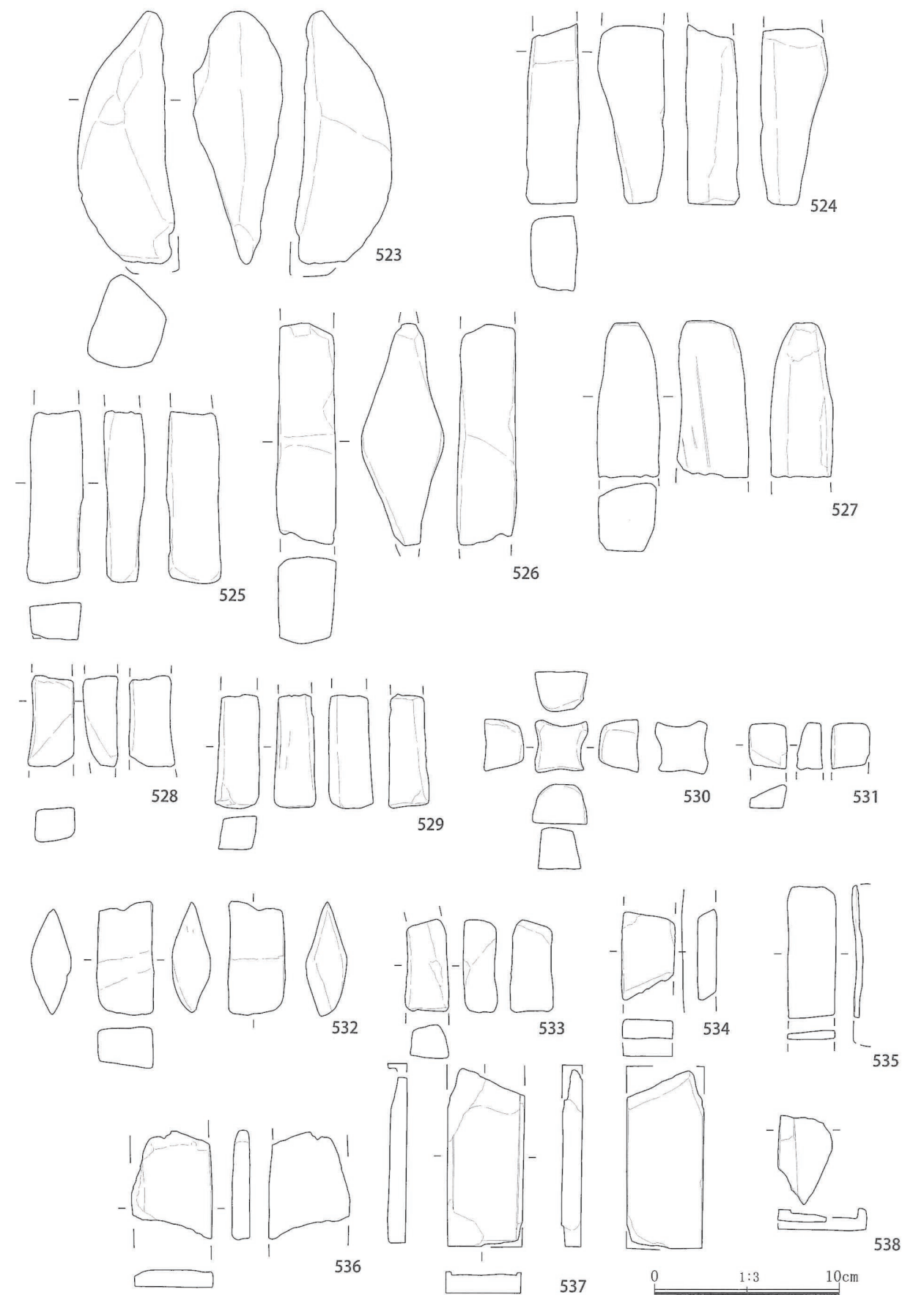
第 218 図 本丸地区出土遺物 14



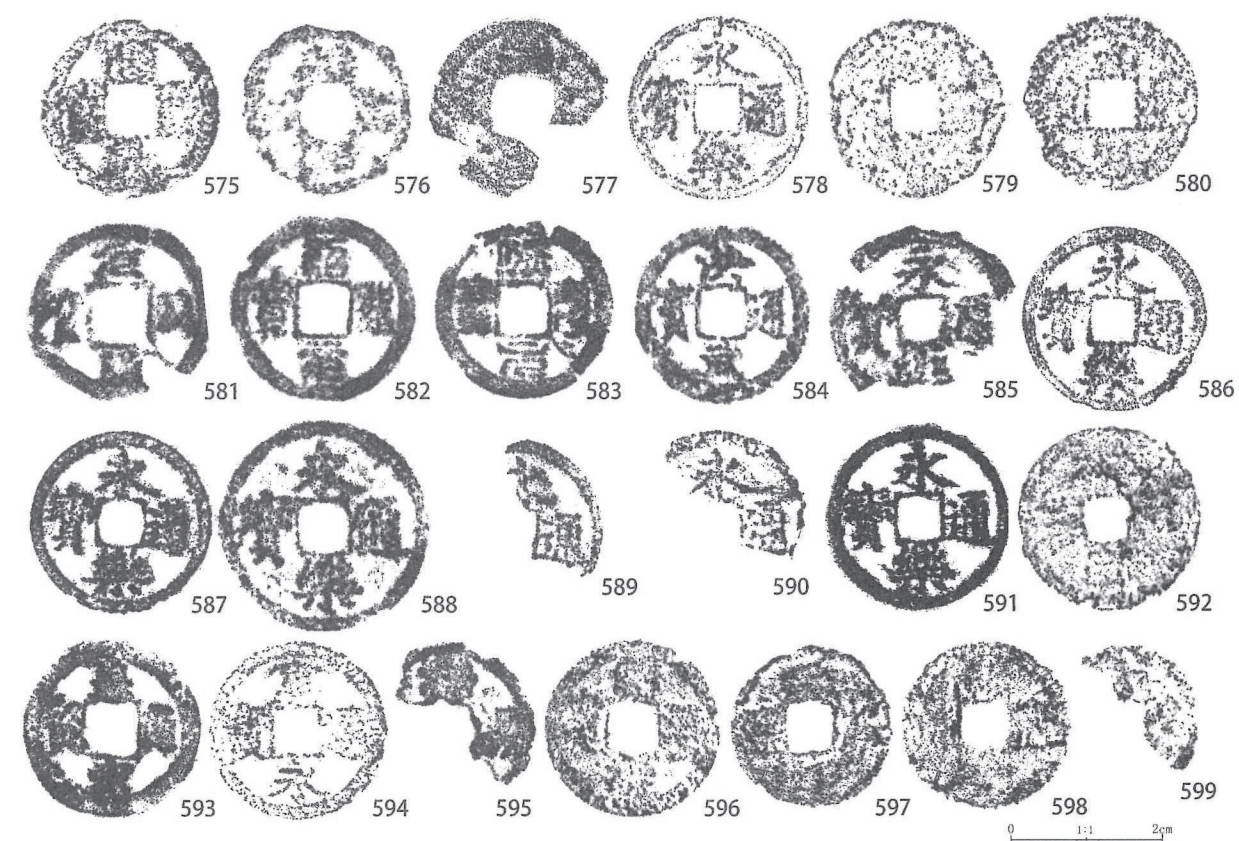
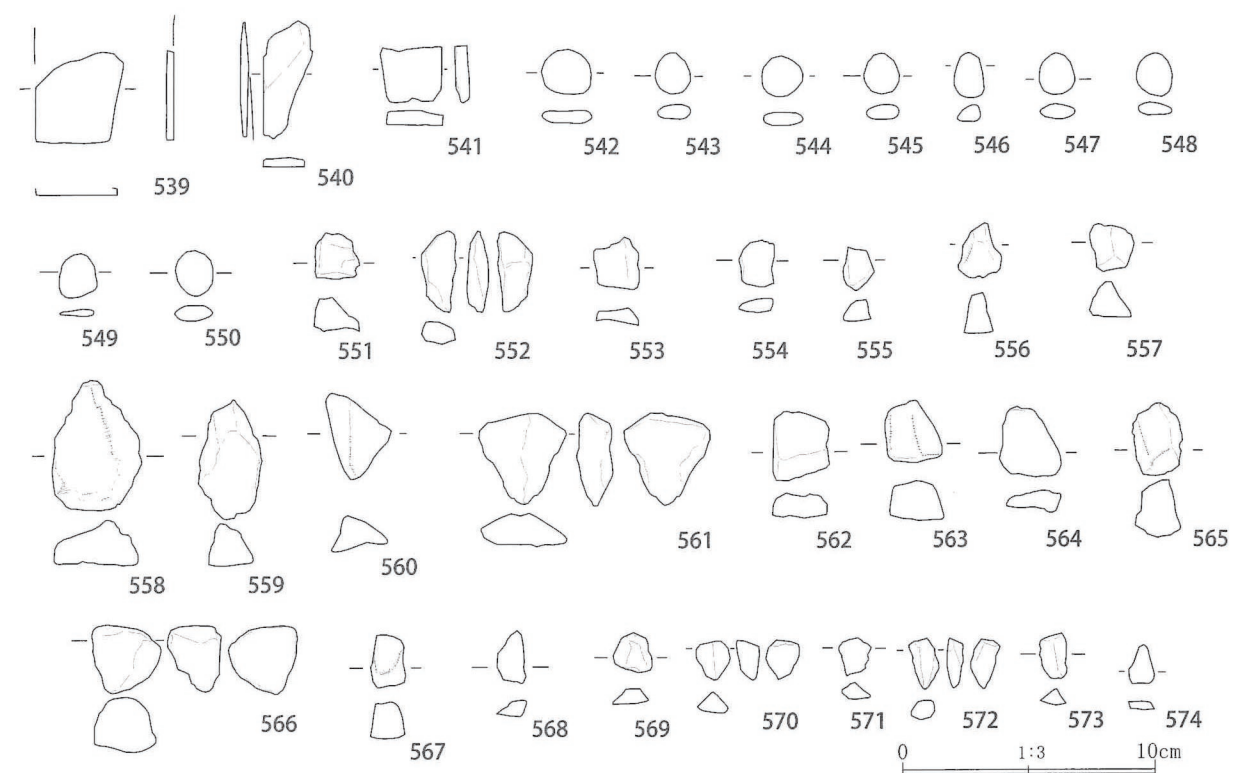
第 219 図 本丸地区出土遺物 15



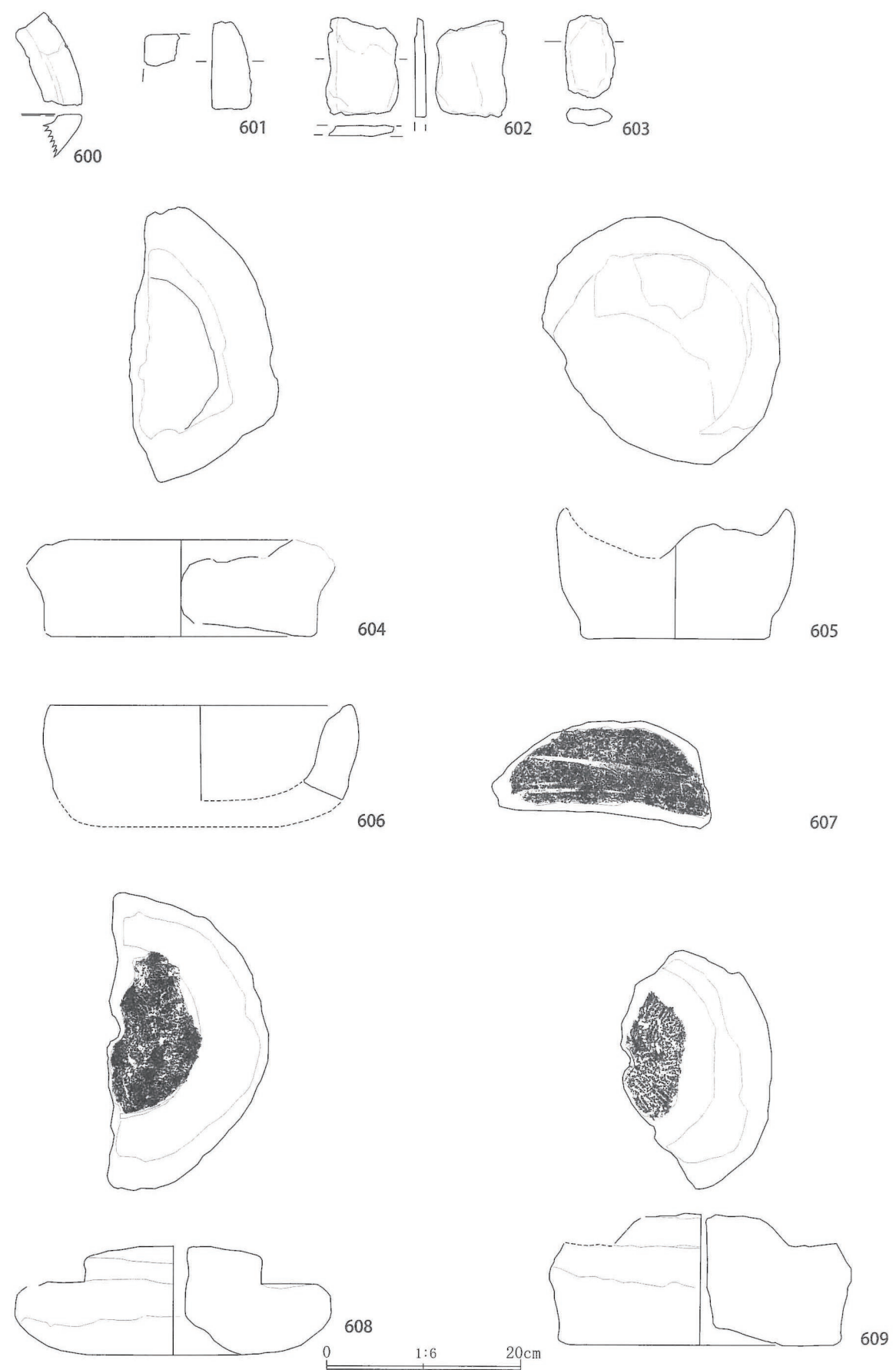
第 220 图 本丸地区出土遺物 16



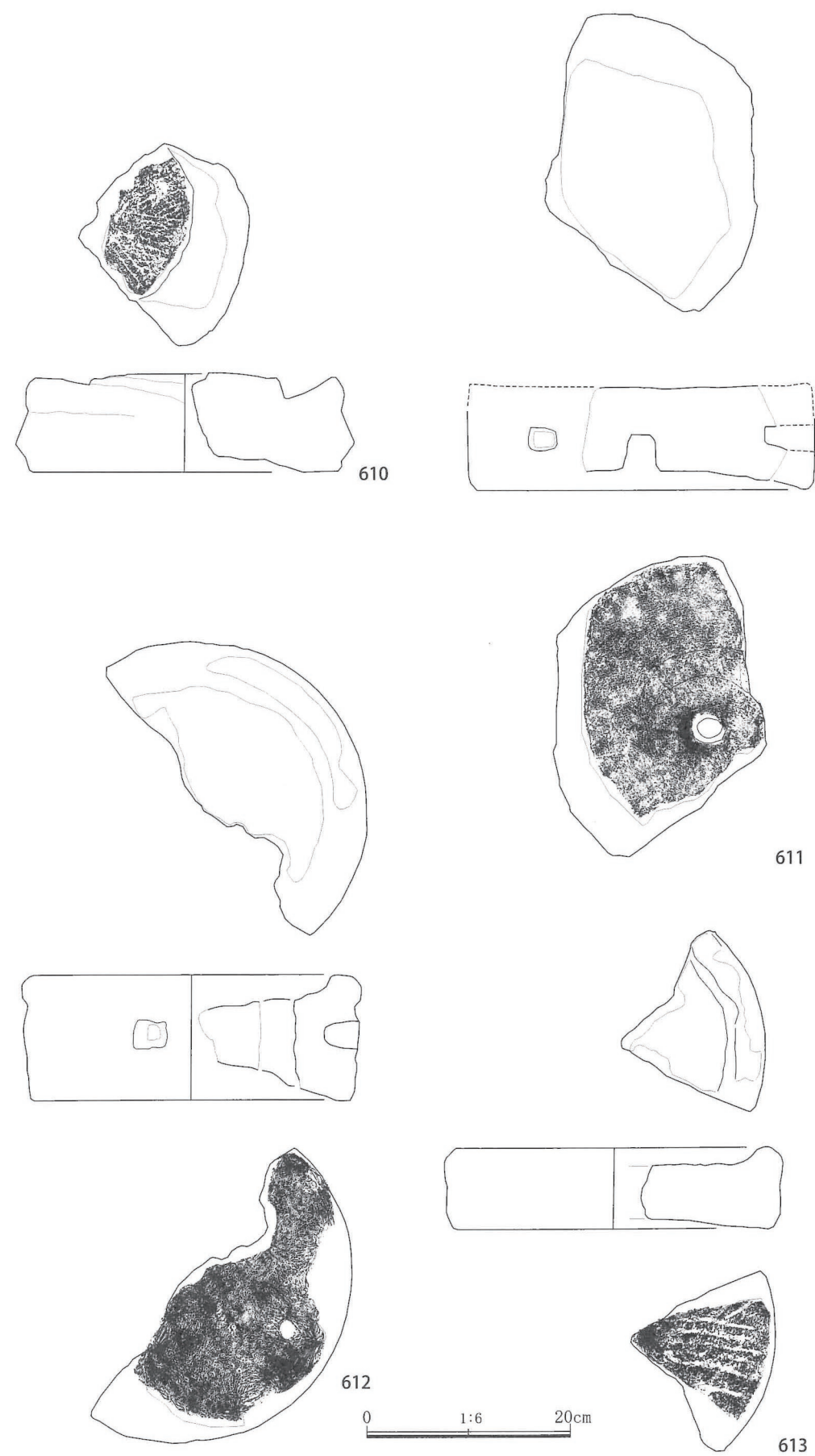
第 221 图 本丸地区出土遺物 17



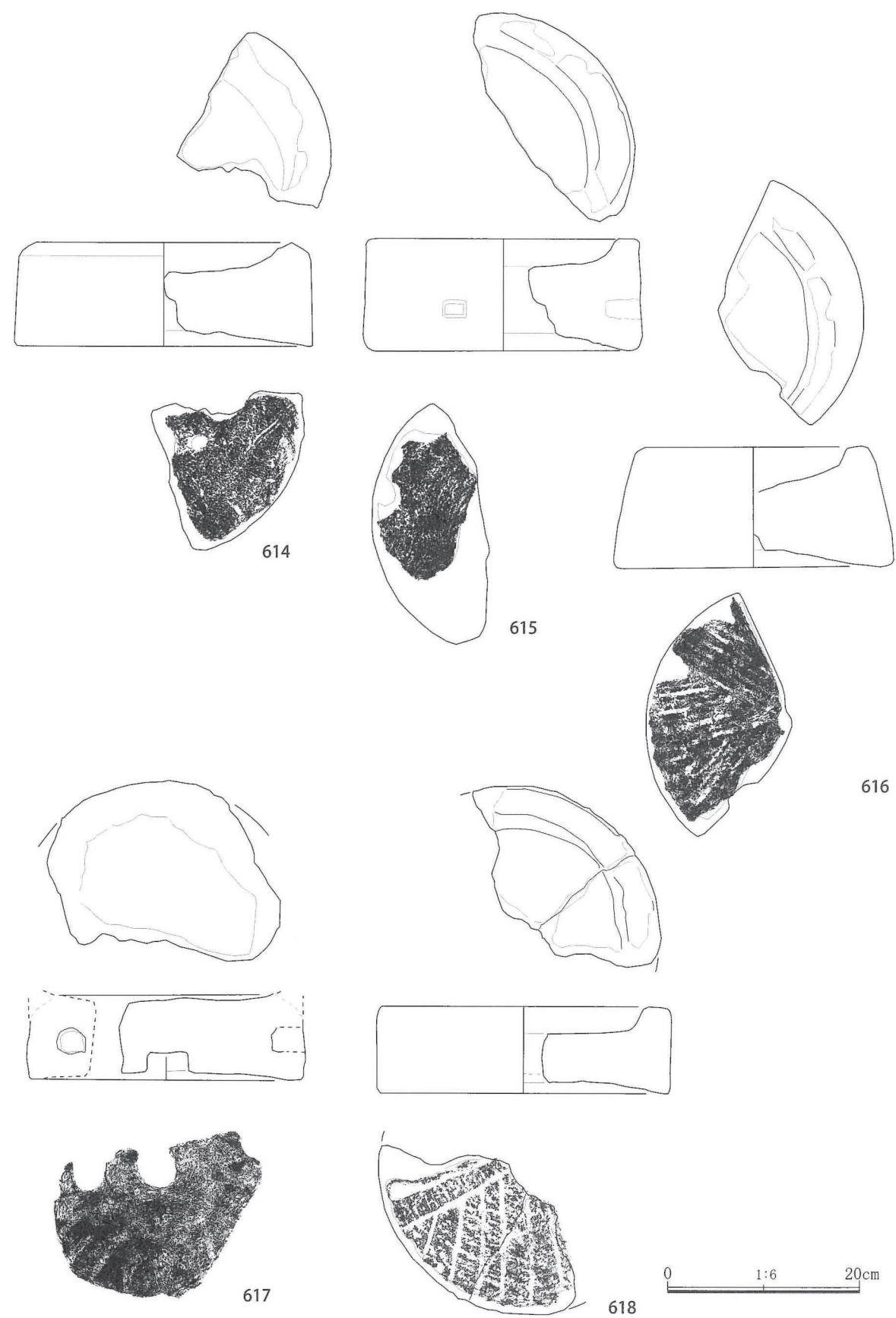
第 222 图 本丸地区出土遺物 18



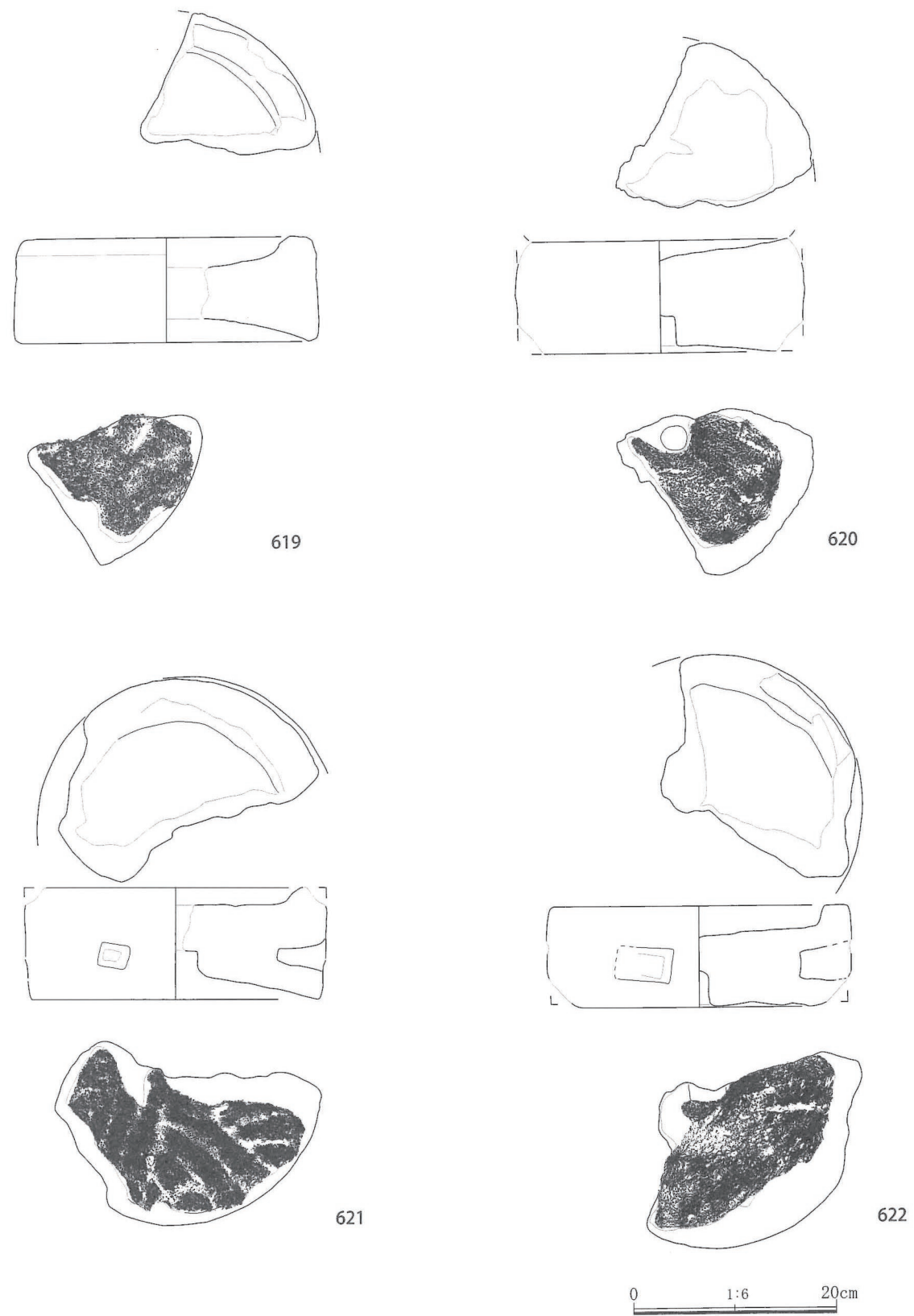
第 223 图 本丸地区出土遺物 19



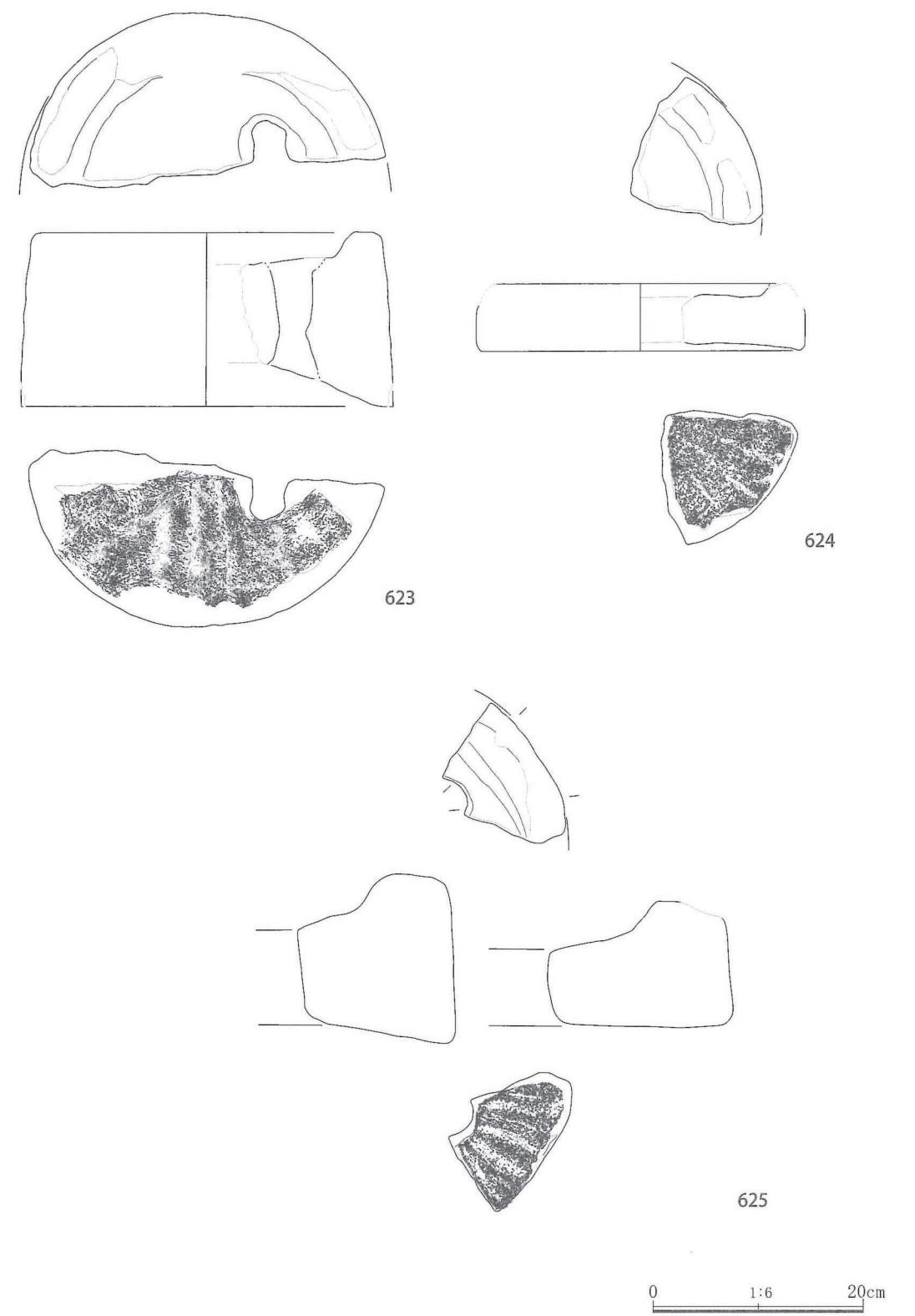
第 224 図 本丸地区出土遺物 20



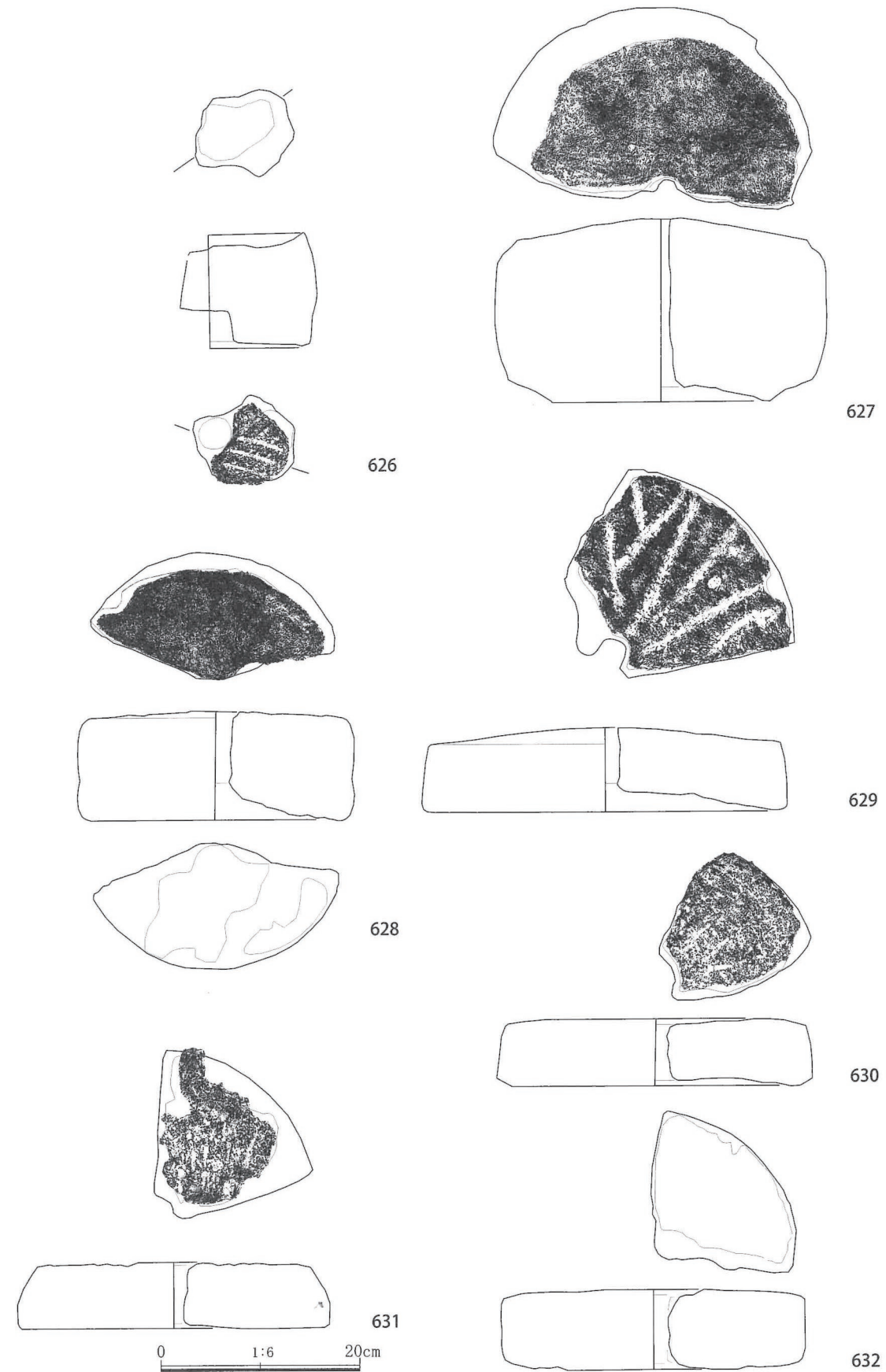
第 225 図 本丸地区出土遺物 21



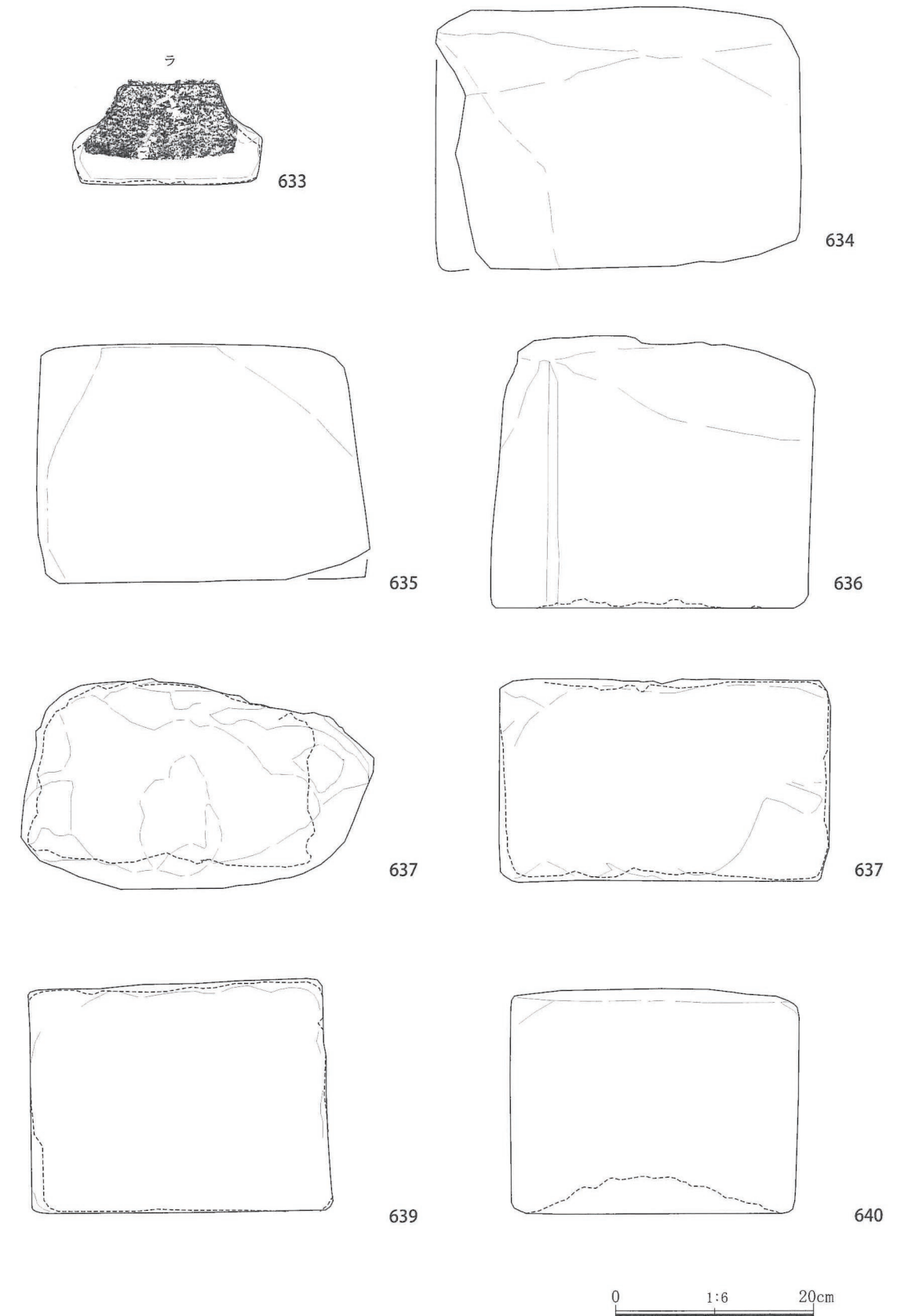
第 226 図 本丸地区出土遺物 22



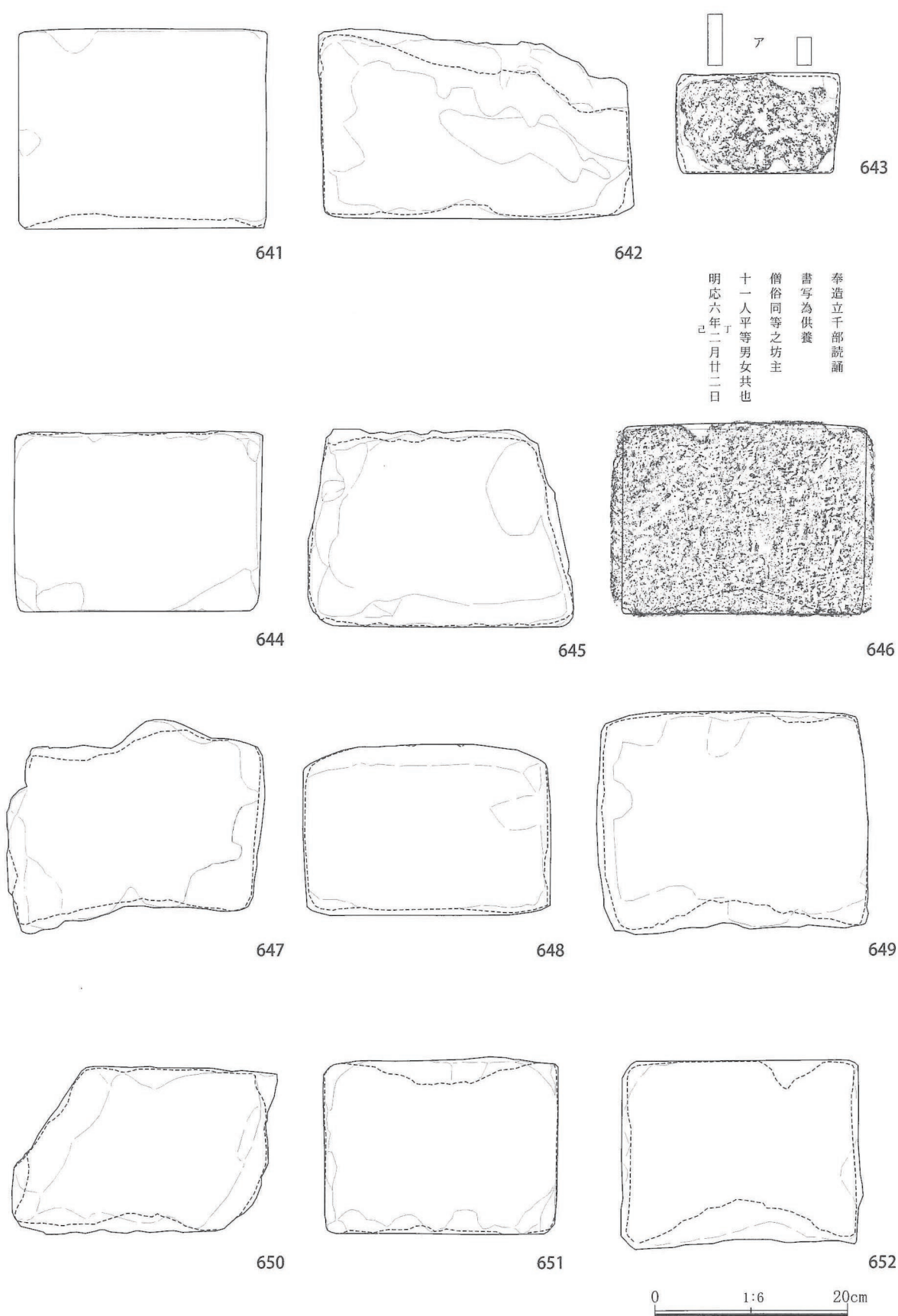
第 227 図 本丸地区出土遺物 23



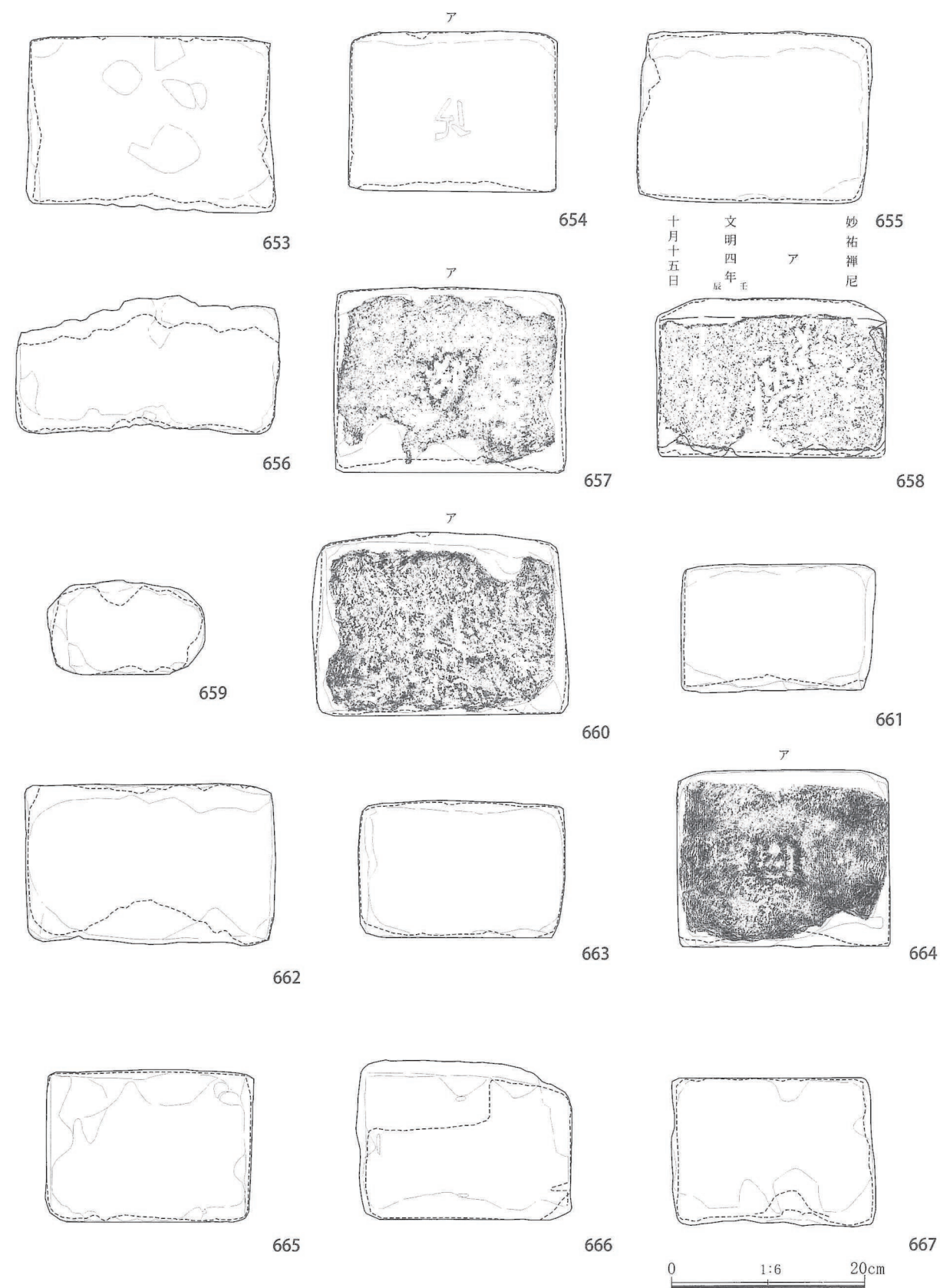
第 228 図 本丸地区出土遺物 24



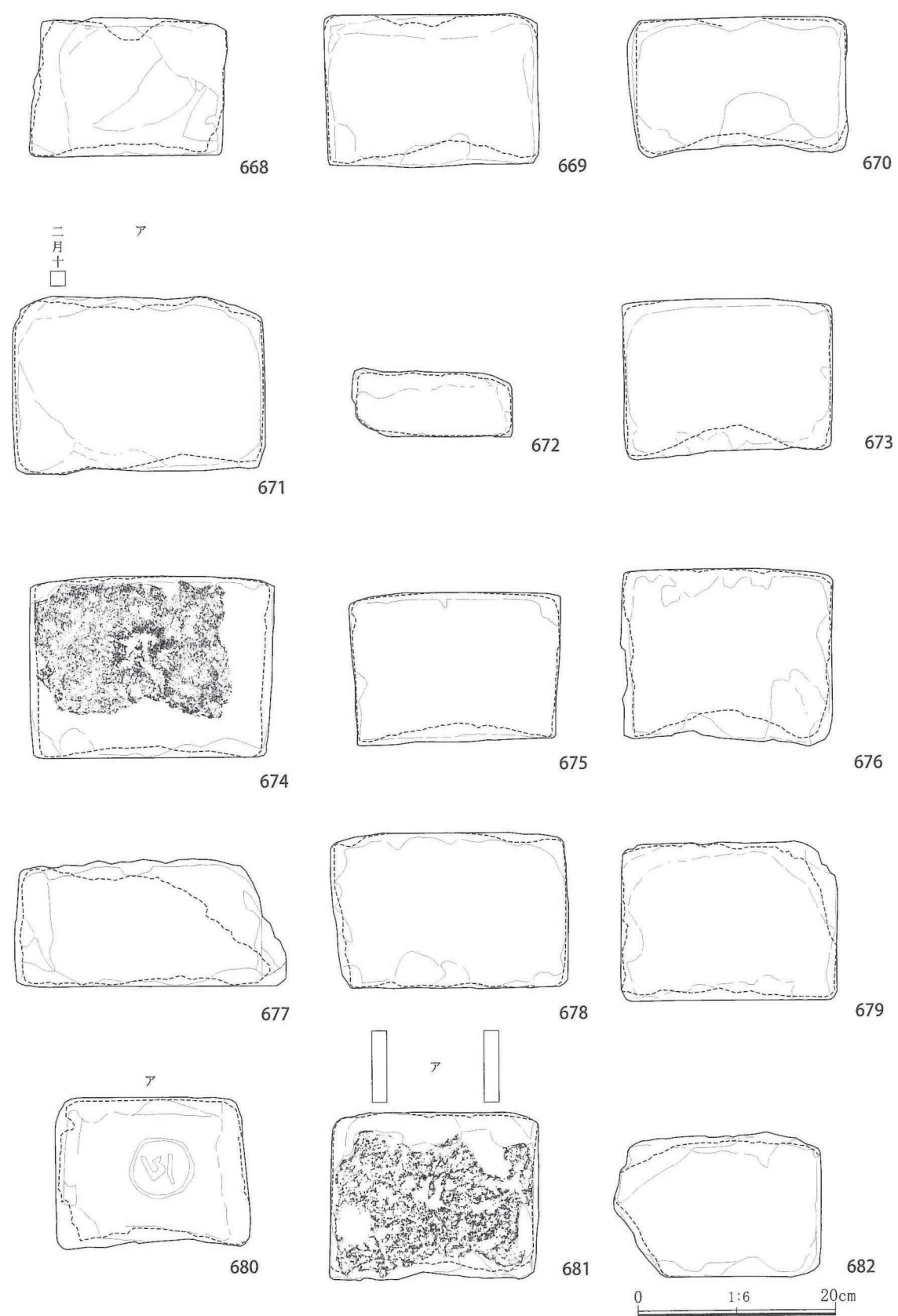
第 229 図 本丸地区出土遺物 25



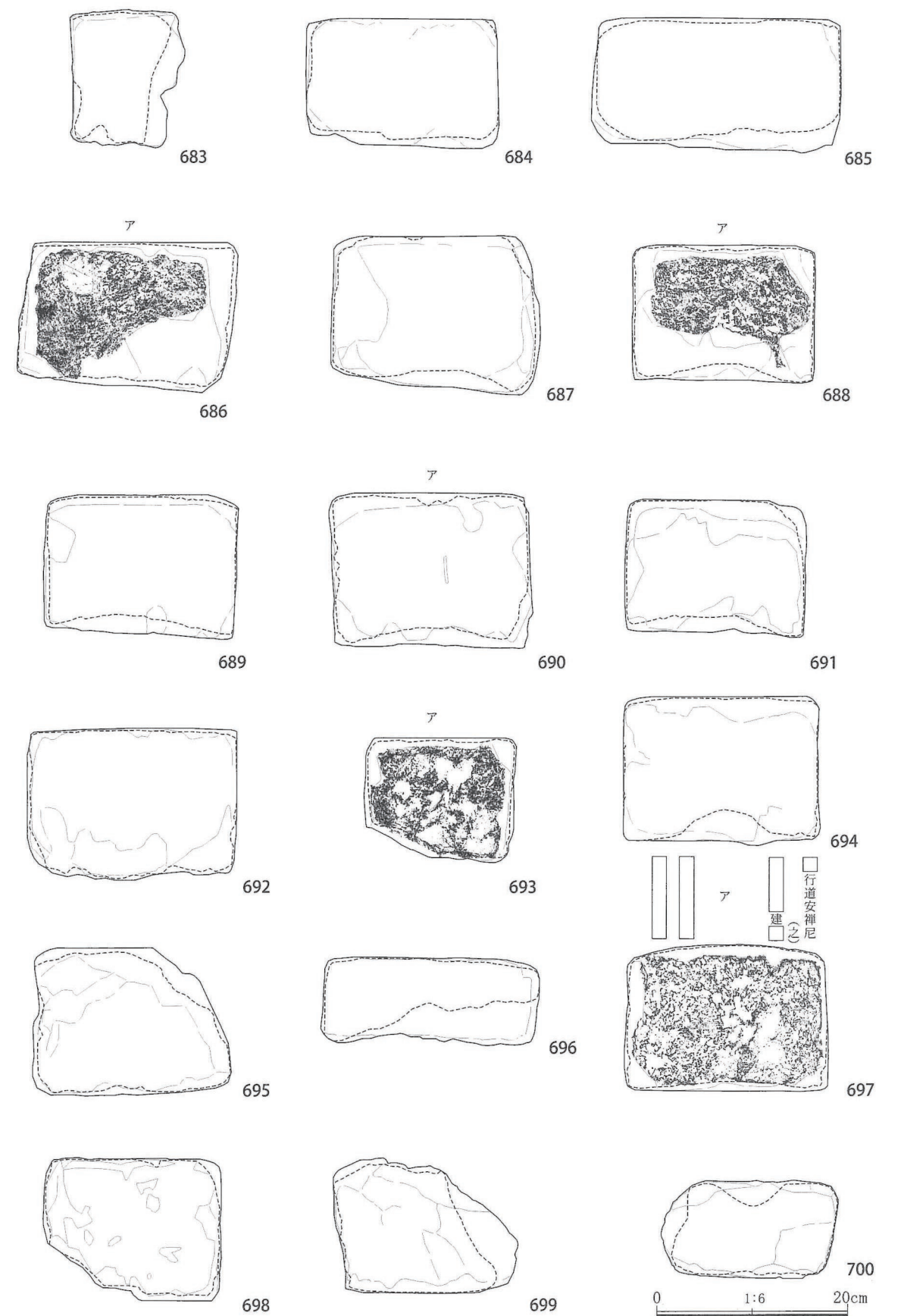
第 230 図 本丸地区出土遺物 26



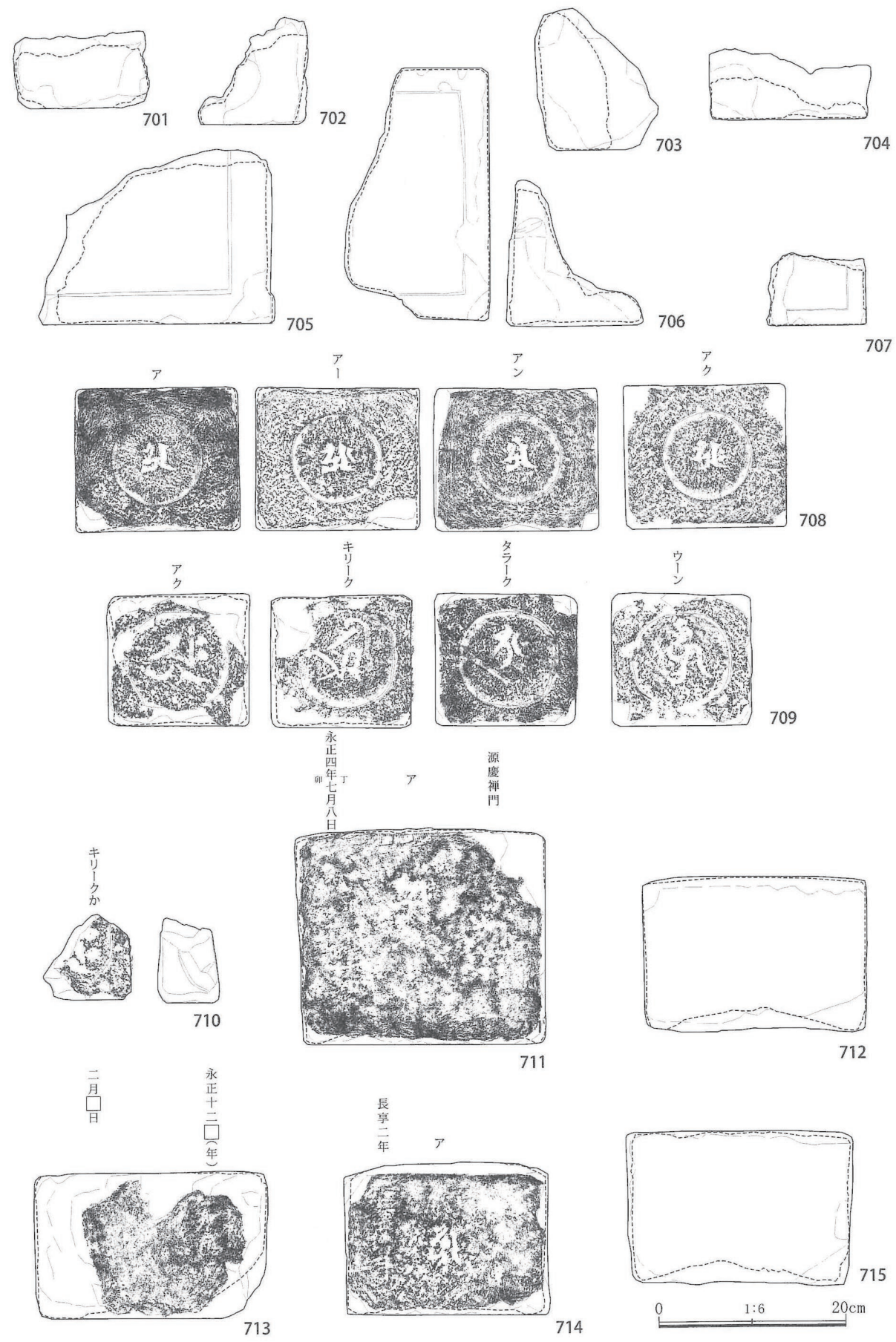
第 231 図 本丸地区出土遺物 27



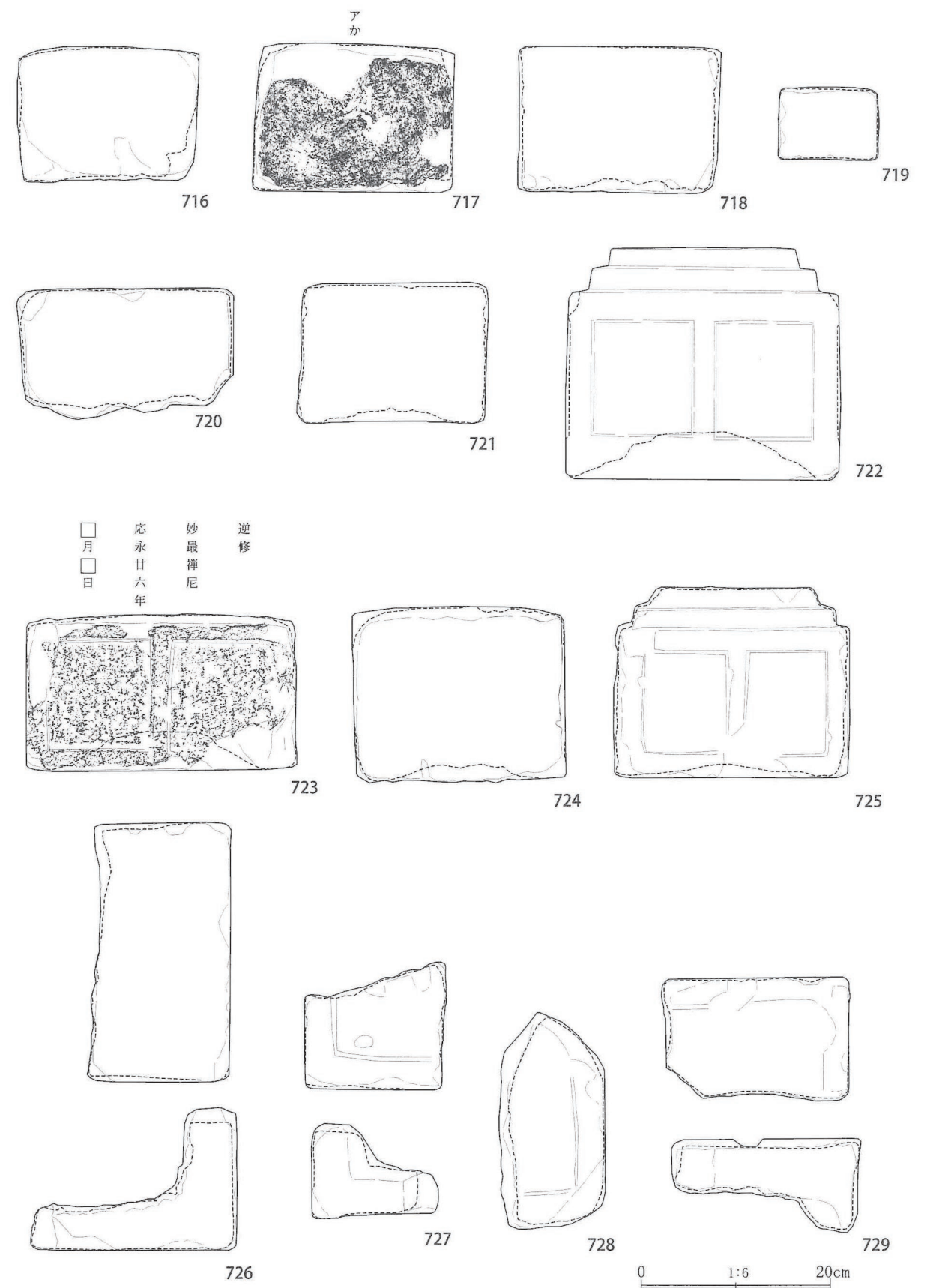
第 232 図 本丸地区出土遺物 28



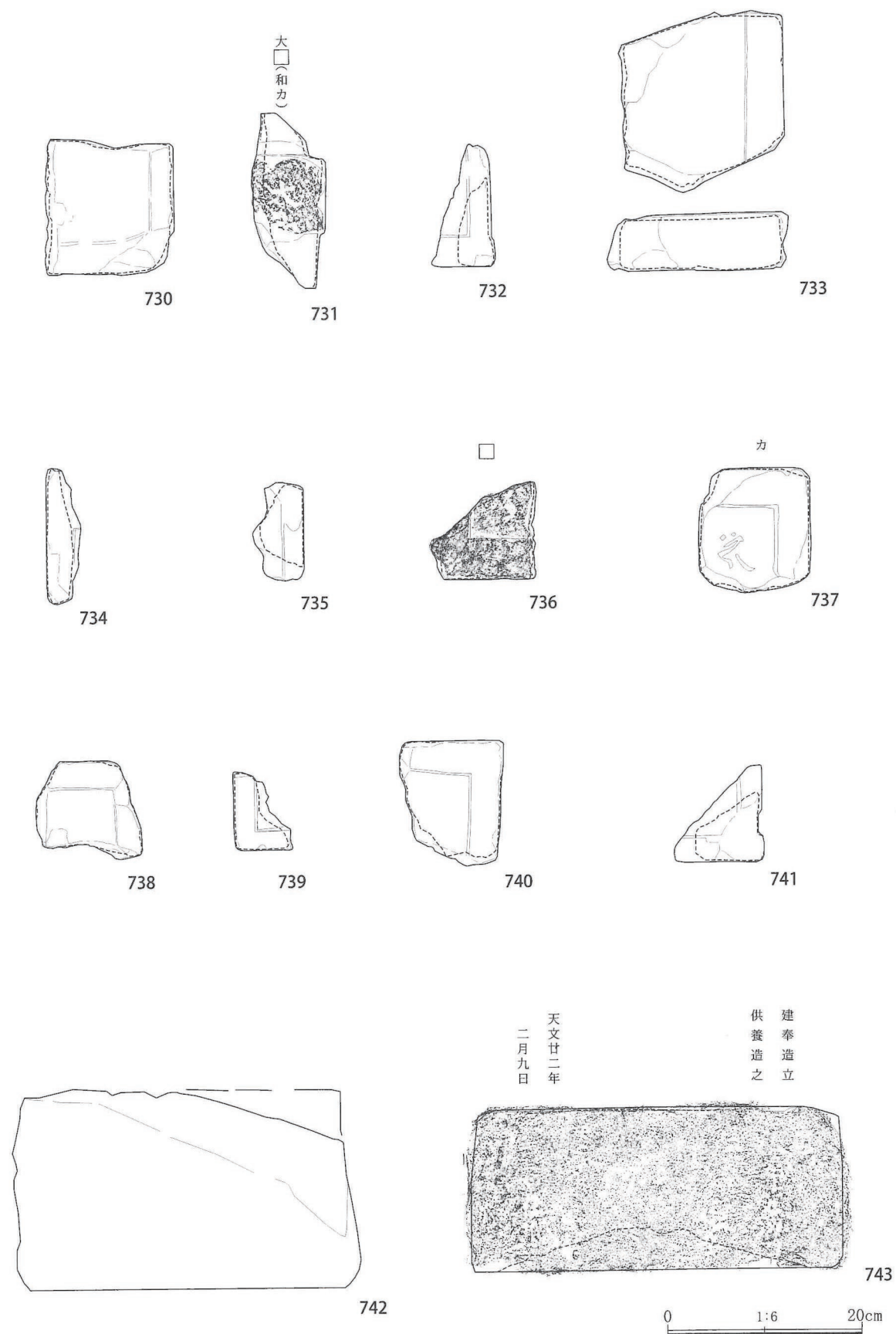
第 233 図 本丸地区出土遺物 29



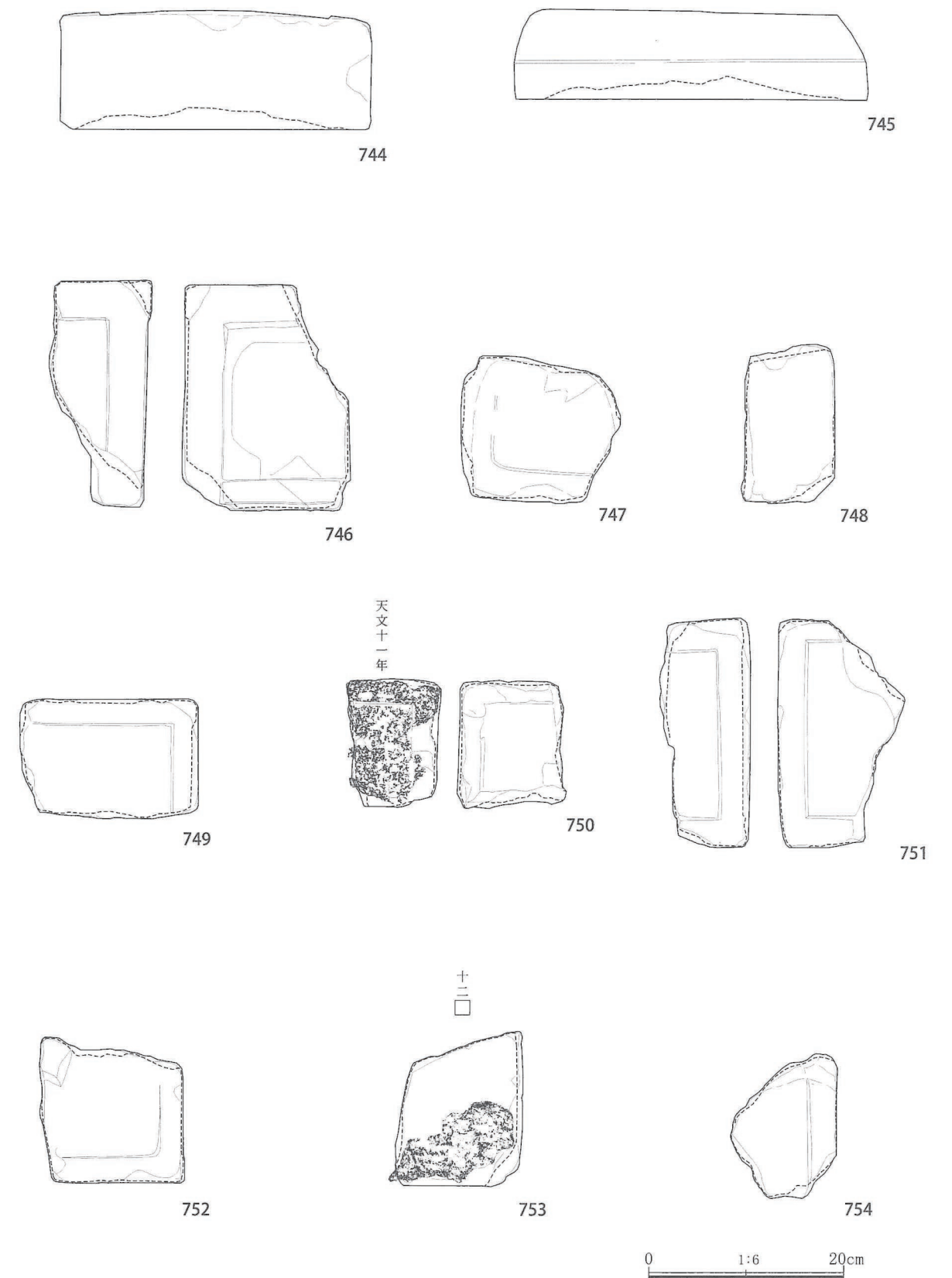
第 234 図 本丸地区出土遺物 30



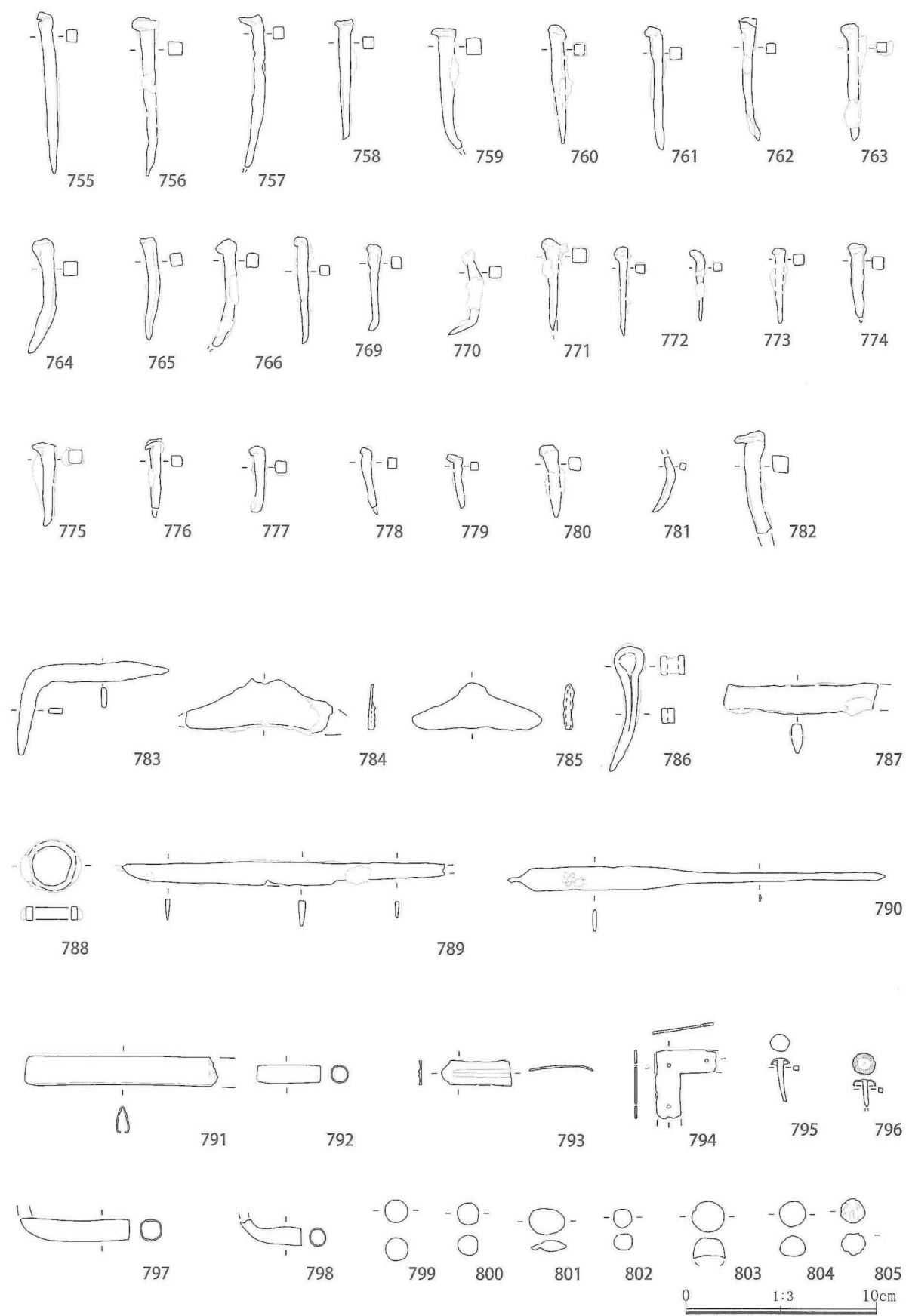
第 235 図 本丸地区出土遺物 31



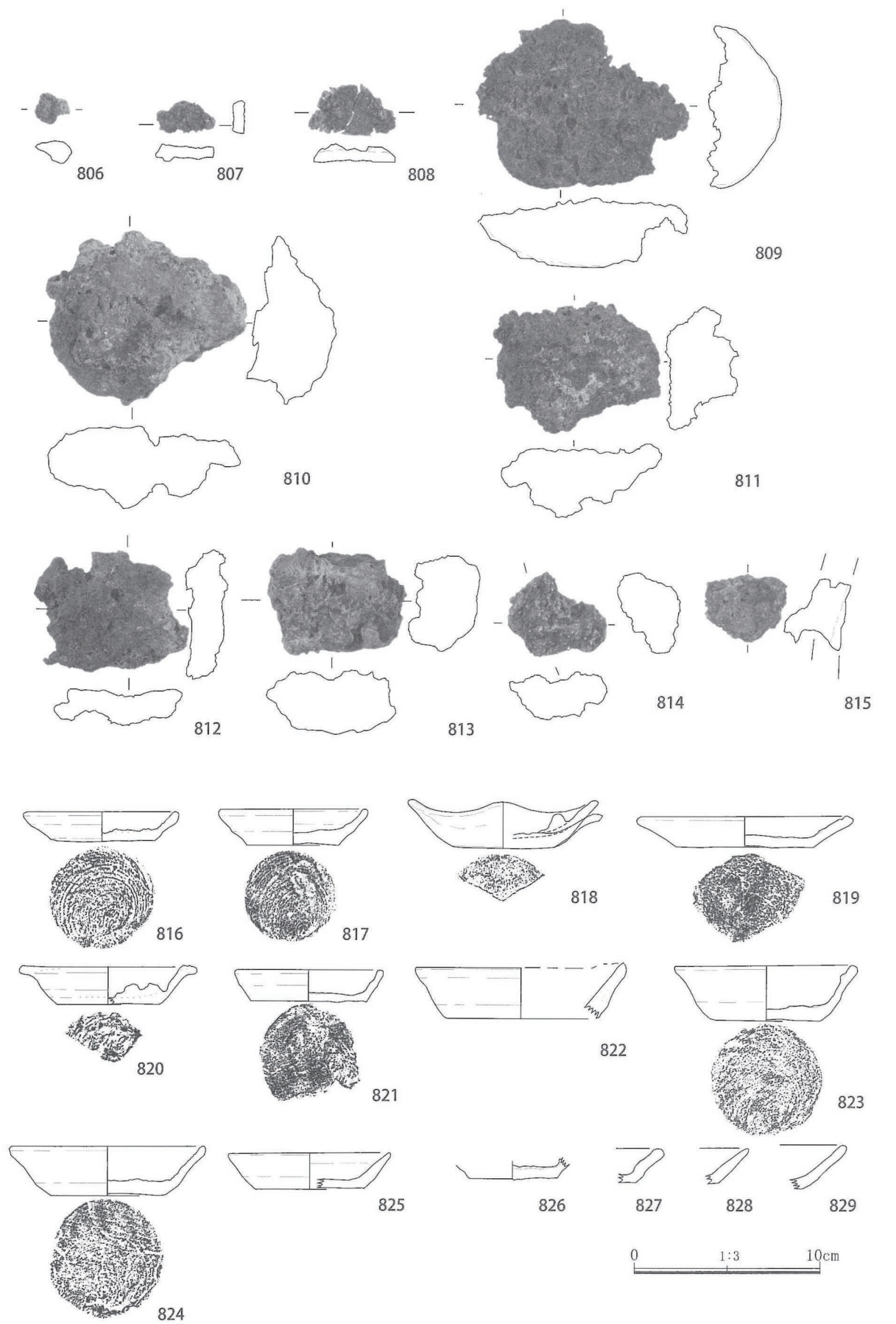
第 236 図 本丸地区出土遺物 32



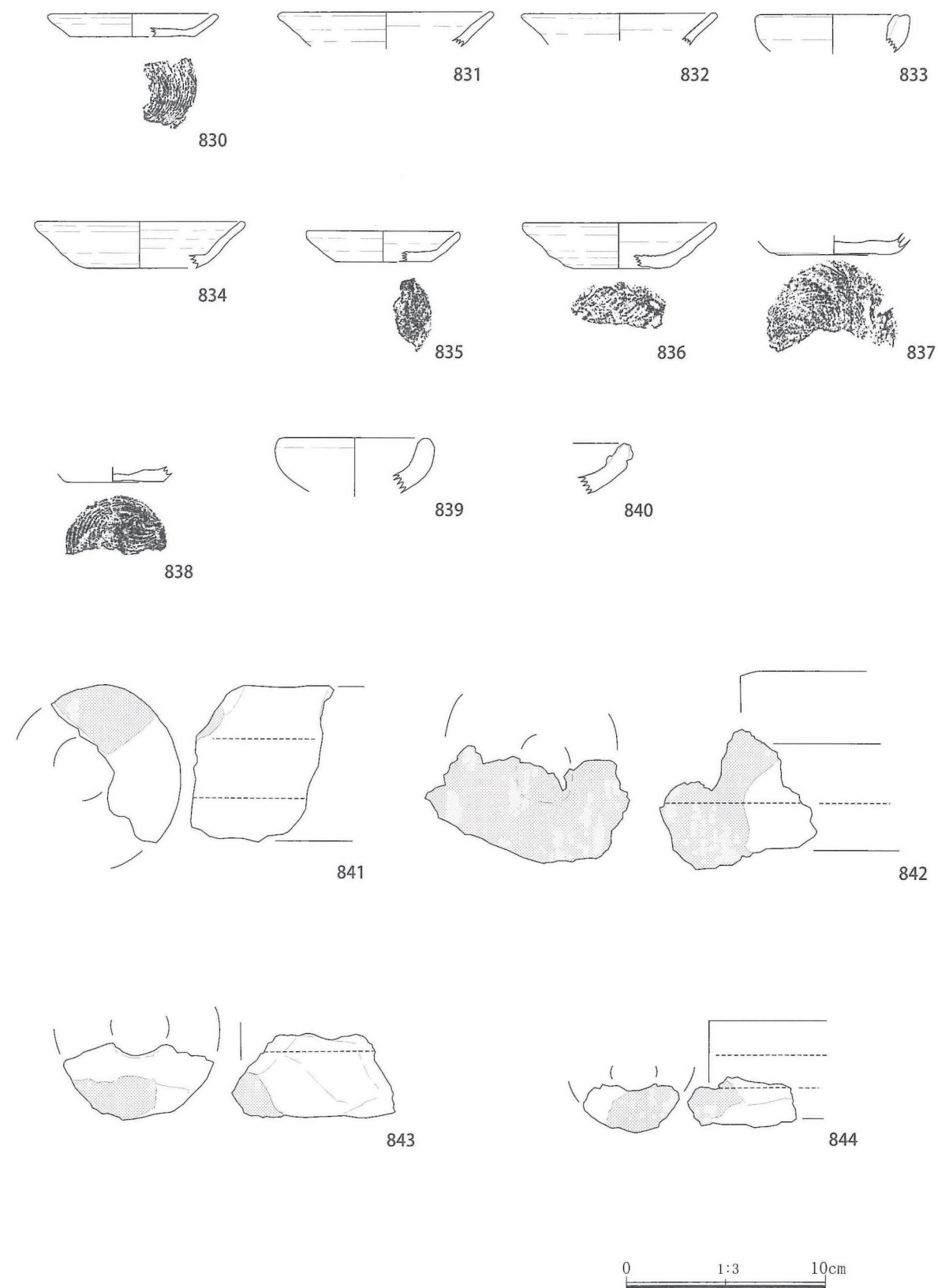
第 237 図 本丸地区出土遺物 33



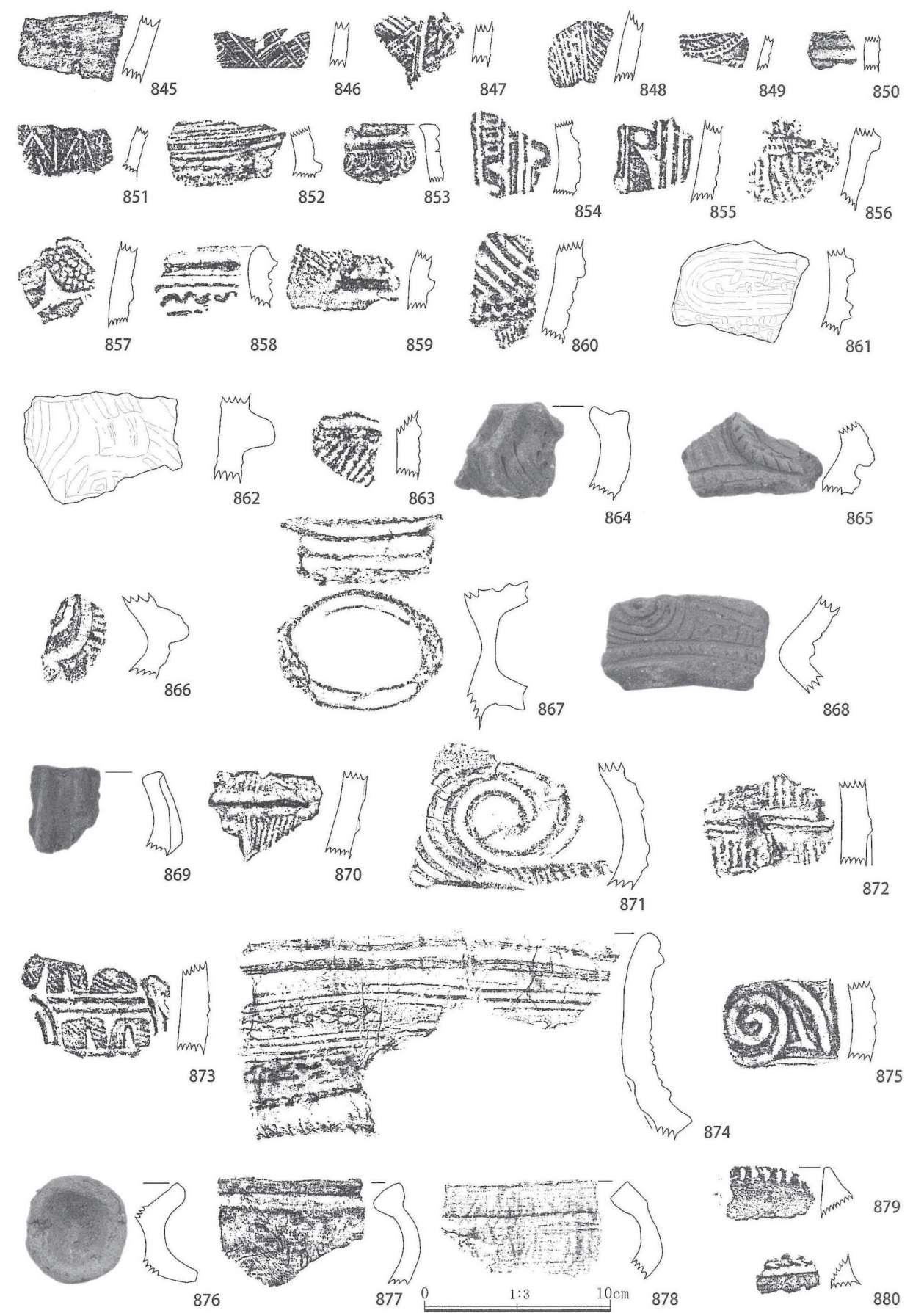
第 238 图 本丸地区出土遗物 34



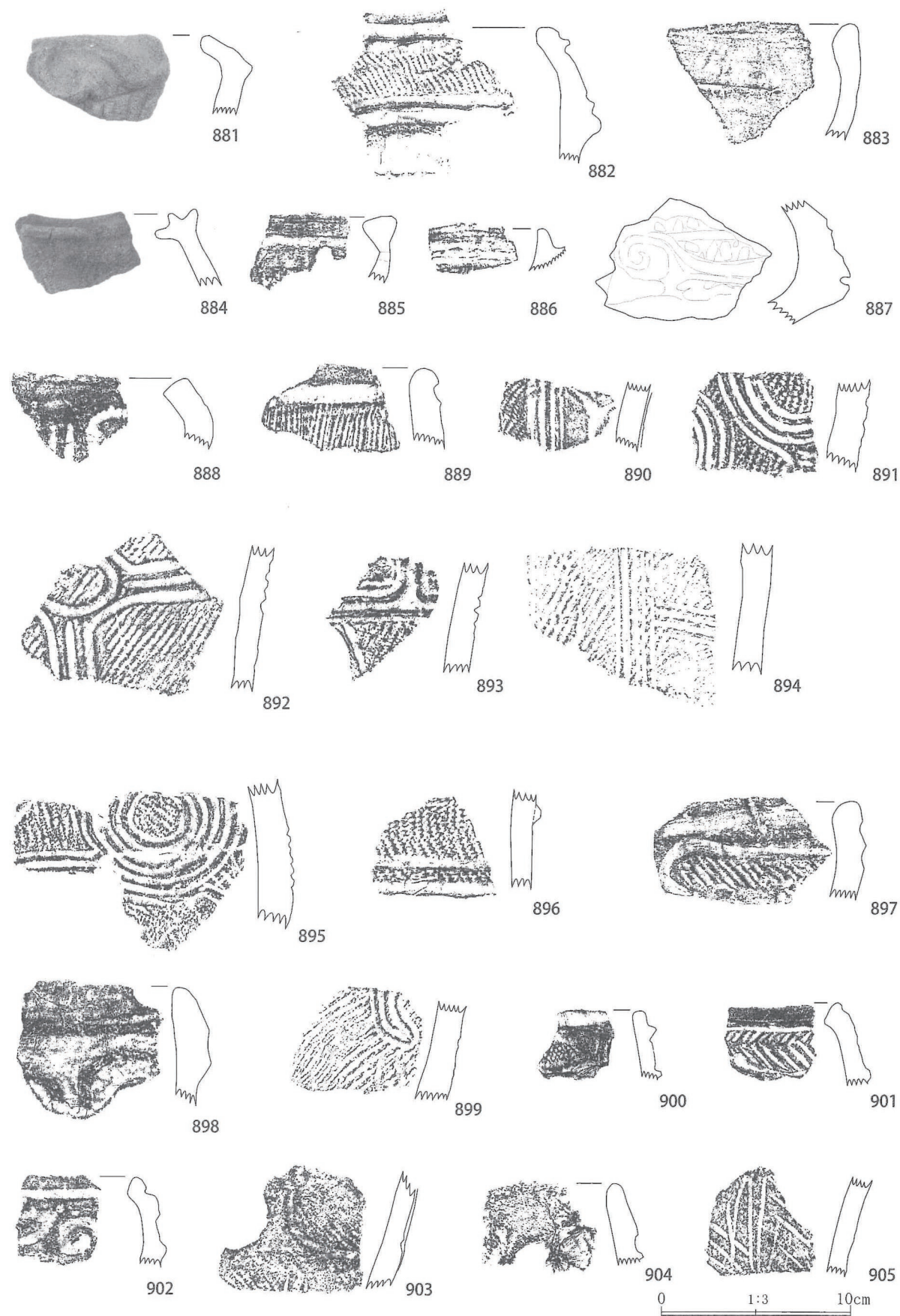
第 239 图 本丸地区出土遗物 35



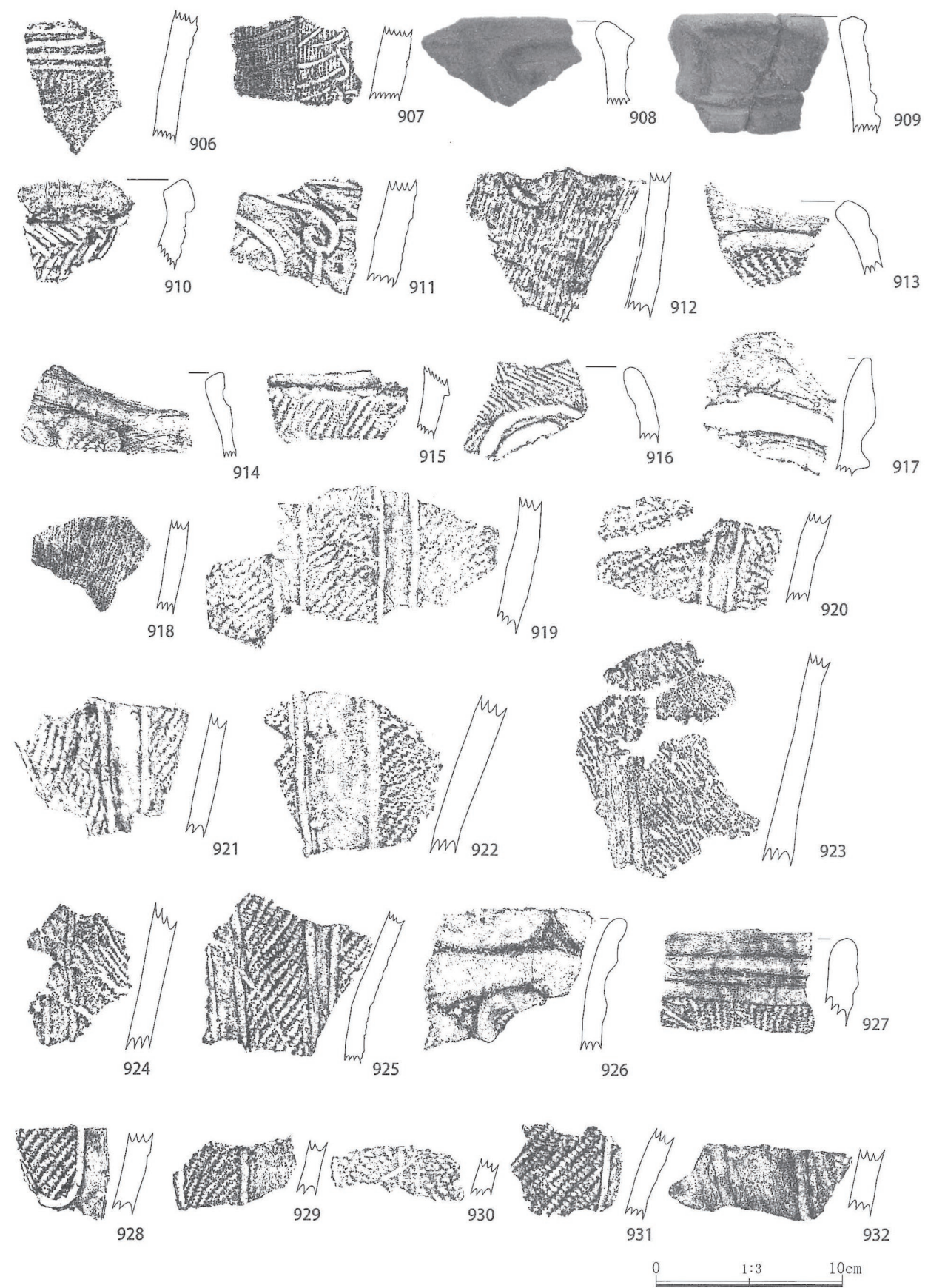
第 240 图 本丸地区出土遺物 36



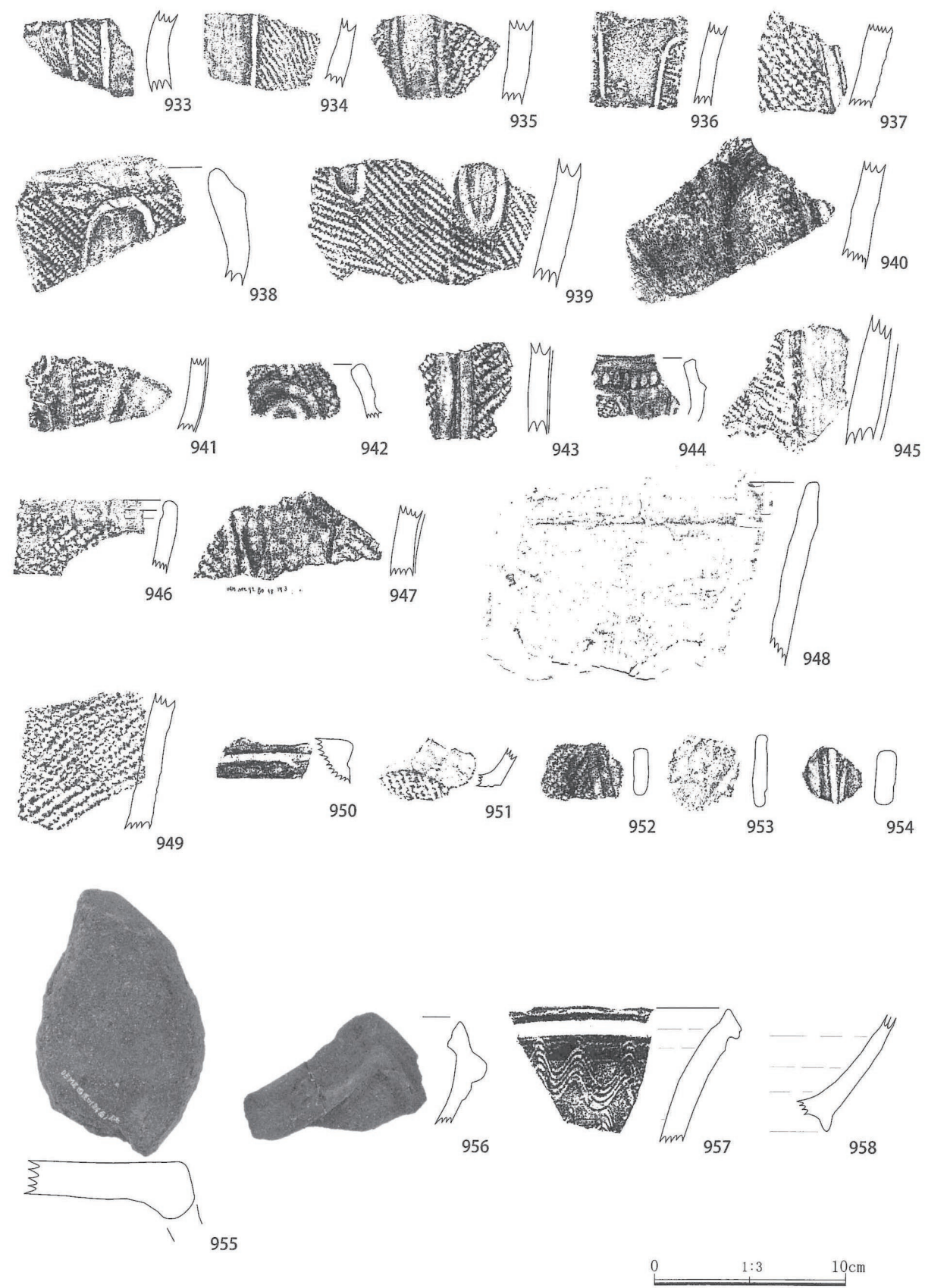
第 241 图 本丸地区出土遺物 37



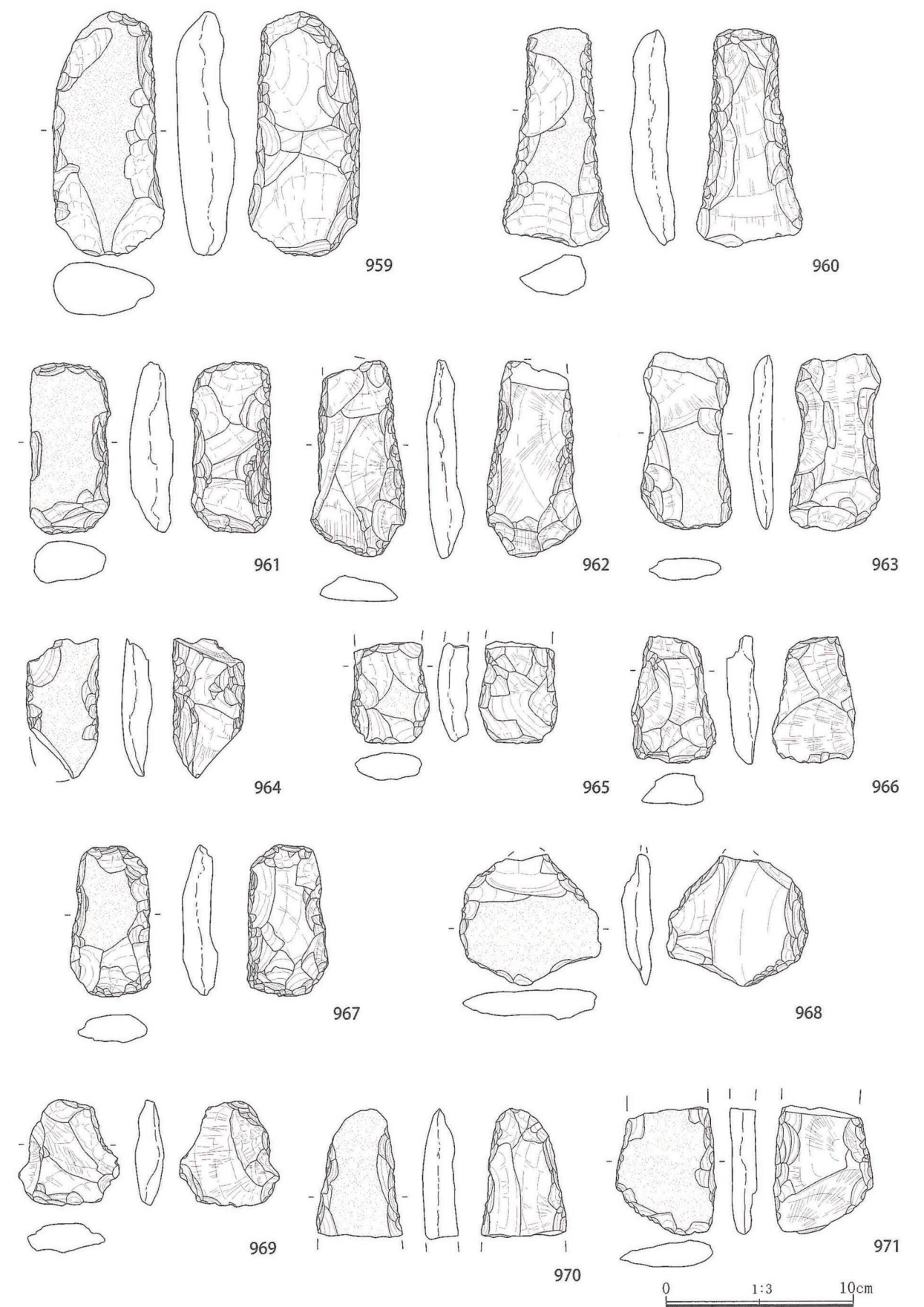
第 242 图 本丸地区出土遗物 38



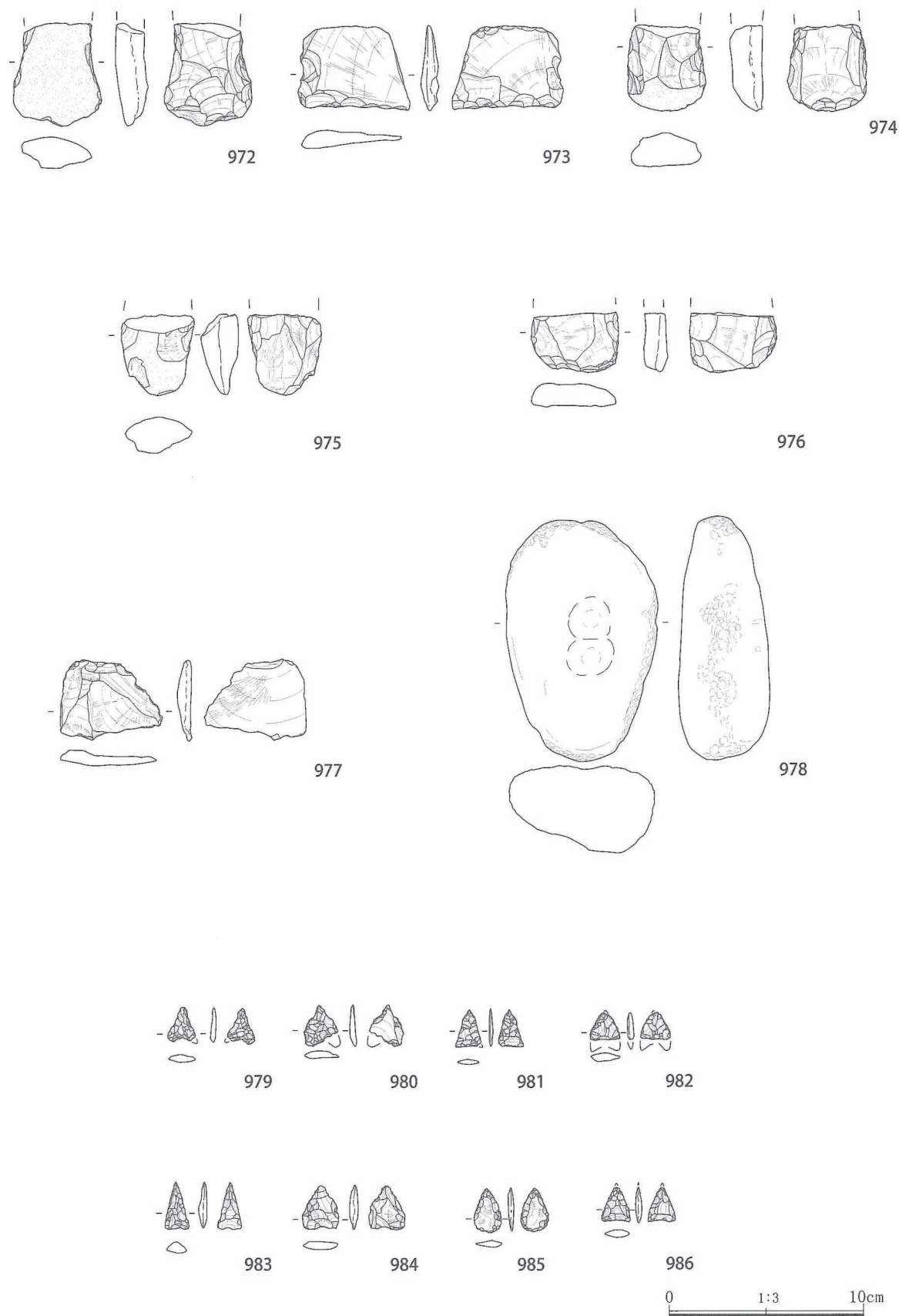
第 243 图 本丸地区出土遗物 39



第 244 图 本丸地区出土遺物 40



第 245 图 本丸地区出土遺物 41



第 246 図 本丸地区出土遺物 42

7 御前曲輪西虎口、御前曲輪・通仲曲輪間地区の調査

(第 247～260 図、PL47・48、PL137～147、PL214～217)

(1) 御前曲輪西虎口地区 (第 248・249 図)

御前曲輪から本丸に入る場所である本丸北虎口において、幅 5.36m の門跡が確認され、本丸の三箇所虎口で最も大きな門となることから、その重要性に鑑み御前曲輪から本丸へに入るルートが大きな課題となった。同様に通仲曲輪から御前曲輪へ入ってくるルートの解明も課題となった。御前曲輪西側で土塁が切れている箇所があったことから、虎口が想定されたため、この虎口 (御前曲輪西虎口) を解明することを目的として調査を行った。

調査は虎口中央部が想定される箇所に、十字にベルトを設定し掘り下げた。調査を進めていくと、大量の礫が出土し始めた (PL137)。既年度までの調査で、ほとんどの虎口で付近にあった石垣を大量に崩している層が検出されていたこともあり、今回も同様な状態であると推測された。保存整備委員会の指導により、礫の出土状況の写真撮影後、ベルト、及び礫を取り除き、門跡の面まで下げることにし、さらに掘り進めて行った。その結果、極めて良好に門跡が残っていることが確認された。

S1～S6 までが他の石と比較して大きく、フラットであるため門の礎石と考えられる。最大径で 50～60cm の平らな河原石で加工はされていない。S2 と S5 は、他の石と比較してレベルが高い。各礎石間の距離は芯々距離で、S1・S2 間で 1.5m、S2・S3 間で 1.6m、S1・S3 間で 3.1m、S4・S5 間で 1.5m、S5・S6 間で 1.6m、S4・S6 間で 3.1m、S1・S4 間で 3.1m、S2・S5 間で 3.1m、S3・S6 間で 3.1m になる。

門の雨落ち溝を兼ねた石組排水溝も良好に残っていた。SD1 は、溝の走行方向から、虎口南東側の土塁の裾を巡り、SD3 に接続する溝と考えられる。石塔が 4 石使われていた以外は河原石で側石と底石を構成している。南東方向から南西方向へクランクするあたりまで、側石の多くは抜かれていたが、底石は残っていた。SD2 は溝の走行方向から虎口北方向の土塁裾を巡る溝にあたり、SD3 と接続している。石塔が 1 石使われている以外は河原石を側石・底石に使っている。北方向から南西方向へクランクするあたりまでの溝東側の側石は抜かれていたが、他の大部分は残っていた。SD3 は門背面の雨落ち溝も兼ねた溝である。底石の間詰め石以外は石塔が用いられていた。溝北西端部は地山の土塁に接するように造られ、石は使われていない。SD4 は SD3 に溜まった水を門前面の SD5 に流す溝で、SD5 側へ傾斜している。底石の間詰め石以外はほぼ全ての石に石塔が用いられているが、門礎石にあたる S1・S2・S3 は溝の側石も兼ねている。SD5 は門前面の雨落ち溝も兼ねた溝である。北西端の残りが悪い。SD3 との対応関係から北西端は、本来あと 1m 程度分は石があったと推測される。底石の間詰め石を除くと、ほとんどが石塔である。SD6 は南西端の標高が最も低く、虎口南西側の堀に水を落としていたと推測されるが、南西端が完全に残っていなかったため、どのように堀に水が落とされたのかは不明である。

これらの溝底の標高は、SD1 南東端で 279.30m、SD1 と SD3 が接続する箇所で 279.12m、SD2 北端で 279.22m、SD2 と SD3 が接続する箇所で 279.14m、SD4 と SD5 が接続する付近で 279.06m、SD5 と SD6 が接続する箇所で 278.98m、SD6 南西端で 278.91m となる。

S4 と S6 の南東側には石垣が残っていた。SV1 は最大高 80cm、SV2 は最大高 46cm である。大きめの石と石垣裏側の栗石サイズの石が大量に虎口内で出土していることから、これらの石は石垣に使われていたと考えられ、本来 SV1・SV2 はさらに高かったことが想定される。また、SV1 と SV2 をつなぐ石垣や S1・S2・S3 の北西側にも石垣が本来あった可能性も考えられるが、確認はされなかった。完全に崩されてしまったのであろうか。なお、石垣が崩された層は石組排水溝が完全に埋まりきった後に、形成されている。したがって、門が廃絶されたと、排水溝が埋まりきるまで、ある程度の期間を経た後に崩されたことになり、門廃絶直後に崩されたわけではないことを物語っている。石組排水溝の埋土には砂質土が堆積しており、水の流れがあ

ったことがうかがえた。

両側の土塁は地山を削りだして造られていた。土塁上部では、表土をはぐと、As-B 層が確認され、その下に地山の黒色土があり、途中に As-C 層も確認されている。門の構築面付近は丁度黒色土からローム層に変わっていくあたりになる。虎口は地山を削りだして、排水溝を設置する場所についてはさらに 5～20cm ほど掘り込んだあとに、排水溝の底石・側石、礎石を設置して、排水溝側石の上面まで、土を充填していることが、一部のサブトレンチなどの土層観察の結果、推測できた。なお、郭馬出西虎口の調査では、硬化面が確認されているが、今回の虎口では顕著な硬化面は確認されていない。

S1・S2 の間、S2・S3 の間、及び S4・S5 の間、S5・S6 の間には石塔が並べられていた。郭馬出西虎口、本丸北虎口でも石塔・河原石の違いはあるが、同様な遺構が確認されている。門の側壁を支えるような基礎であろうか。

S3・S6 間には、幅 20～30cm、深さ 7cm 程度の浅い掘り込み状の遺構が確認された。周囲の土に比較すると、ロームなどの混入が少なく、しまりが弱い土であった。位置的には S3 と S6 をつなぐ箇所のため、S3・S6 間の根太などの痕跡とも考えられようか。

この虎口では、計 156 石の石塔が用いられていた。銘があるのは 3 石あり、最新年号は天文 22 年（1553）銘である。構築年代を決定付けるような土器・陶磁器の出土はなく、この銘が唯一の手がかりになり、この年号より新しい時期に造られた門跡とはいえる。

（2）御前曲輪・通仲曲輪間地区（第 250～253 図）

SV2 は調査前から現地表に現れ、御前曲輪西虎口から出る橋に関わる石垣と推測されていた。

調査を進めていくと、地表下約 30～70cm 程度で径 5cm 程度の大きさの礫を含んだ黄褐色土に変わり始めた。また、SV2 北端付近では、地表下直下から、5cm 程度の小礫を中心に、石垣に使われそうな径 50cm 程度の石も出土した。後者の SV2 北端付近の石は、石垣が崩落、あるいは、崩されたものと判断し、写真撮影後、除去していった。その結果、SV2 北端の状況が明らかになり、北端部には石垣隅石があり、北東方向へさらに曲がっていく石垣（SV1）のあることが推測された。そのため、SV2 北端と南端部を東側に拡張し、SV1 の確認につとめた。また、一部のトレンチ調査によって、計 5cm 程度の礫を含む黄褐色土は、石垣構築時の盛土であることが判明した。調査区北西端部では SV3 が確認され、SV3 を境に北側は盛土が急激に落ち込んでいくことが判明した。また、調査区南東端は SV2 南端付近から盛土が次第に落ち込み始め、SV2 南端からさらに 2.5m 程度南にいったあたりから、その盛土が急激に落ち込み始めることがわかった。

SV2 は 13.5m にわたって確認された高さ 2.8m の石垣である。石垣構築にあたり盛土がされ、その盛土を若干掘り下げた場所に根石を据えている。サブトレンチ箇所で確認されている根石は長軸 20～30cm 程度と小さい。そして、その根石を隠すように径 5cm 程度の礫を大量に含んだ最大厚 30cm 程度の黄褐色土で盛土の上にさらに盛土している。石垣が機能していた時期の地面は、この盛土直上面であろう。石垣前面の 1～3m の範囲には、この盛土に含まれる大量の礫が特に集中していた。なお、盛土直上面から計測した高さは 2.8m であるが、盛土に隠れている根石を含め計測すると、高さ 3.15m の石垣になる。

SV2 南側上部は最南端部の石に向かってなだらかに傾斜するように積まれている。凹凸があまりなく傾斜しているため、当初から、このように積まれていた可能性がある。それを裏付けるように、最南端部の石のすぐ北側に本来あったような石が崩れた状態で 1 石出土した以外は、崩落したような石はこの付近ではほとんど認められていない。SV2 中央部の上端部も比較的同じ高さでそろっている。中央部やや北側で上部の石の無い箇所が認められるが、この直下では、崩落したと推測されるような石が出土している。また、SV2 北端部では、大量の石が崩落している状況が確認され、隅角部を中心に崩されている可能性があり、SV2 北端部の本来の高さほう少し高くなることが推測される。

SV1 は、SV2 と一連の石垣になり、隅石を介して接続している。高さは、最大で 2.34m である。ただし、サブトレンチ部で確認された根石を含めると 2.7m の高さになる。SV2 同様、根石の大きさは径 20～30cm 程度と小さい。SV1 南西端部は崩されていることから、本来の高さは SV2 同様もっと高かった可能性がある。SV1 はさらに調査区外の東側へ伸びていくが、どこまで伸びるかは調査では確認していない。今後の課題となる。

SV1、SV2 の傾斜角度は各エレベーション部の角度で 66 度～76 度である。石垣自体の高さが低いところもあるため、多少の誤差はあると思われるが、平均値の 69.7 度という数値はほぼこの石垣の傾斜角度と考えてよいであろう。

石垣根石のように見える石垣機能時の面に一部が隠れるように積まれている石は、1/4 石程度前にずらして積まれているように見える石が多かった。

裏込め部分は石垣上部の調査に危険を伴うため、大部分で調査ができなかったものの、SV2 南端部付近の調査によって、厚さ 1.6m にわたって裏込め石が充填されている状況が確認できた。径 5cm 程度の自然石を用いていた。

SV1・SV2 の石は、裏込め石を含め、全て城のすぐ西側を流れる榛名白川から採取できる輝石安山岩であった。石には加工の痕跡は見られず、河原石の状態のまま使っていることになる。ただし、石の最も平らな面を表にするようにして積んでいる。積み方としては「布目崩し」と呼ばれる、横目地が通らないような積み方であるが、詳細に見ると、下から 3 段目までは 1 段ごとに積んでいるように見え、その上からはあまり目地が通らずに積まれている。間詰め石は概ね径 5～20cm 程度の石を用いている。SV1・SV2 は以上のような特徴を有しており、三の丸地区の石垣の層位的な関係からうかがえた前後関係からは、新しい石垣の特徴を有している。

SV3 は、調査区最西部箇所で、高さ 0.62m でセットバックしてさらに 0.18m 分の石があり、合計すると 0.8m の高さになる。裏込め石はほとんどなく、積み方も乱雑さが目立ち、SV1・SV2 とは対照的な積み方となっている。崩落した石が調査区北西端で大量に出土しており、本来はもっと高かった石垣と思われる。石材は SV1・SV2 と同様に輝石安山岩の河原石を用いているが、1 石のみ角閃石安山岩を用いた五輪塔地輪の転用が認められた。

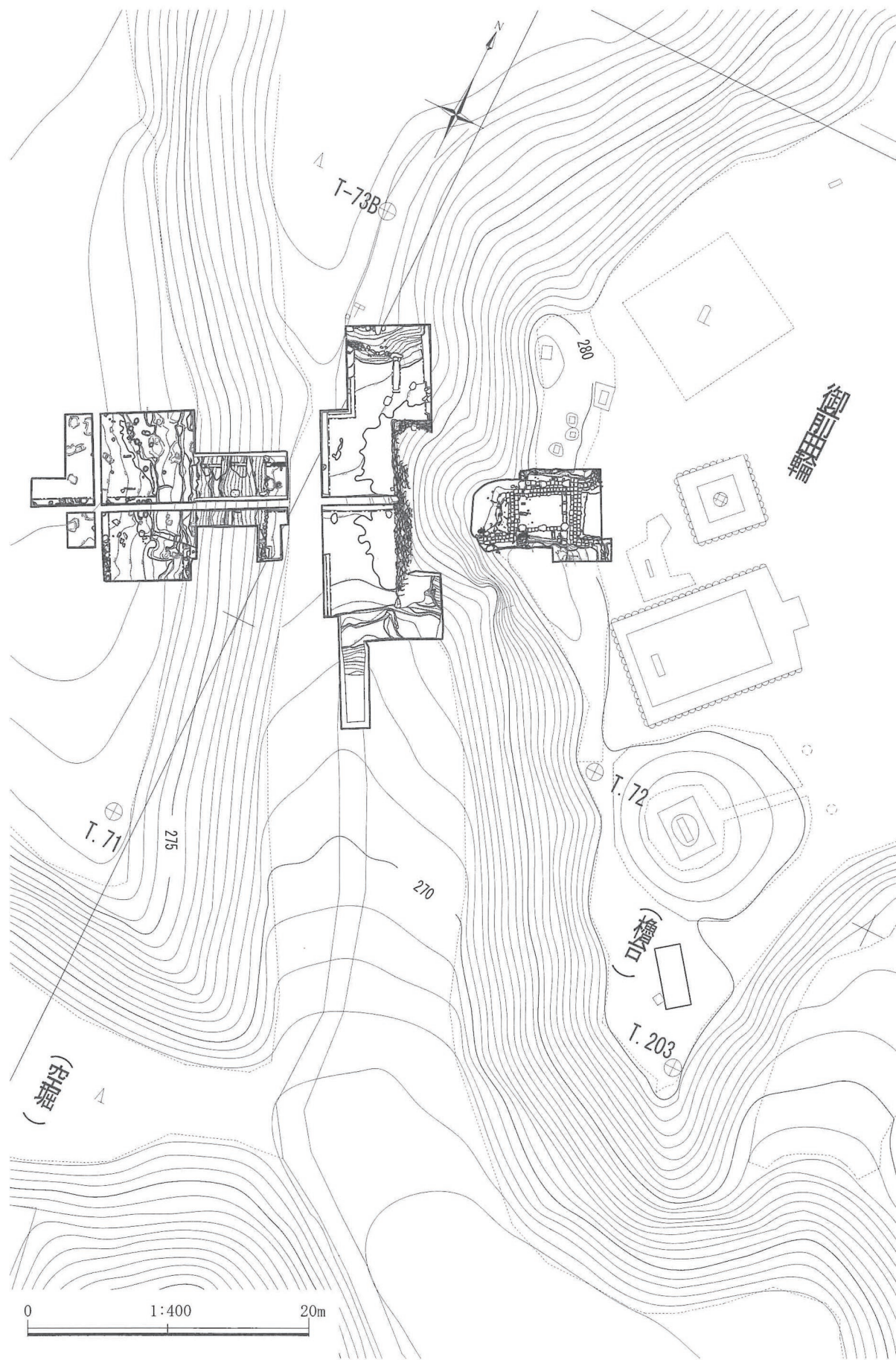
橋脚に関わる遺構を想定して調査を進めたが、礎石や柱穴は全く確認されなかった。SV2 上端部の高さが比較的そろっているため、本来の石垣の高さのままである可能性がある。そうした場合、SV2 上部に平坦面が広がり、その場所に礎石・柱穴がある可能性も考えられるが、今後の課題となった。

SV1・SV2 については、御前曲輪西虎口の直下に当たる位置に築かれた石垣のため、虎口との関連性が強いであろう。御前曲輪西虎口から、門の軸と一致する形で、西南方向へ橋が架かるとすれば、橋脚を支えるための何らかの施設である可能性が高いであろう。SV2 対岸側は未調査のため、詳細は不明であるが、少なくとも現地表で確認できるような石垣はなく、SV1・SV2 は城の正面性とも深く関わってくる石垣である。

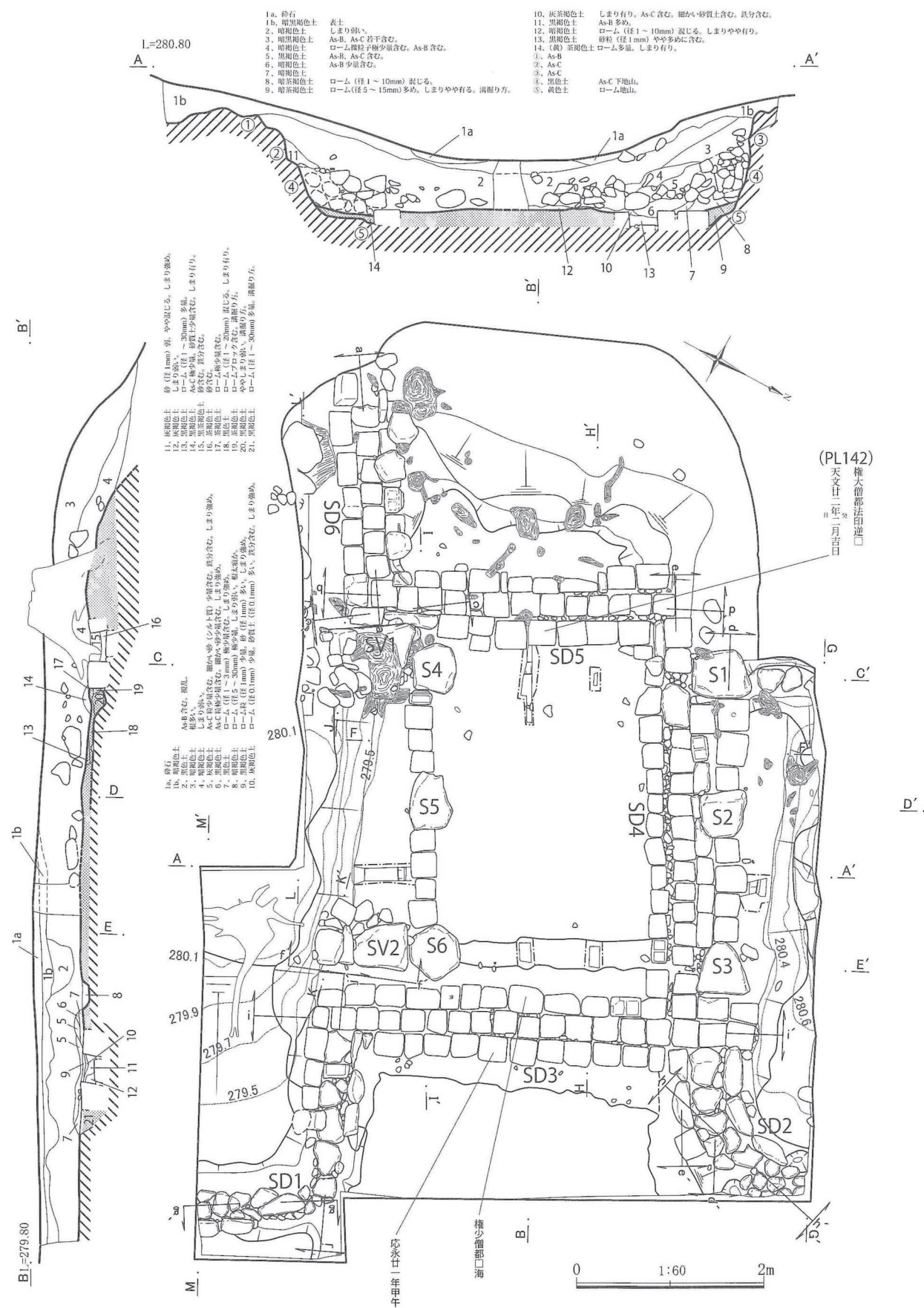
その他、今までの調査では最も隅石が残った状態で石垣が確認されているため、隅石部分の状況も記しておく。隅石は 3 石程残っており、SV2 側で、根石は長軸 67cm、2 石目は長軸 85cm、3 石目は長軸 70cm を測る。SV1 側では、根石が長軸 72cm、2 石目は長軸 42cm、3 石目は長軸 80cm になる。これらの数値から隅石の長辺が短辺の 2 倍になるとされる算木積みには至っていないことがわかる。

（3）出土遺物（第 254～260 図）

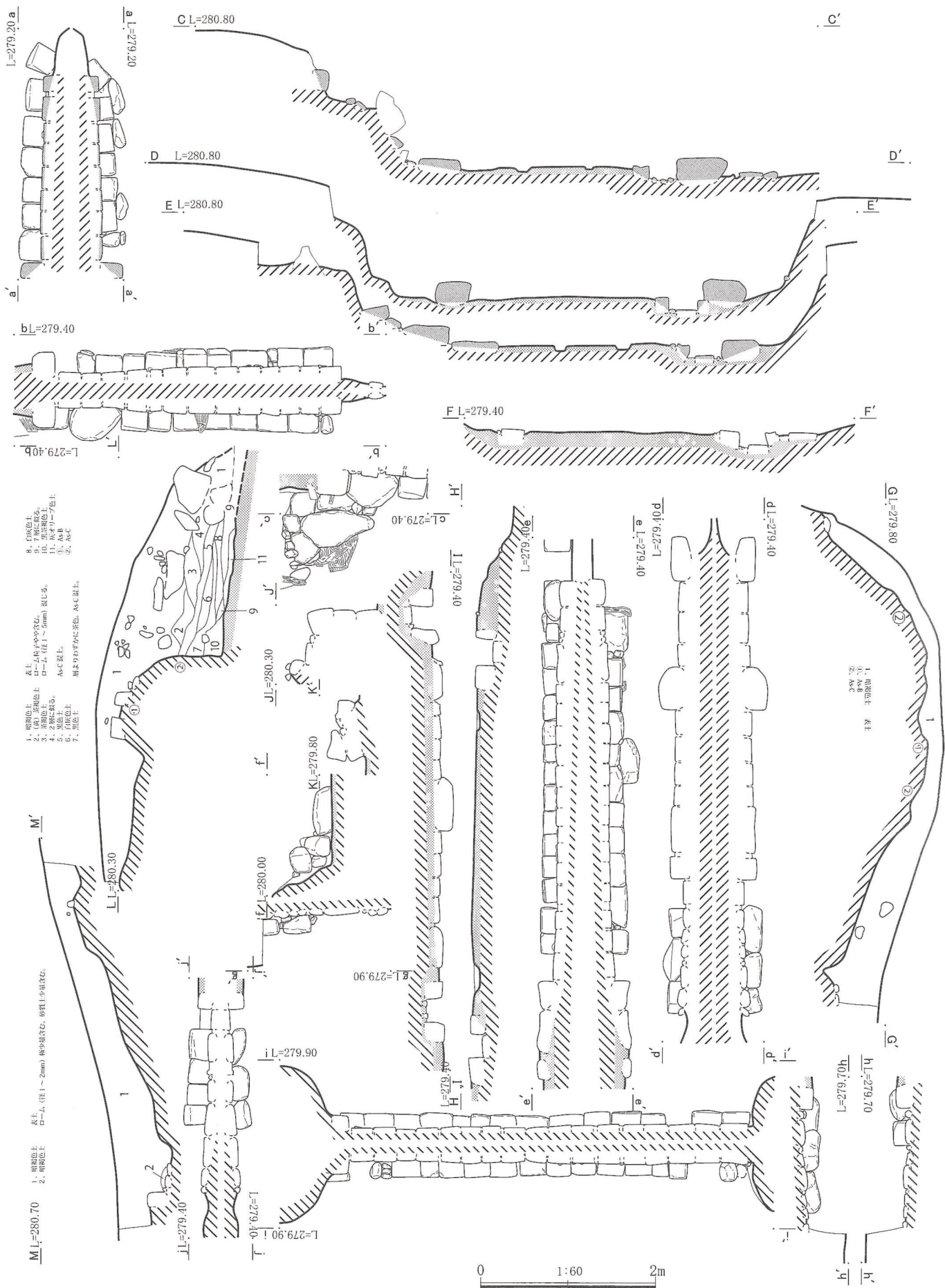
石塔が御前曲輪西虎口の石垣崩落層から大量に出土している。なお、遺物観察表中の出土場所で「井戸」とされているものは、高崎市箕郷支所に隣接する県指定重要文化財下田邸の縁の下に保管されていた石塔である。地元では、昭和 2 年に御前曲輪の井戸が発見された際に出土したものとされている。あくまで、参考資料になるが掲載しておく。

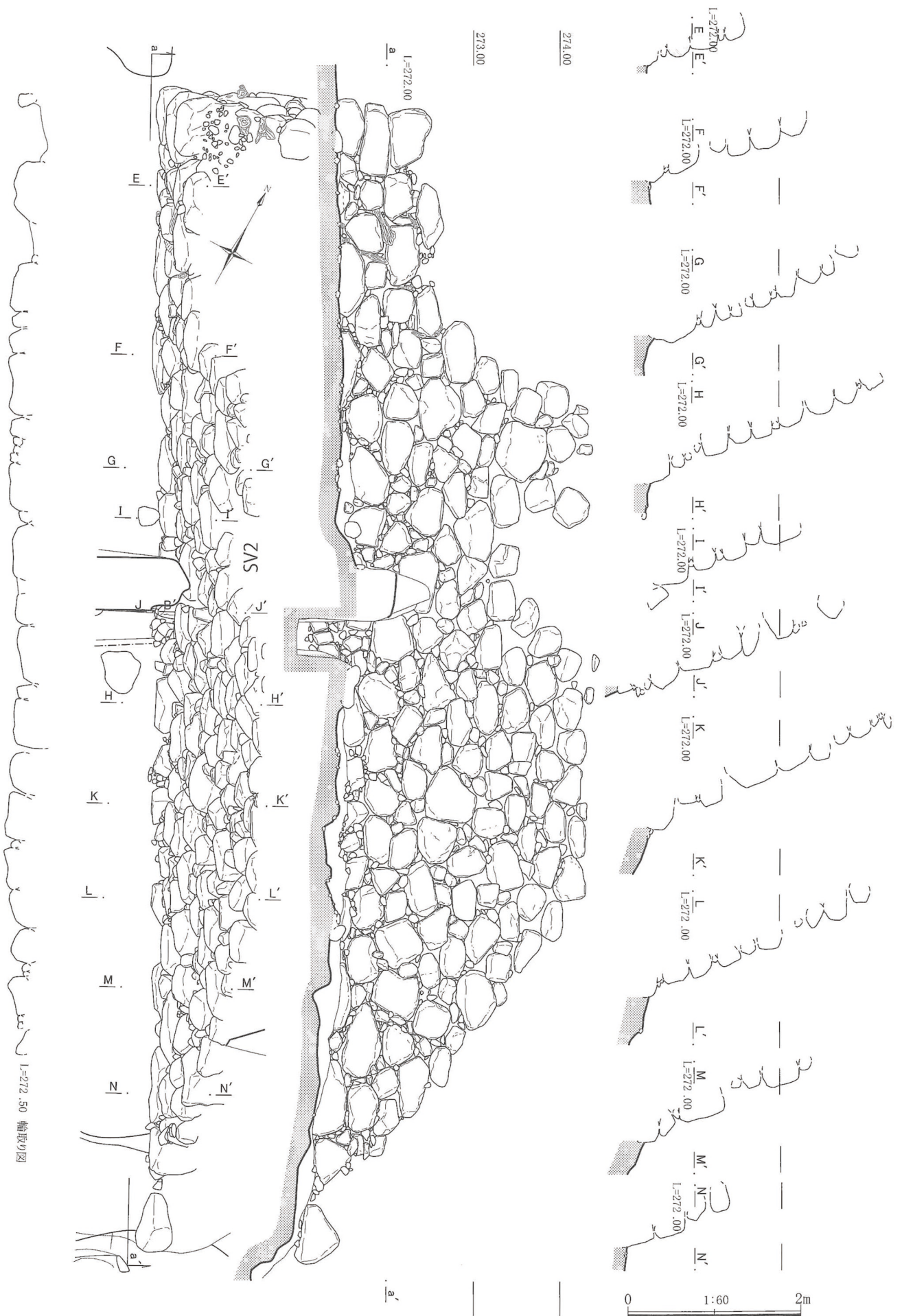


第 247 図 御前曲輪西虎口、御前曲輪・通仲曲輪間地区、通仲曲輪地区全体図

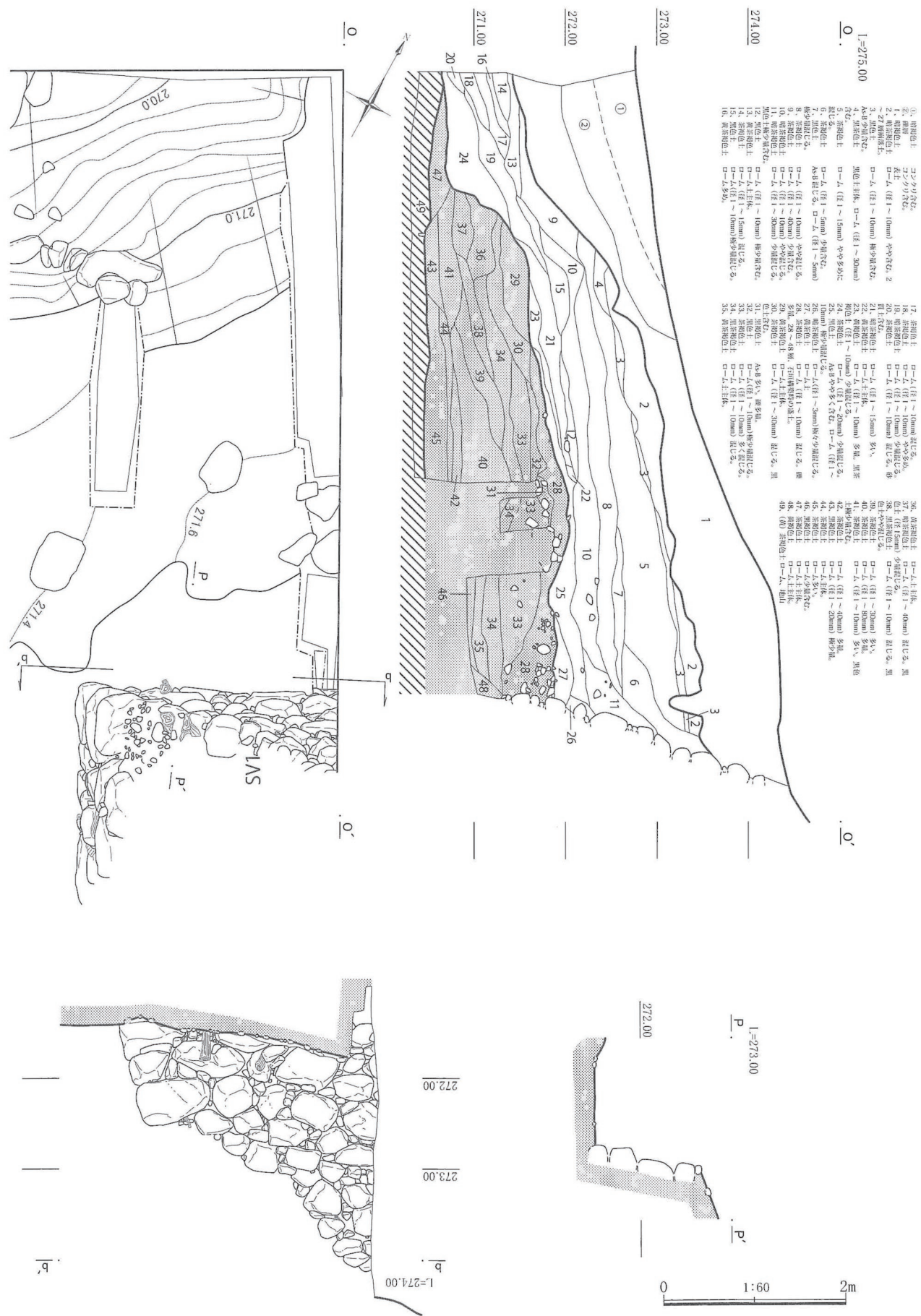


第 248 図 御前曲輪西虎口地区（平面図・セクション図①）

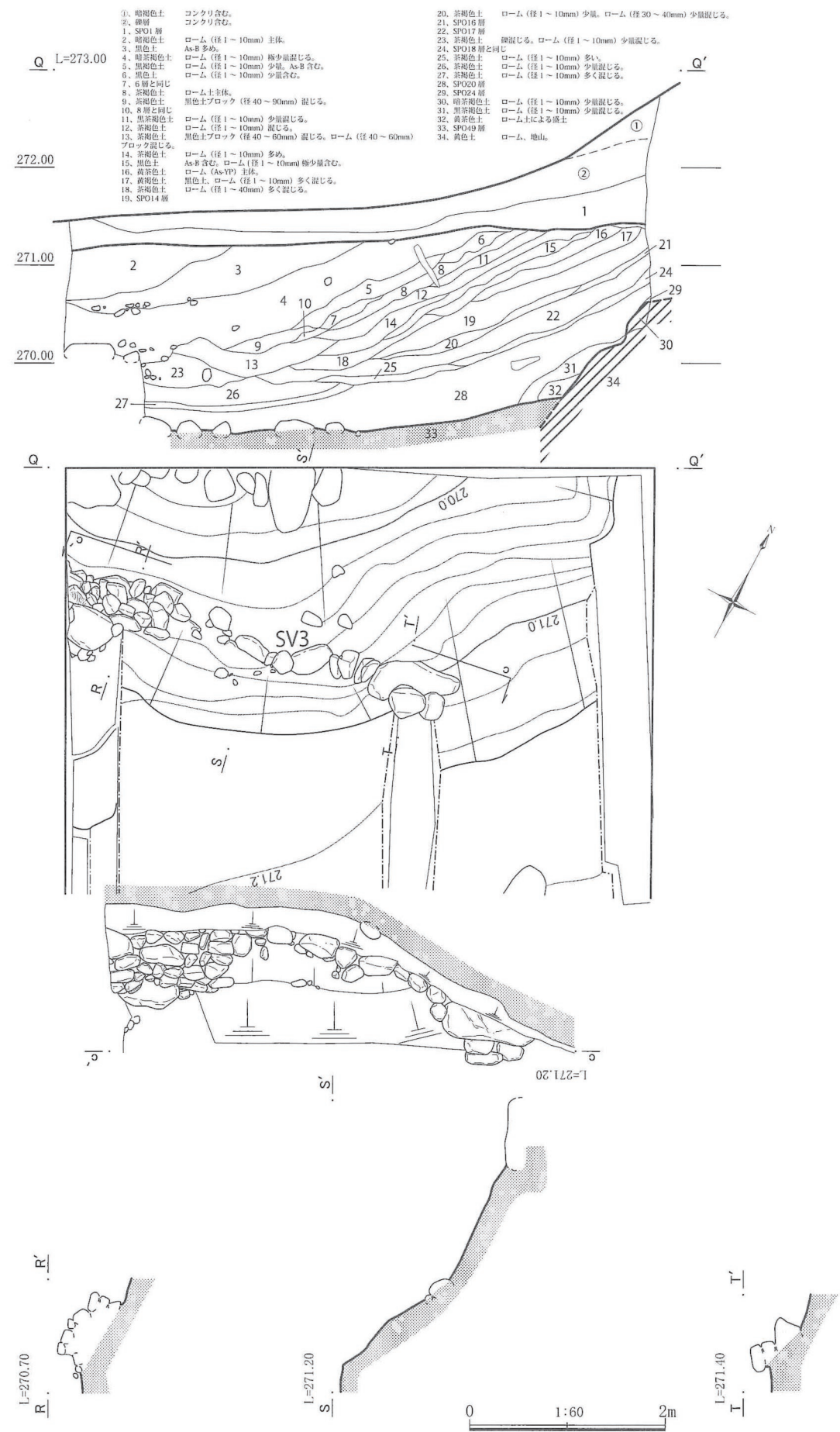




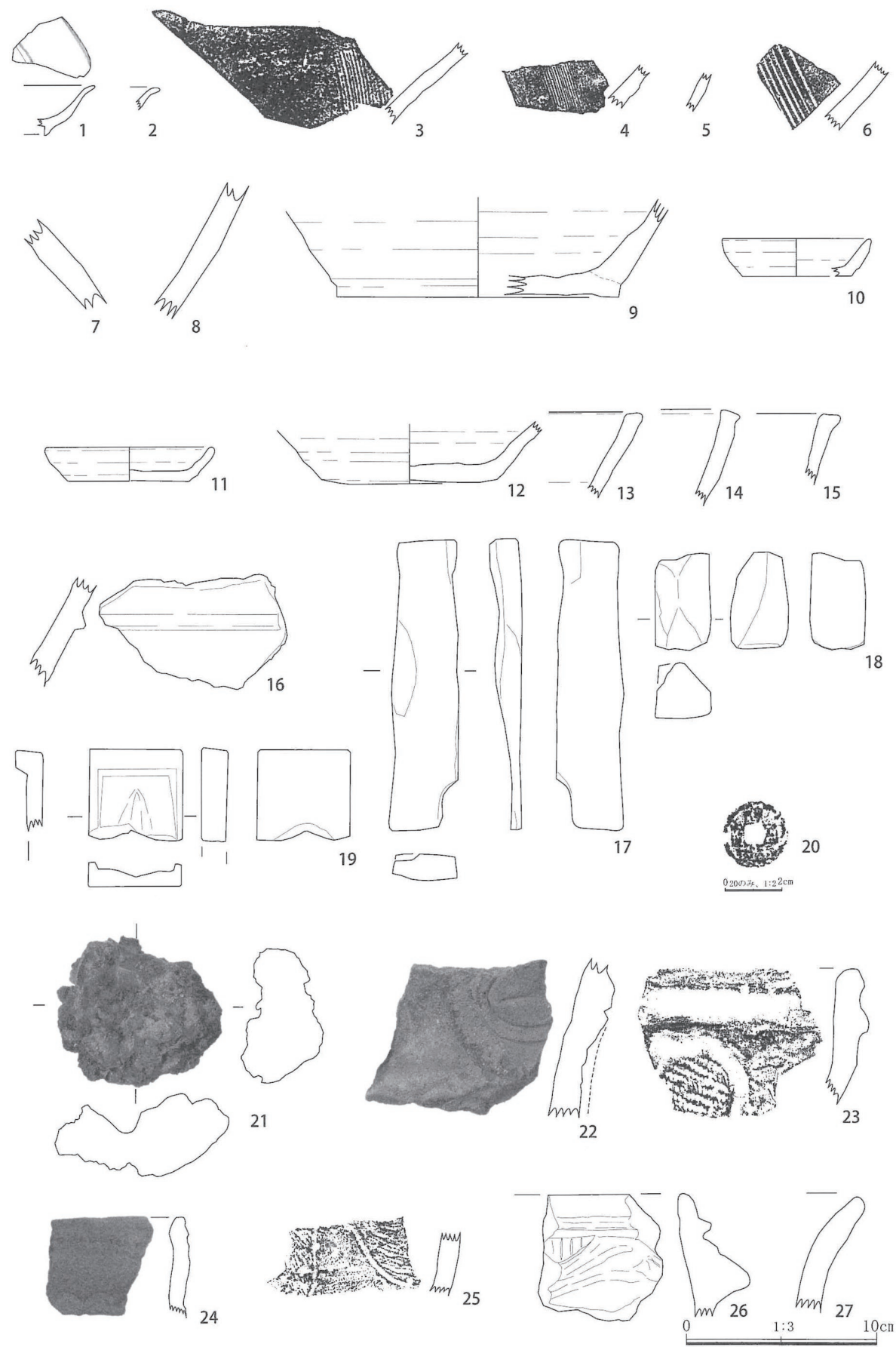
第 251 図 御前曲輪・通仲曲輪間地区 SV2 (平面図・立面図・エレベーション図)



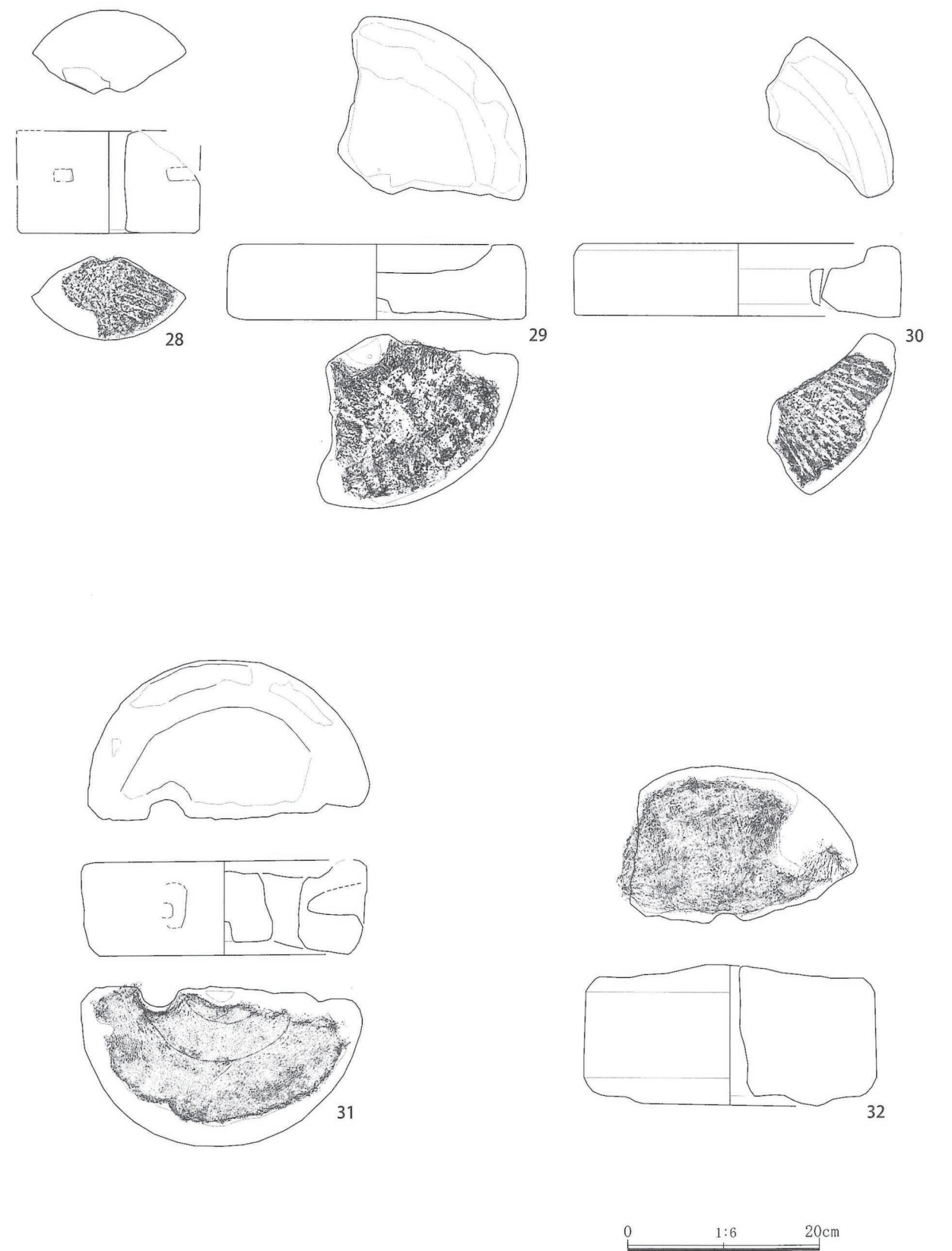
第 252 図 御前曲輪・通仲曲輪間地区 SV1 付近（平面図・セクション図・立面図・エレベーション図）



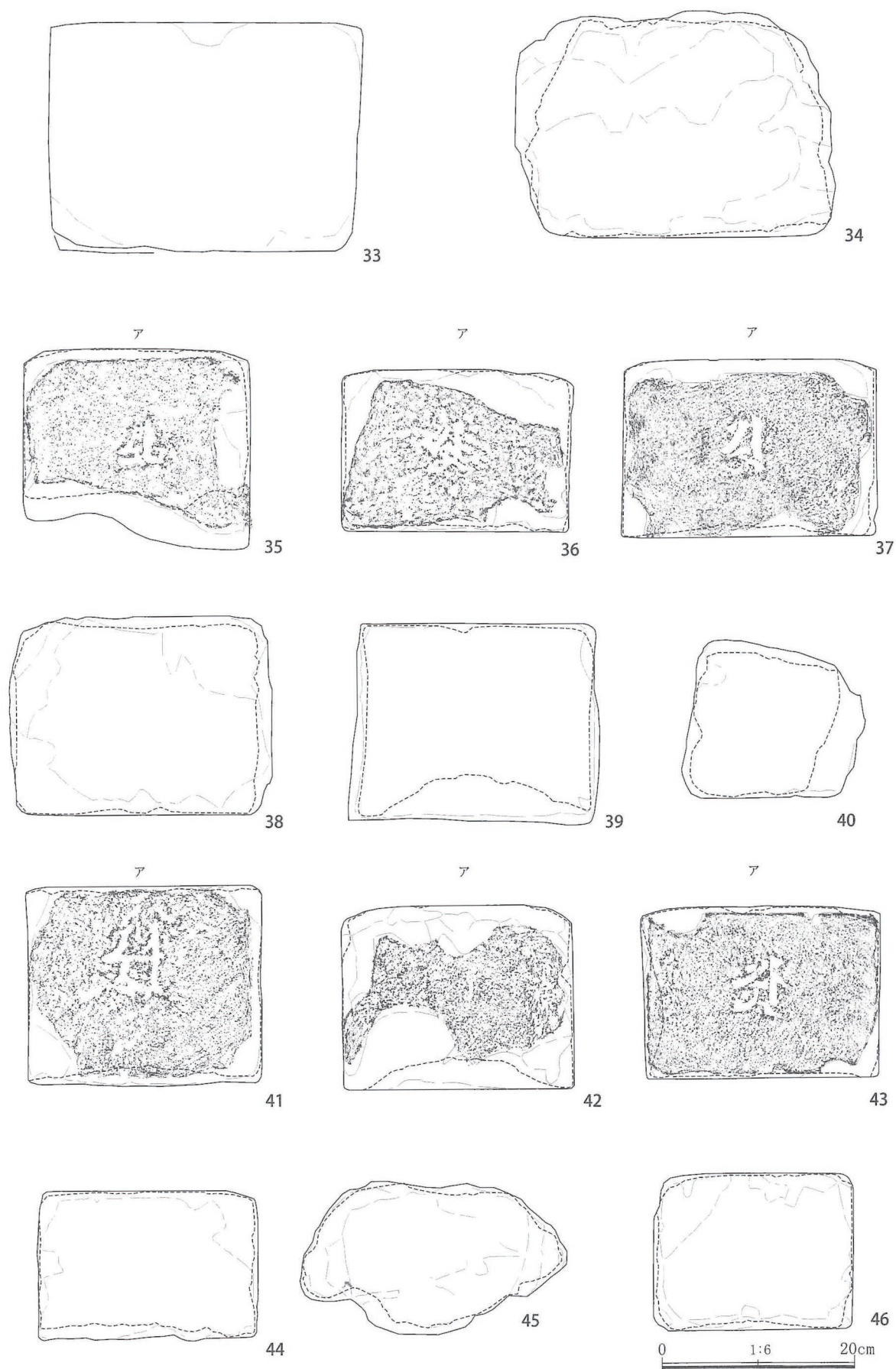
第 253 図 御前曲輪・通仲曲輪間地区 SV3 付近（平面図・セクション図・立面図・エレベーション図）



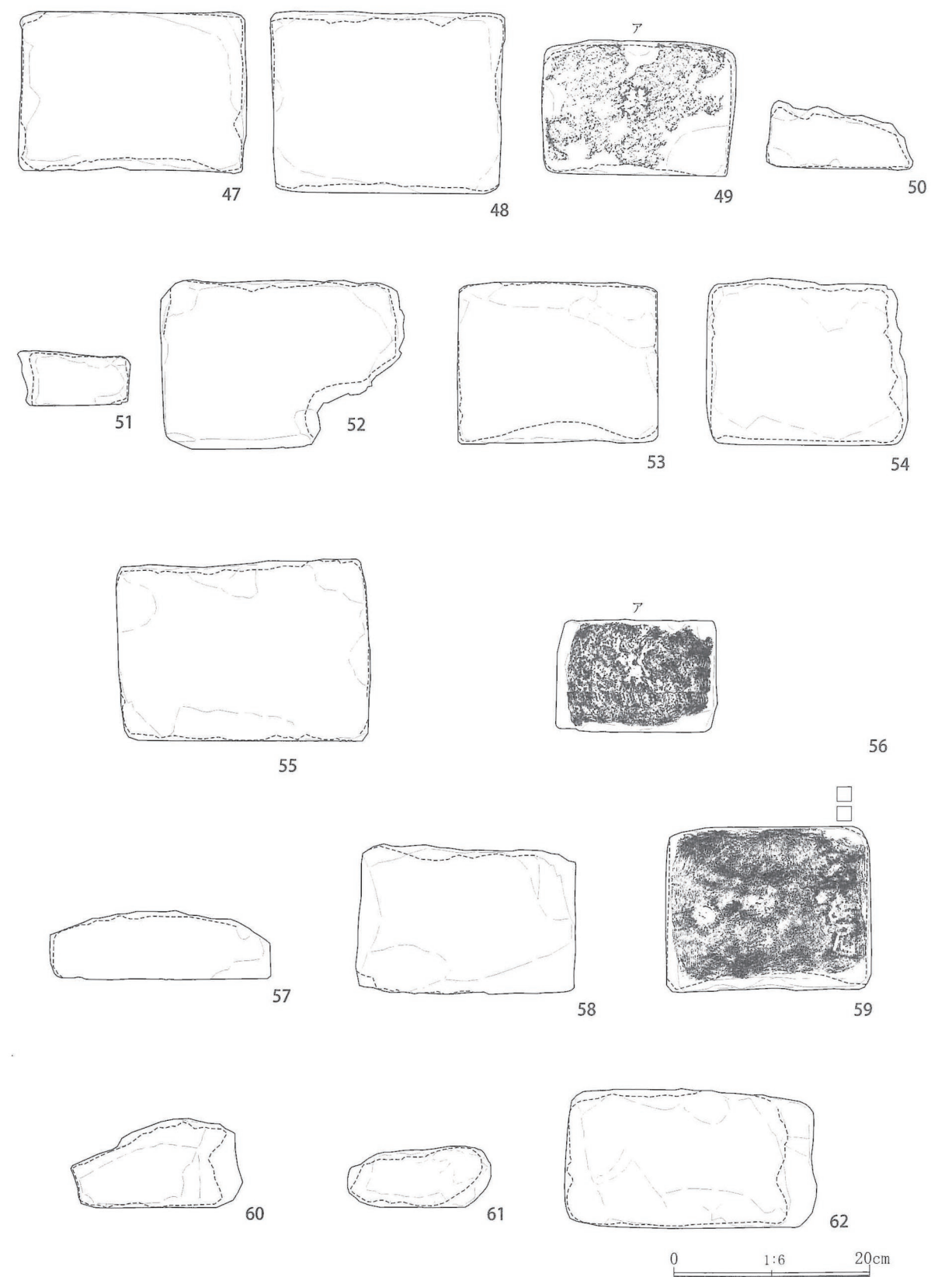
第 254 図 御前曲輪西虎口、御前曲輪・通仲曲輪間地区出土遺物 1



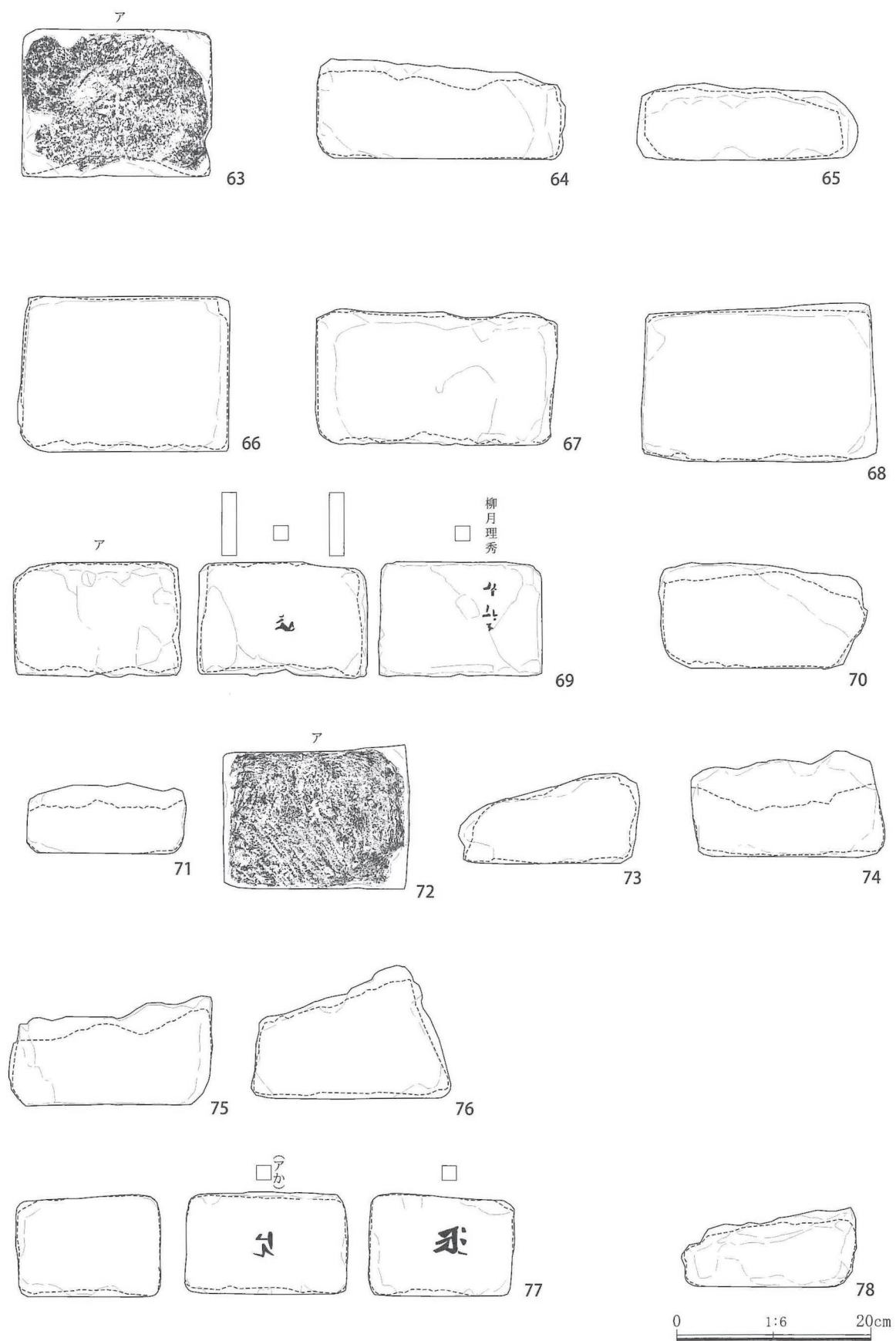
第 255 図 御前曲輪西虎口、御前曲輪・通仲曲輪間地区出土遺物 2



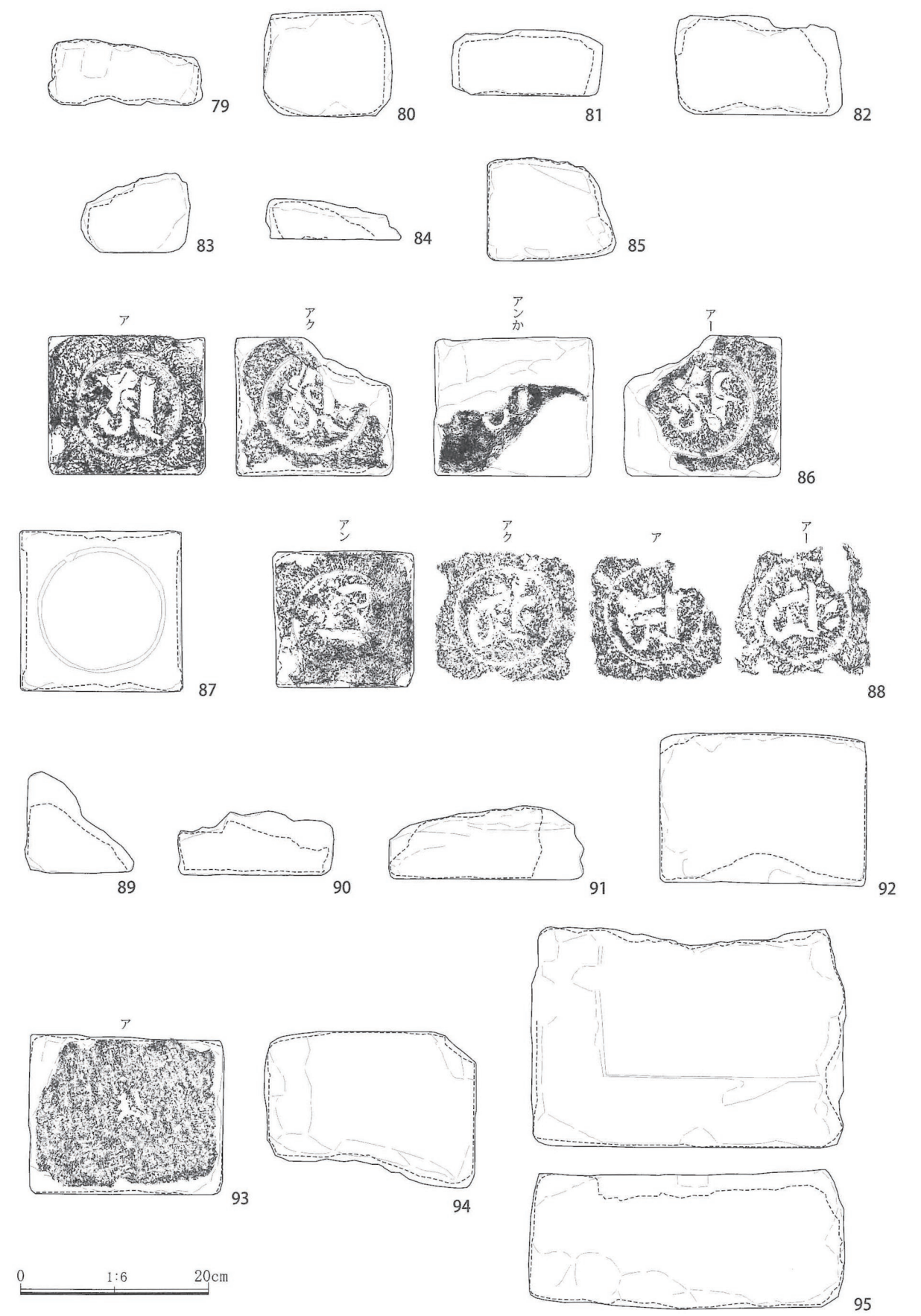
第 256 図 御前曲輪西虎口、御前曲輪・通仲曲輪間地区出土遺物 3



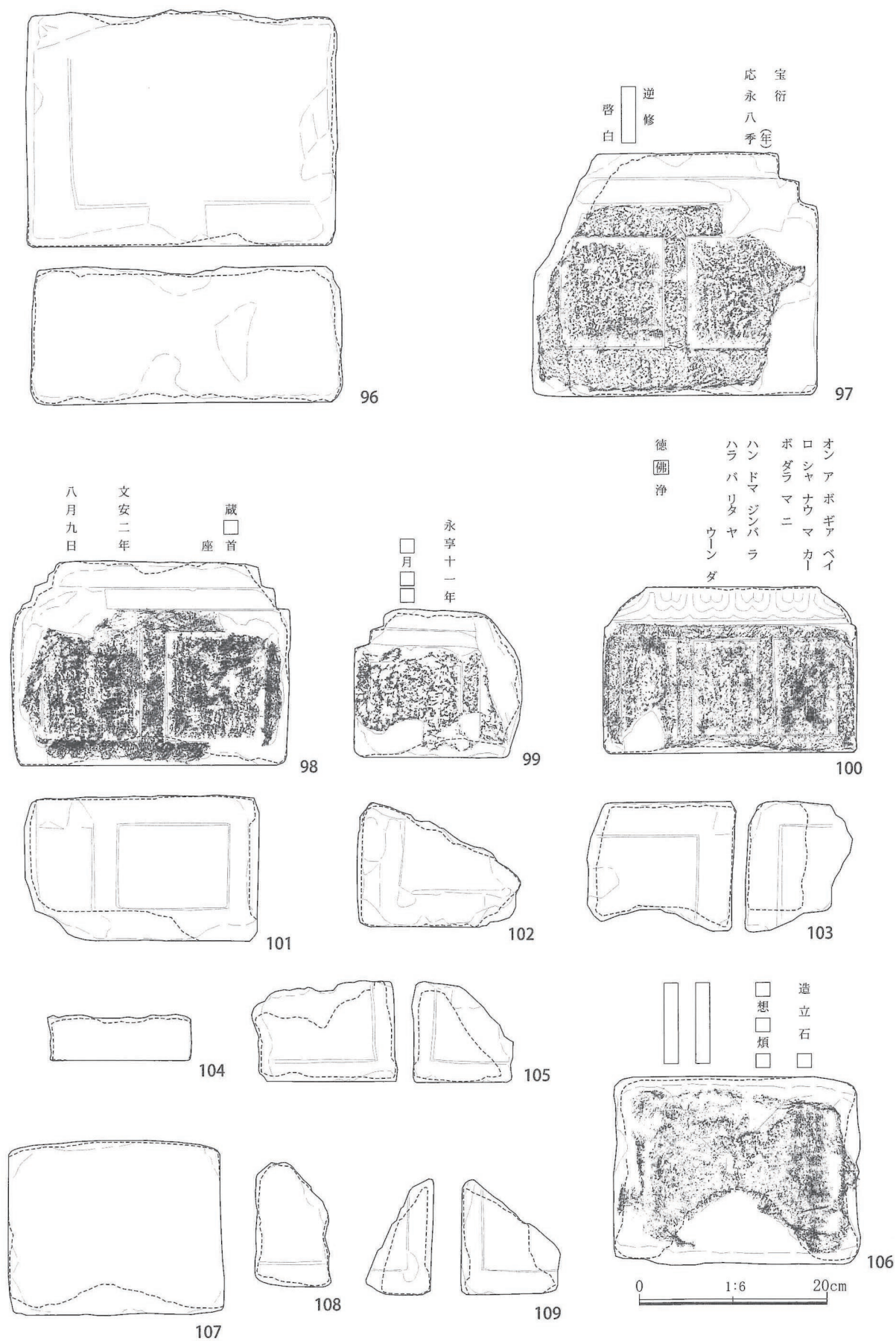
第 257 図 御前曲輪西虎口、御前曲輪・通仲曲輪間地区出土遺物 4



第 258 図 御前曲輪西虎口、御前曲輪・通仲曲輪間地区出土遺物 5



第 259 図 御前曲輪西虎口、御前曲輪・通仲曲輪間地区出土遺物 6



第 260 図 御前曲輪西虎口、御前曲輪・通仲曲輪間地区出土遺物 7

8 通仲曲輪地区の調査（第 261～264 図、PL49、PL148・149、PL218）

（1）概要

平成 17 年度に調査した御前曲輪西虎口、御前曲輪・通仲曲輪間地区の調査をうけ、御前曲輪西虎口から渡る橋脚構造が課題としてあがり、橋脚の受け、もしくは、橋脚の礎石、柱穴の有無の確認を目的として、平成 18 年度は、平成 17 年度に調査した堀の対岸側を調査した。

調査の結果、S1 とした礎石の可能性のある石が確認されたほかは、明確に橋脚と関わる遺構は確認されなかった。

（2）検出された遺構

①S1

堀の斜面を下りきった場所で、90cm×60cm の石がフラットに据えられた形で検出された。石の大きさや表面がフラットのため、礎石の可能性が高いが、他に対応する石は平成 17 年度調査地点も含めて確認されていない。

②SV1

高さ 40～60cm で、長軸径で 20～40cm の石が 2 石積まれた石垣である。S1 の南側 20cm と北西側 120cm の場所には長軸径 80cm と長軸径 60cm の石が立った状態で検出された。この 2 石も SV1 の延長線上のため、SV1 の石の可能性はあるだろう。石垣裏側の土は表土とほとんど変わらないため、廃城後の遺構である可能性を考慮したほうがよい遺構である。

③SX1・SX2

堀斜面中に確認された掘り込みである。SX1 はなだらかな落ち込みであるが、SX2 はほぼ垂直に落ち込んでいた。その性格は不明である。

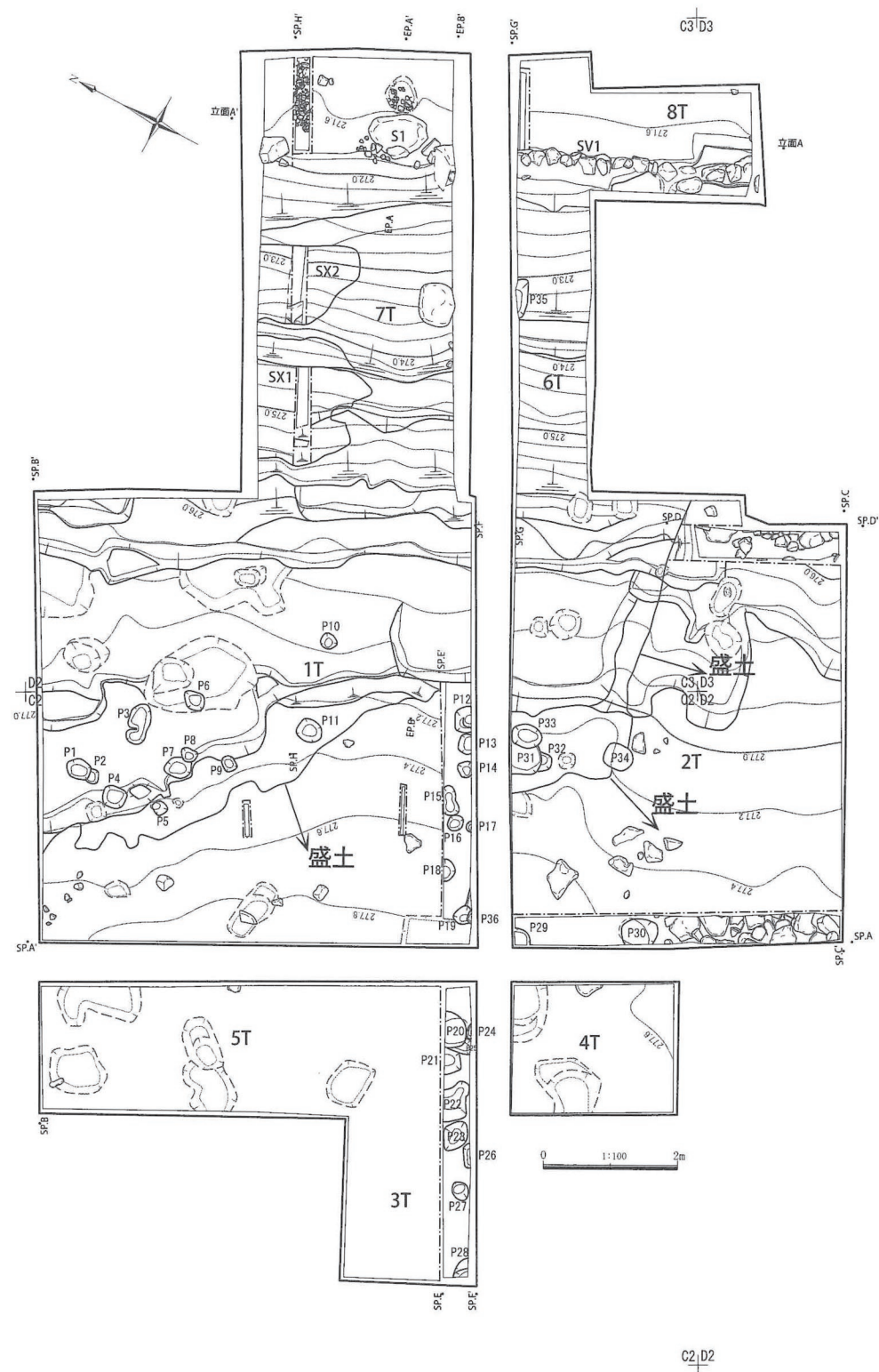
③その他の遺構

ピットが確認されているが、盛土層を断ち割ったトレンチでは、盛土層直下の地山を掘り込んだピットだけで、盛土層を切る形のピットは確認されなかった。なお、トレンチ以外の場所で確認されたピットは、トレンチで確認された盛土層直下の地山を掘り込んだピットと覆土が共通し、この調査区で確認されたピットのほぼ全ては、盛土層形成以前のピットになる可能性が高い。

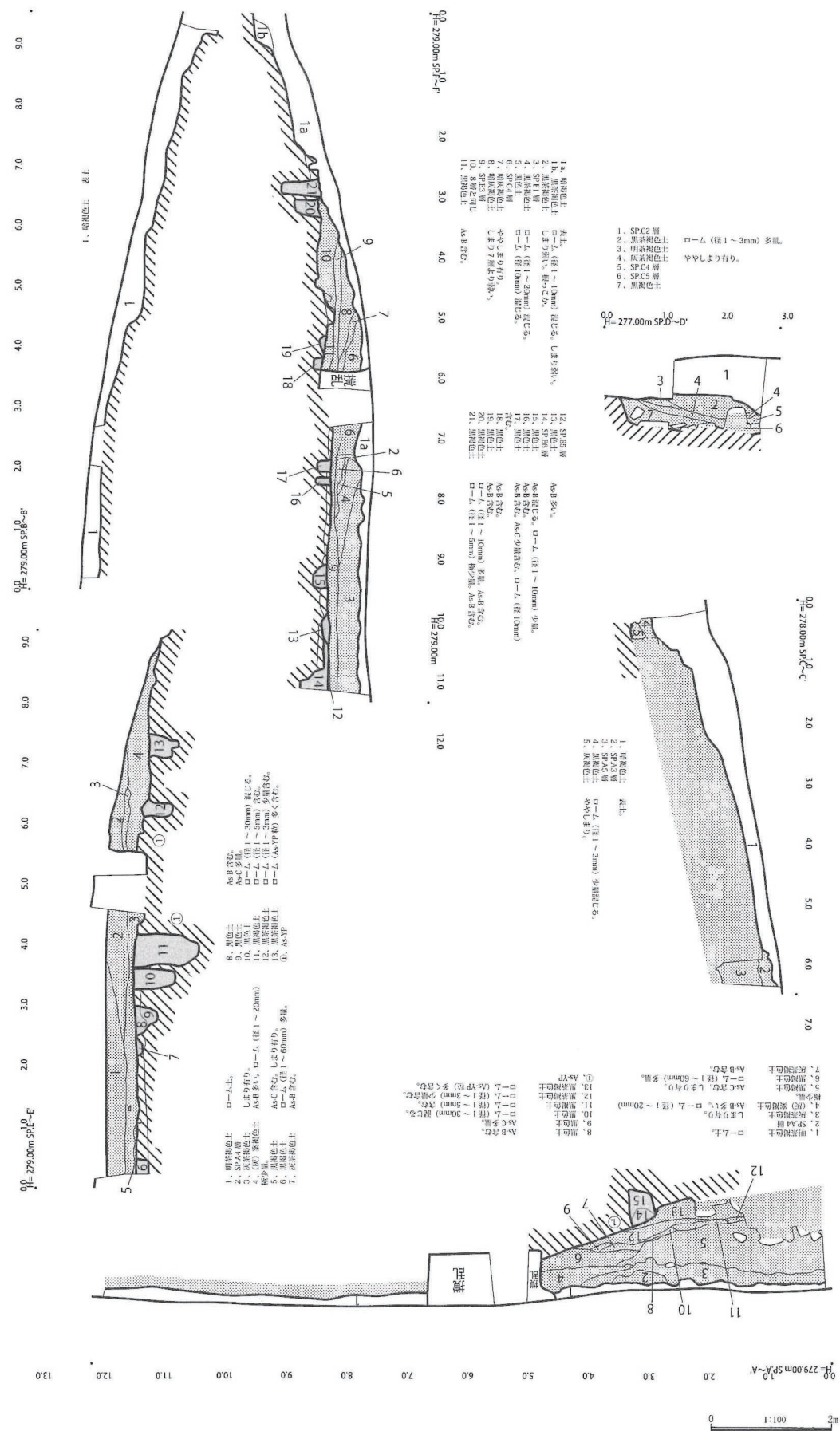
堀斜面中には、径 70cm×60cm の大きな石が 1 石確認されたが、表土中であり、また、斜めに傾いていることから、橋脚の礎石とは考えづらい石である。

（3）出土遺物

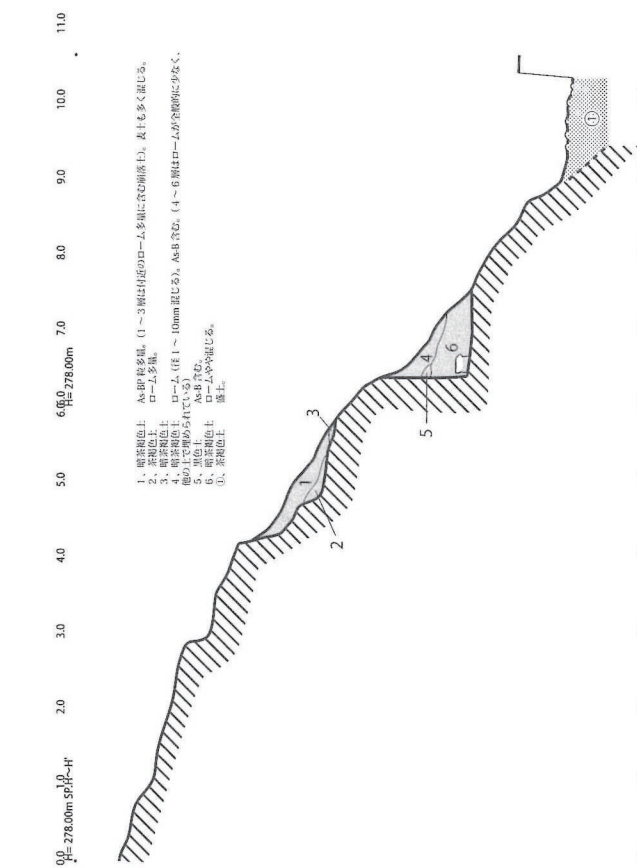
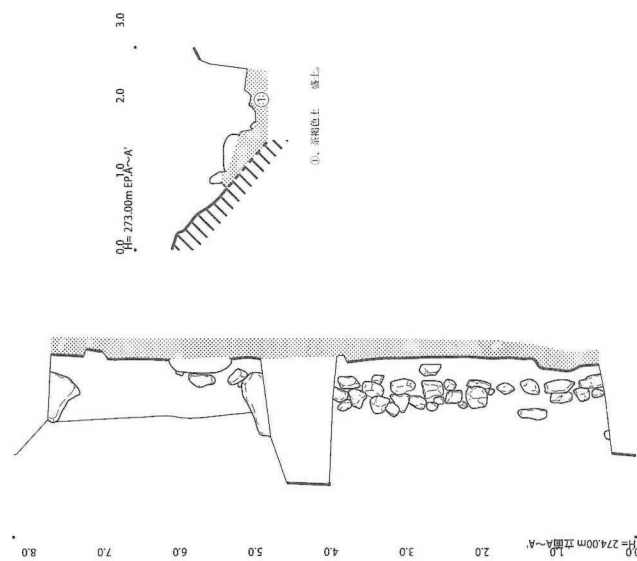
出土遺物は極めて僅少である。また、他の曲輪で出土している鍛冶関係の遺物は確認されなかった。



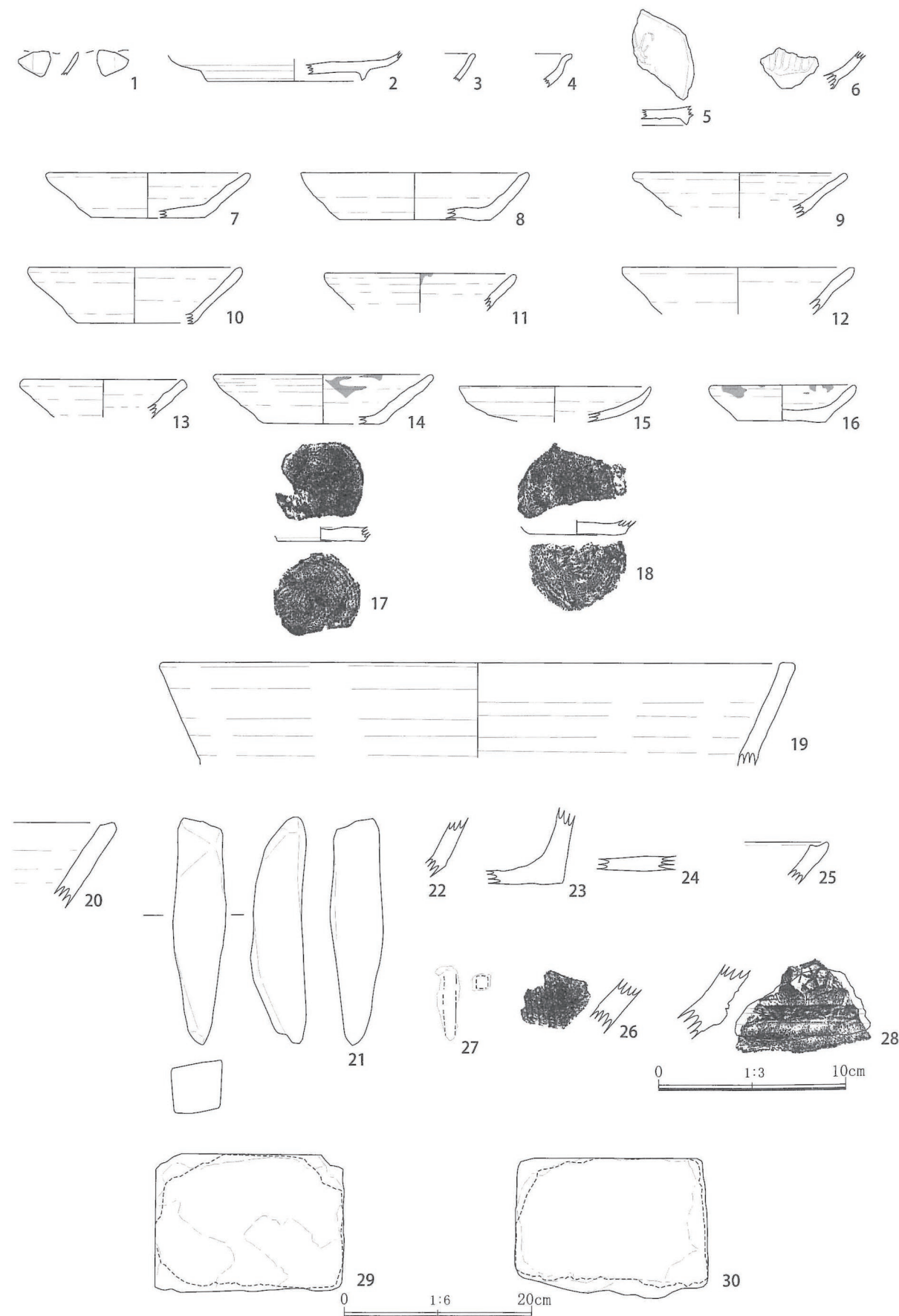
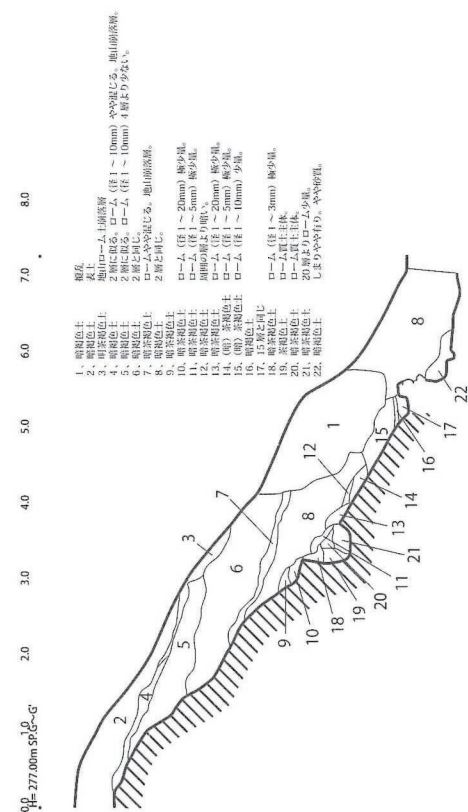
第 261 図 通仲曲輪地区全体図



第 262 図 通仲曲輪地区 (セクション図①)



第 263 図 通仲曲輪地区 (セクション図②・立面図・エレベーション図)



第 264 図 通仲曲輪地区出土遺物

9 O 6 三の丸・蔵屋敷地区の調査（第 265～276 図、PL49・50、PL150～155、PL219）

（1）概要

三の丸内には 1～3m 程度の段差があり、そうした段差によって区画された 5 つの小曲輪をまとめて三の丸と呼称されているが、平成 18 年度（2006 年度）に調査したのは三の丸最北の曲輪部分で、蔵屋敷とは約 2m の段差があった。また、この三の丸最北の曲輪部分に接続することから、蔵屋敷の南側虎口があることが予想され、その虎口の内容確認を目的として虎口想定部も調査した。

蔵屋敷南虎口では、大量の石が廃棄されている状態であった。一部にトレンチを入れて、虎口両側の石垣を確認したが、ほぼ垂直に積み上げられているうえに崩落の危険性もあったため、大量の石の取り上げは遺構保全のために行なわなかった。

三の丸では、調査区中央に 200cm 間隔で並ぶ柱穴列が確認され、何らかの建物跡である可能性が考えられた。その他曲輪北西端で SA2 とした柵列と曲輪南東端で SA1 とした柵列が確認された。また、これらの遺構は 1 号堀、あるいは、2 号堀とした堀を埋めた後に構築された遺構であることも判明し、大規模な造り替えの状況が明らかになった。

（2）検出された遺構

①1 号堀、2 号堀（第 265・266 図）

IT 北西端部で 1 号堀北西側の壁面が確認された。P15 付近では堀の南端部がクランクして南方向へ曲がっていくことが推測され、南方向へ行く堀を 2 号堀とした。P15 付近のトレンチセクションでは、南側の土をきっている状況が確認できた。堀底までは全く調査していないため、確実ではないが、この切っているラインが 1 号堀の南側壁面の可能性が高いであろう。2 号堀の壁面東側は後述する SV3 との関係から 1・2 号堀機能時の土塁部分で、土塁上部は、SA1・SA2 などの柵列構築時に上部は削平されたものと思われる。これは、SA1 の P30 がこれらを切っていることから裏付けられよう。なお、1 号堀・2 号堀自体の重複関係は認められないため、同時期の堀である。1 号堀は西側に延長すると現在も残る堀のラインと一致し、東側に延長すると、本丸地区で確認された 1 号堀のラインと概ね一致し、本丸地区の 1 号堀とは同時期の可能性が考えられる。なお、堀の埋土は東側から、基盤層の白川火砕流土を中心にして埋められている。この土は現地表から少なくとも 6m 程度は掘らないと現れない土のため、本丸の周囲を巡る堀掘削時の土を使って埋め戻した可能性が考えられる。

②SA1、SV3、SX1（第 267・268 図）

P28～P31 は 190cm 間隔で確認された柱穴列（SA1）である。P31 の東側には確認されなかったため、P31 が最東端のピットである。P28 の西側は未調査であるため、不明であるが伸びていく可能性が高いであろう。SA1 に平行して南東側が段差になっており、南東側からの敵の侵入を防ぐための防御施設であろう。

SV3 は、東側に面を持ち 2 石積まれた石垣である。裏込は無かった。2 号堀のラインと平行しており、2 号堀東側に土塁があって、その土塁の基底部の石垣と考えられる。したがって、この石垣があった時期は、石垣基底部のレベルが生活面であり、その後の改変によって埋められた石垣となり、城最終時期の石垣ではないことになる。

SX1 は、曲輪南東側の段差部分で確認された遺構である。乱雑に石がまとまっており、積まれたという意図はあまり感じられない。また、盛土に食い込むように石が入っており、盛土と共に形成された可能性もある。曲輪段差部分の石垣の可能性はあるが、他の調査地点で確認されている石垣とは上記のことから様相が異なっている。

③P1～P15（第 269 図・270 図）

曲輪中央部で確認された柱穴列である。P12 と P14 は P3～P7、及び P1・P8～P11 の延長ラインからややずれており、P1～P11 が一つの建物で、P12～P15 は対応する柱穴列がないため、柵

列とみなすことができよう。ただし、P7・P11 間には P1 と P3 間のように柱穴が確認されていないため、P1 から P15 が一連の建物となる可能性も残っており、あえて建物名はつけずに、今後の課題としておく。柱痕もよく確認できた例が多く、P1～P11 の柱間はほぼ 200cm 前後になっている。京間である 6 尺 5 寸（約 196cm）よりは若干広く、6 尺 6 寸から 7 寸程度の柱間である。一方、P12～P15 の柱間は 190cm と P1～P11 に比較して若干狭くなっている。

④SA2（P17～P27）（第 271 図）

曲輪西側の端部で確認された柱穴列である。110cm 間隔で並ぶものが多いが、等間隔ではないピットもある。全般的に径が 10～20cm 前後と小ぶりなものが多い。P26 はトレンチ部分ということもあり、断ち割っているが、先端部はやや尖り、打ち込んで構築された可能性があるだろう。

⑤SK1（第 271 図）

P27 の東側で確認された径 95～105cm の円形プランで深さ 20～30cm の土坑である。

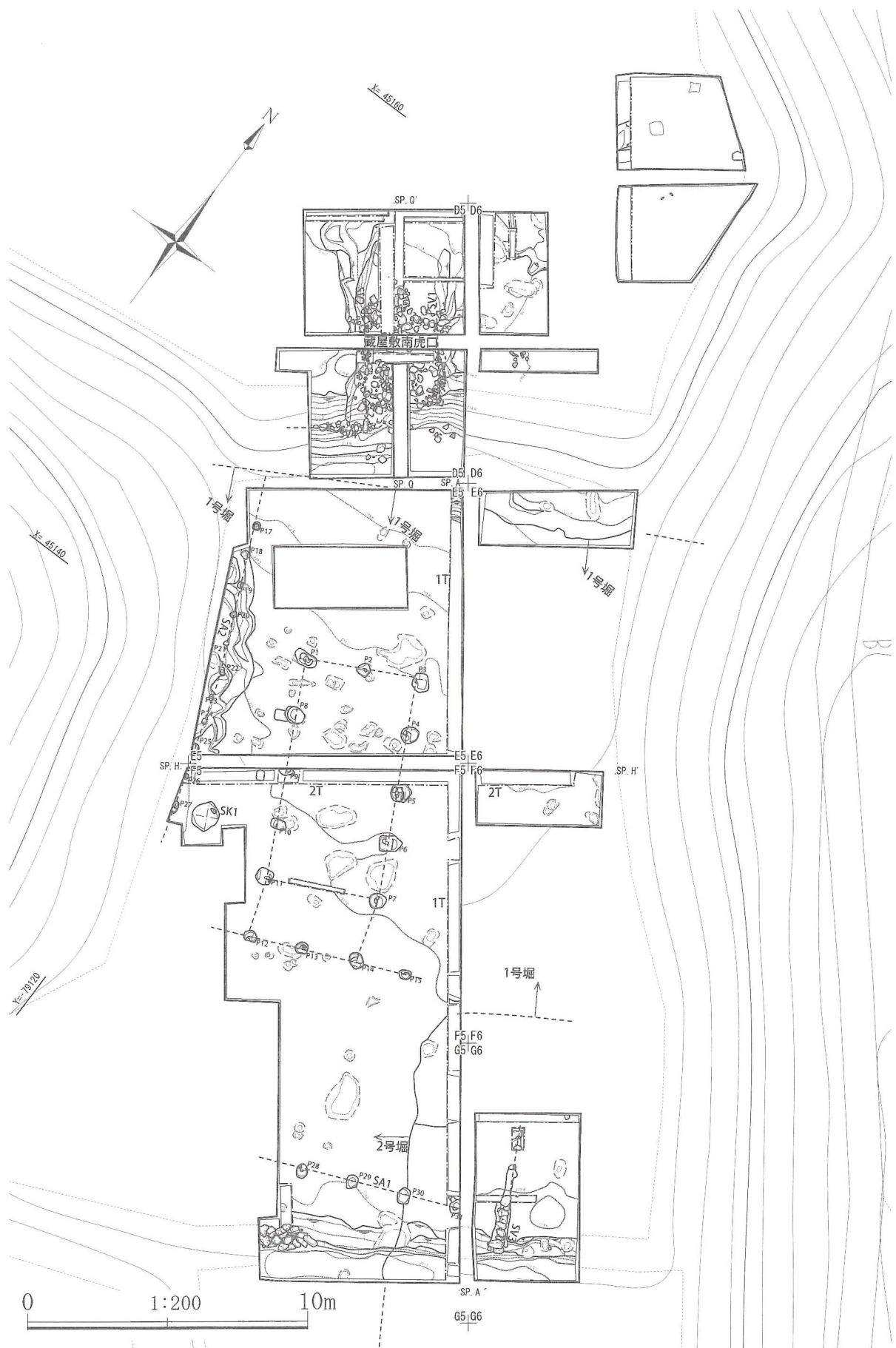
⑥蔵屋敷南虎口（第 272～274 図）

SV1 は虎口北東側で、SV2 が虎口南西側で確認された。トレンチ部分の高さで、SV1 は 140cm、SV2 は 120cm である。両者ともほぼ垂直に積み上げていた。裏込は、明確には確認されていない。抜け落ちたと思われる隙間も目立ち、積み方は乱雑である。また、石垣表面はあまり平らとは言いがたい状況である。

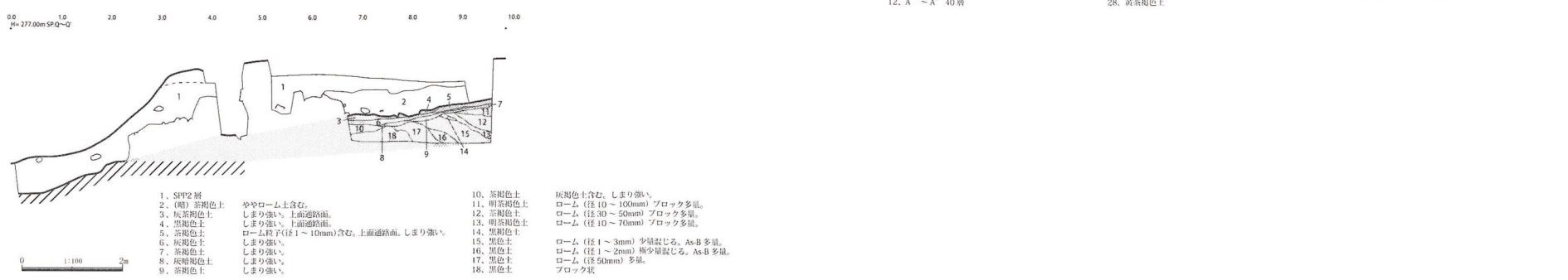
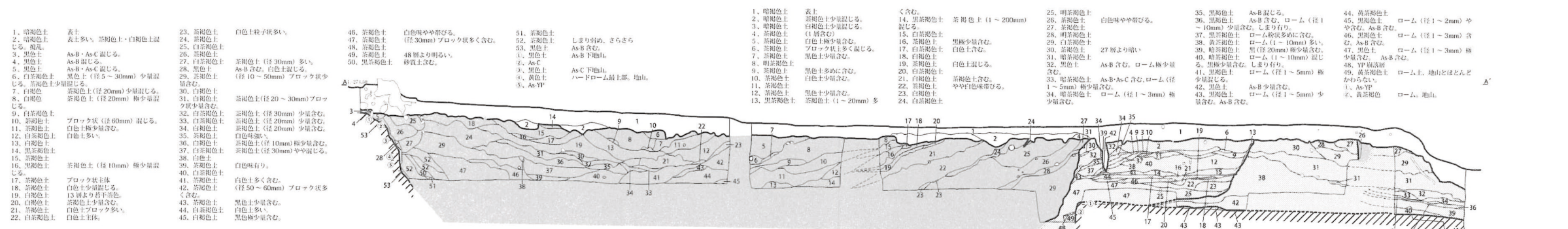
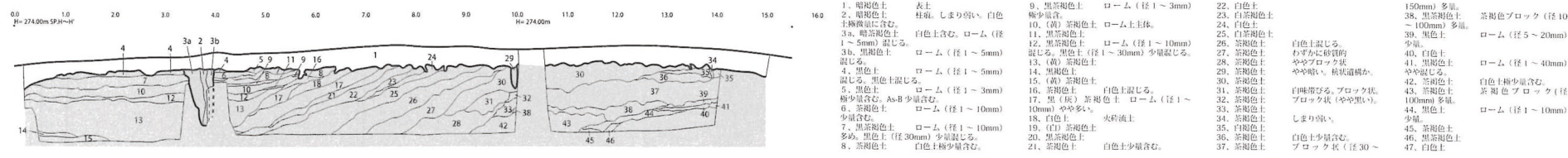
SV4 は SV2 がクランクした石垣と思われる。最下段の 1 石のみが残っていた。おな、北東端の石は縦に積み、さらにその北東側の径 10cm 程度の石 3 石はフラットに敷かれていたため、SV4 北東端の石は石組み排水溝の側石も兼ねた石であろう。この石組み排水溝があるため、虎口通路部のレベルが判明するが、そのレベルは虎口南東側の現地表面にほぼ相当する。そのため、虎口南東端部は廃城後の耕作等によって、切られてしまっているのであろう。

（3）出土遺物（第 275・276 図）

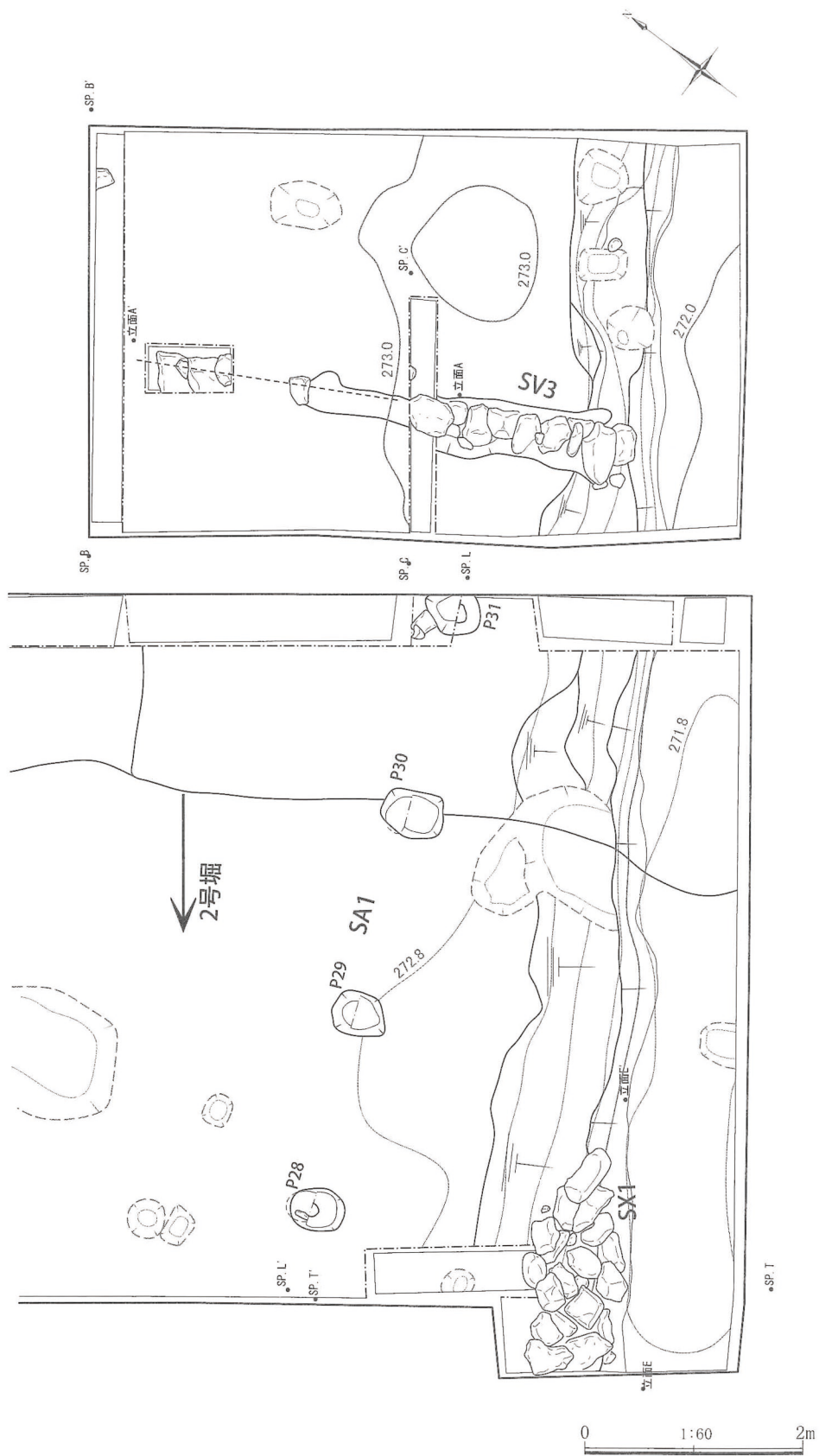
1 号堀埋土内からは 1・5・6・8 が出土し、1 号堀を埋めた時期はこれらの遺物よりは新しい時期といえよう。その他の遺物からは時期を特定できるようなものは無く、表土中からの出土が多い。



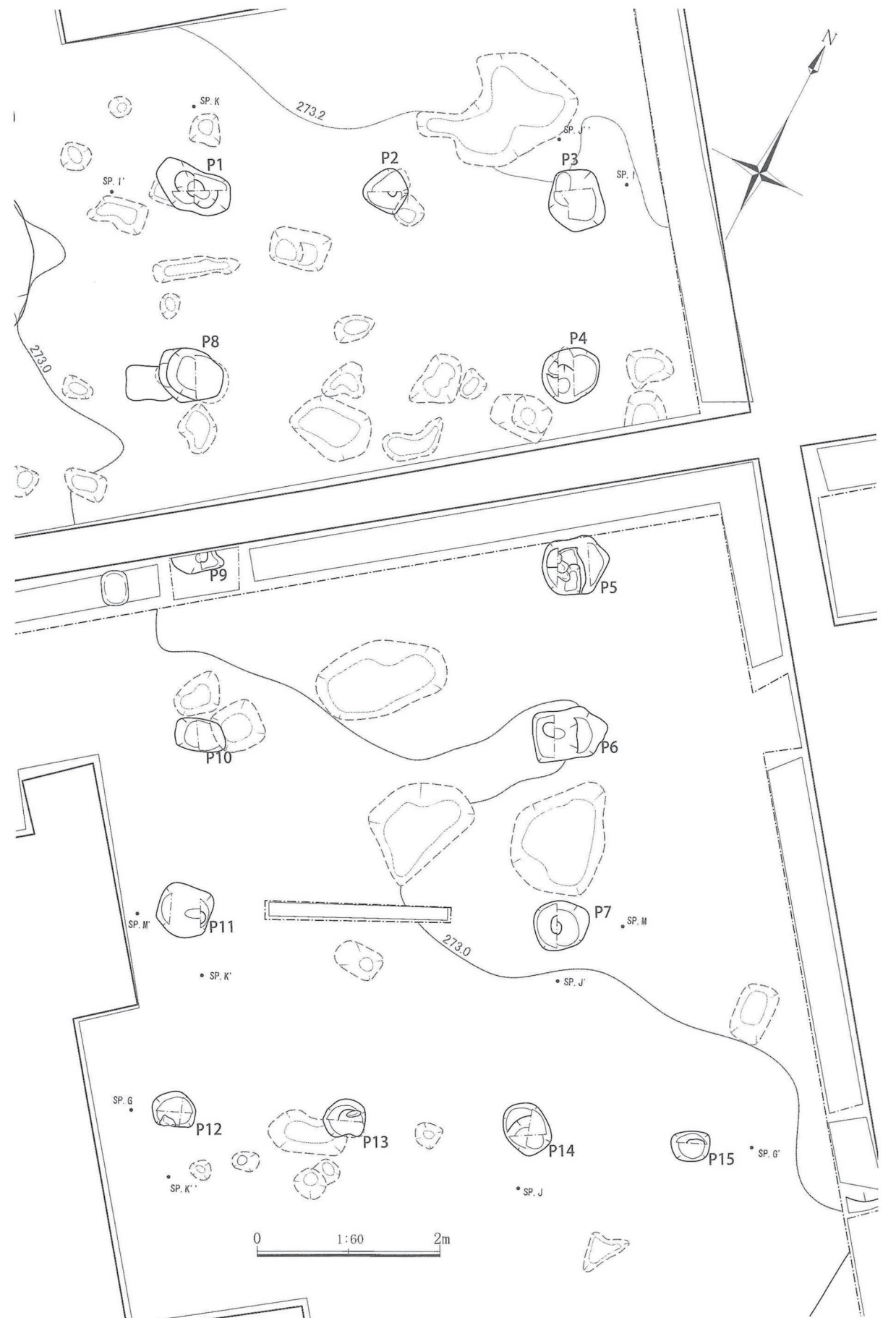
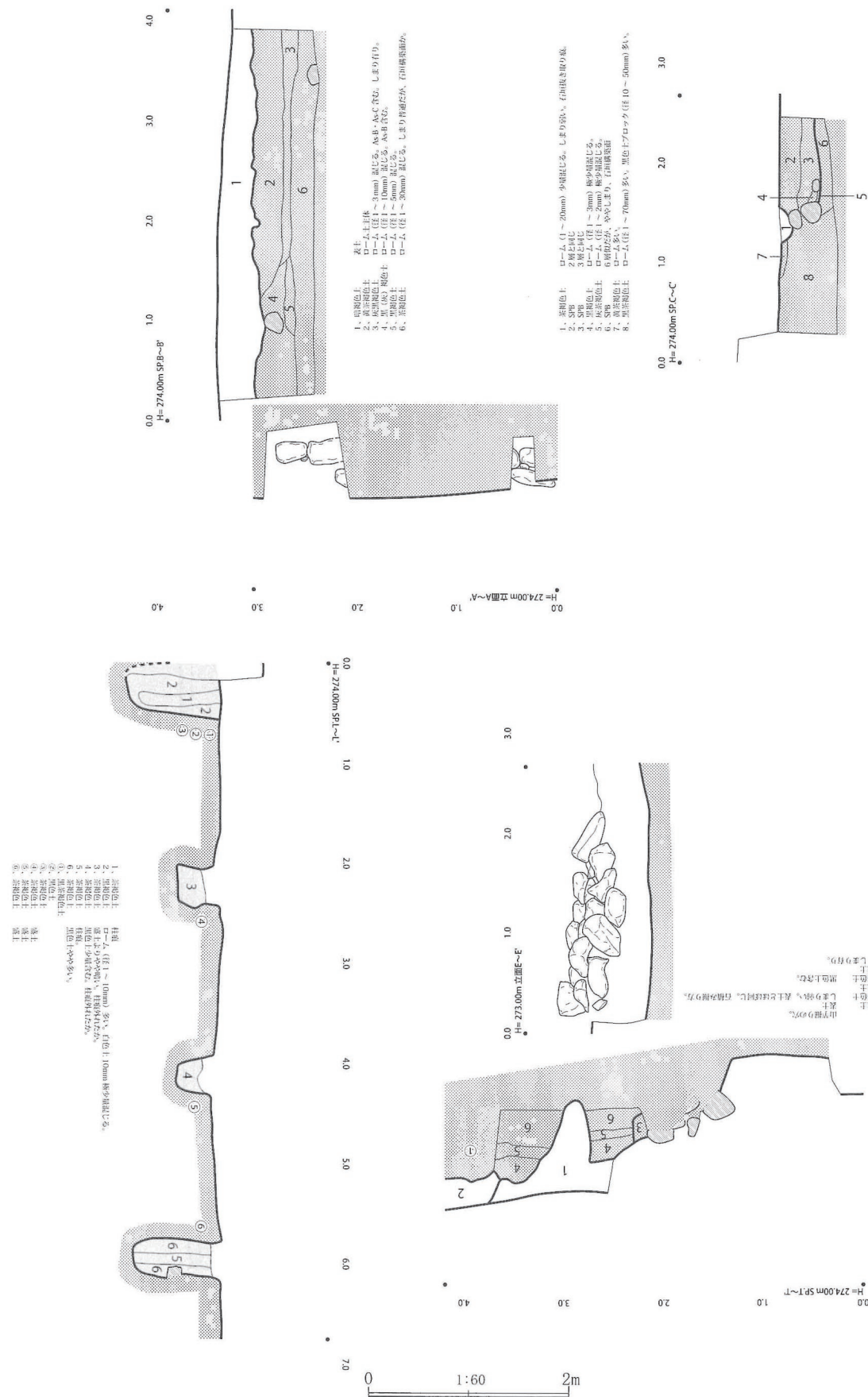
第 265 図 06 三の丸・蔵屋敷地区全体図



第 266 図 06 三の丸・蔵屋敷地区（セクション図）

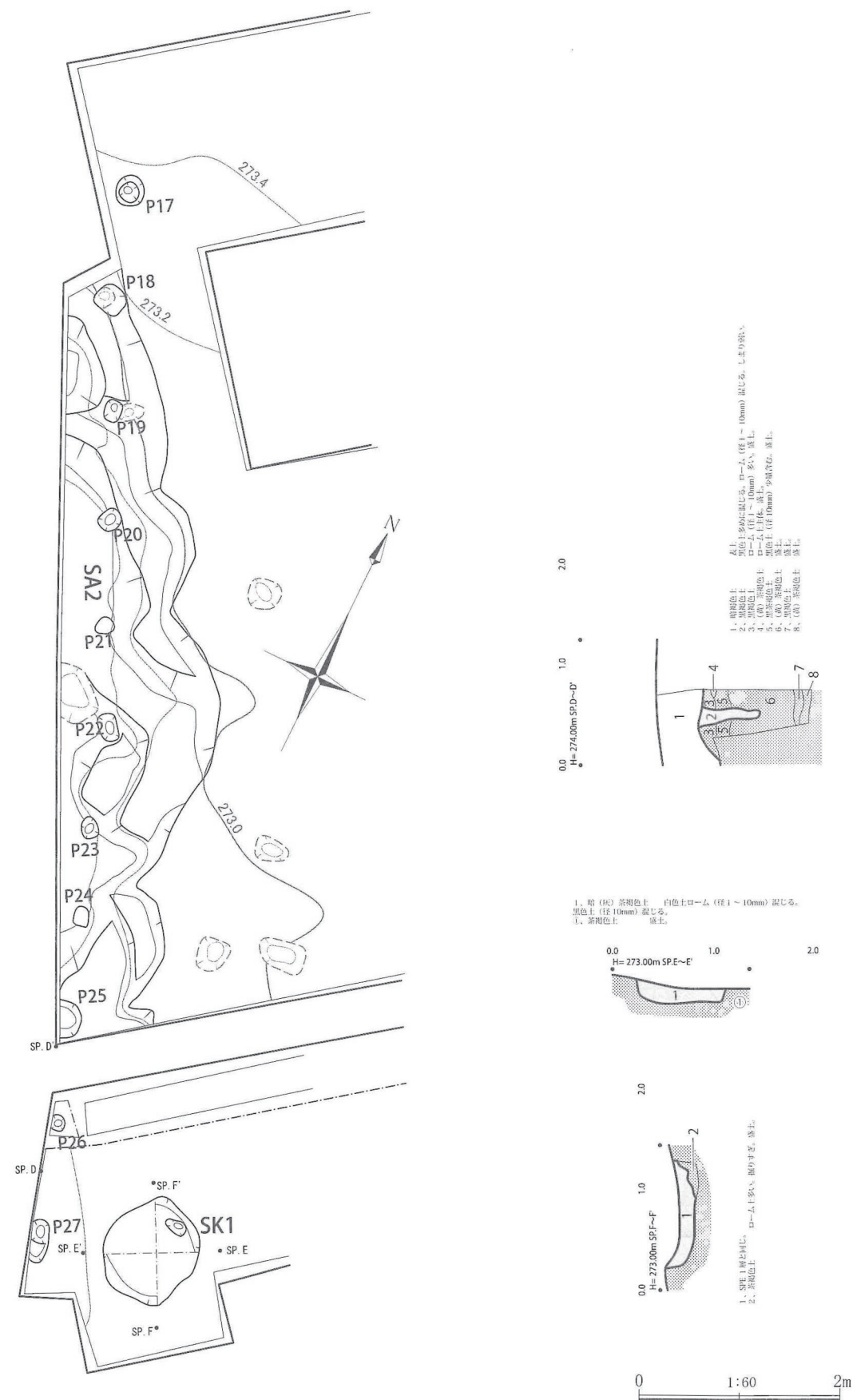
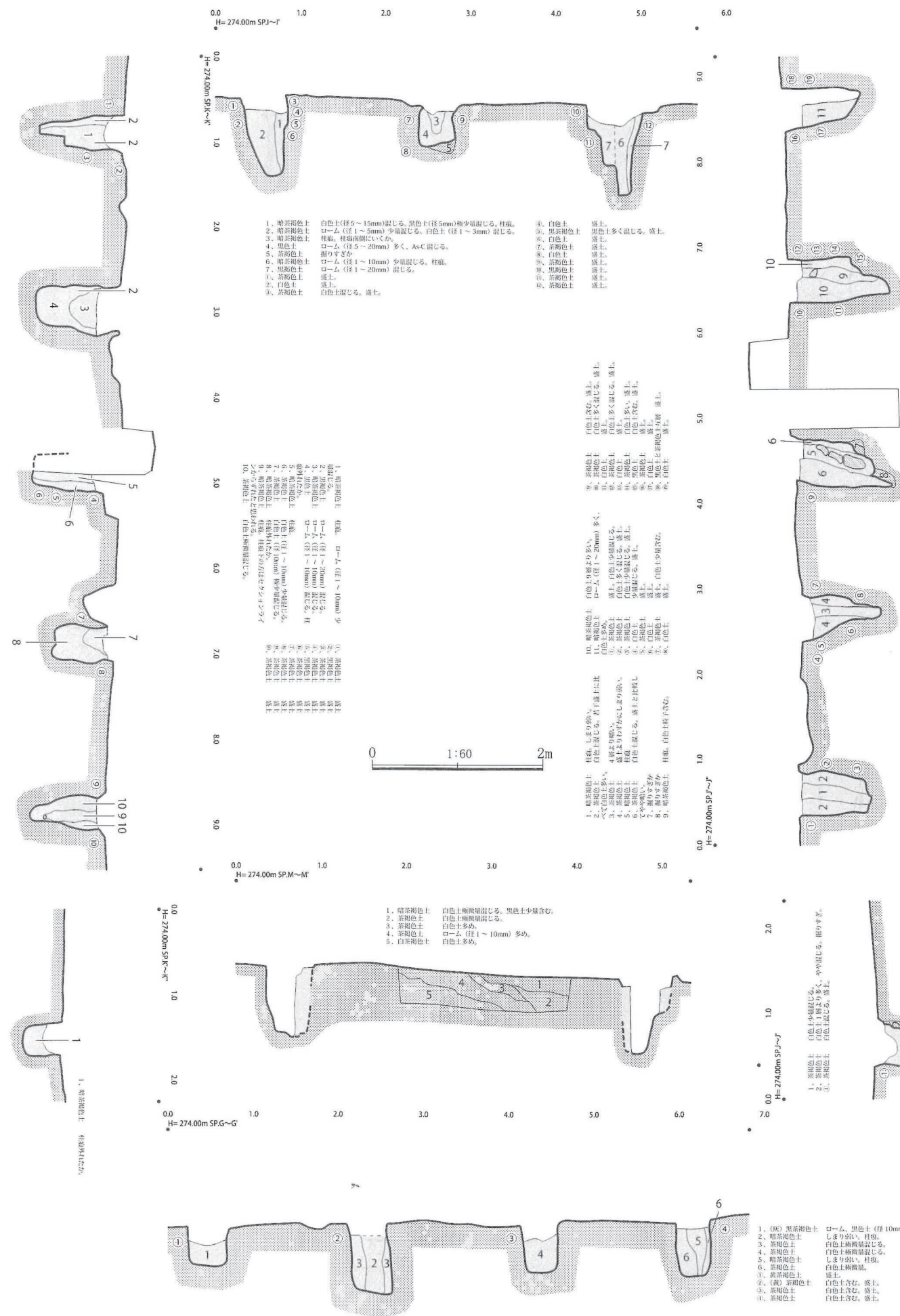


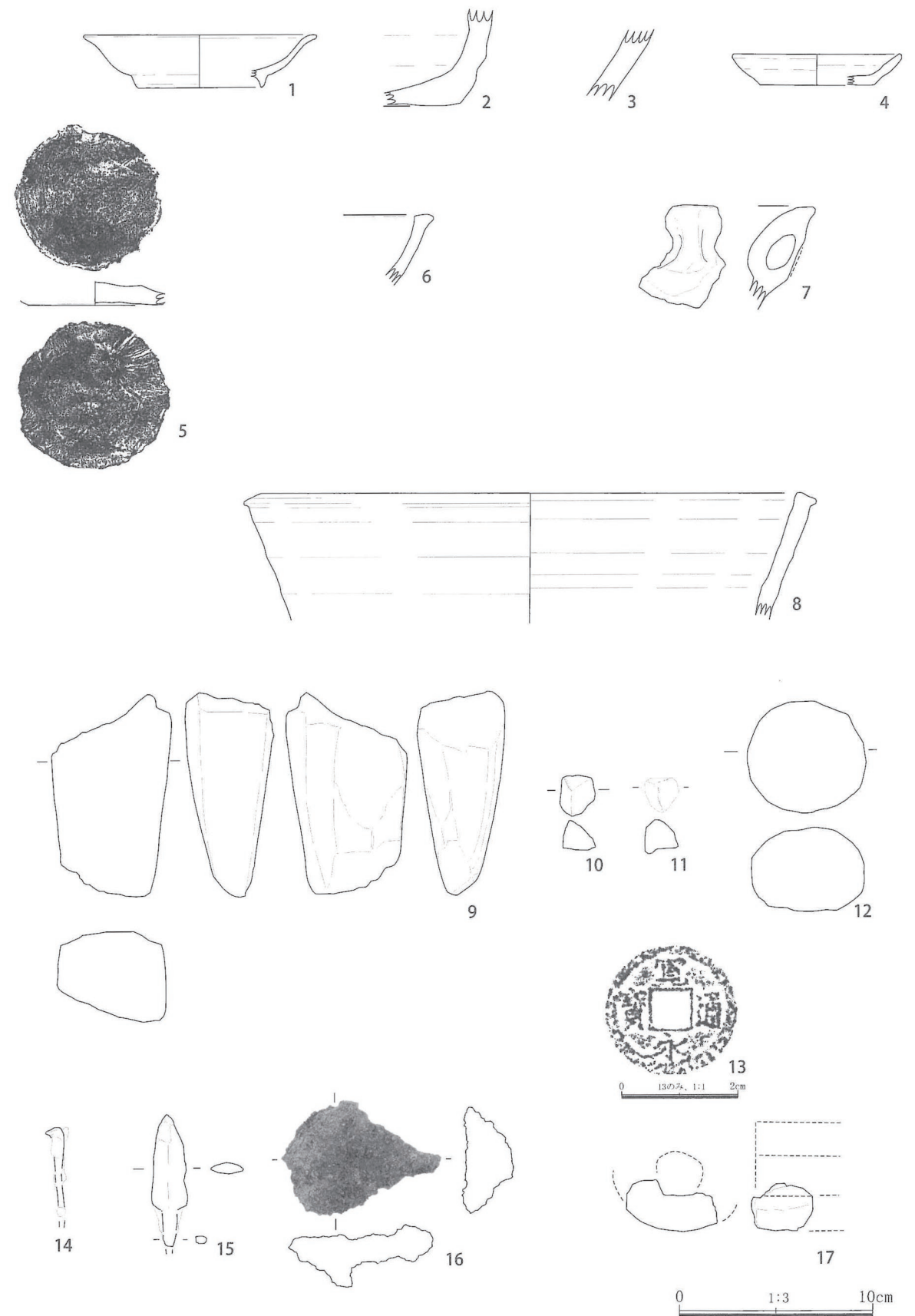
第 267 図 06 三の丸・蔵屋敷地区 SV3・SA1・SX1 (平面図)



第 268 図 06 三の丸・蔵屋敷地区 SV3・SA1・SX1 (セクション図・立面図)

第 269 図 06 三の丸・蔵屋敷地区 P1～P15 (平面図)

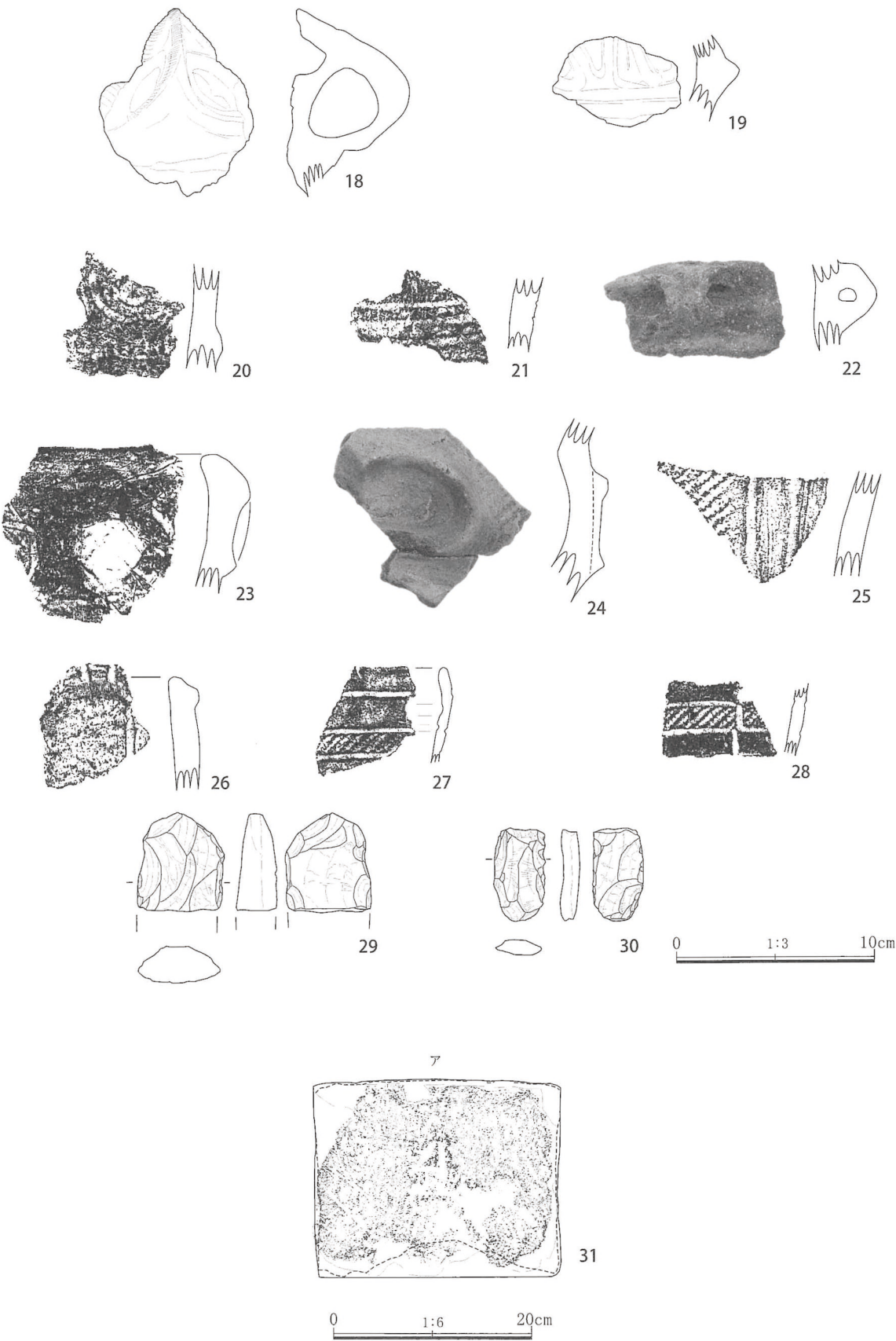




出土遺物観察表（1）

三の丸地区①

図版番号	番号	種別	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	産地	胎土	出土場所	備考
第 42 図	1	青花・皿		5.6		中国	白灰色	表採	B1 群。玉取獅子。亀裂目立つ。穴目立つ
	2	青花・皿				中国	白灰色	D3・1T 盛土層、 B2 表土	B1 群。発泡。高台砂付着。
	3	青花・皿				中国	白灰色	A5 南	B1 群。玉取獅子。やや発泡
	4	青花・皿				中国	白灰色	B2 床やや上	B1 群。玉取獅子。高台砂付着。
	5	青花・皿				中国	白灰色	B2 表土	B1 群。内面亀裂、外面亀裂
	6	青花・皿				中国	白灰色	表採	B1 群
	7	青花・皿				中国	白灰色	B2 表土	15C。亀裂有り
	8	青花・皿				中国	白色	D1・2T 盛土層	B1 群。やや発泡
	9	青花・皿				中国	白色	C2 表土	B1 群
	10	青花・皿				中国	灰色	B3 表土	B1 群。やや発泡
	11	青花・皿				中国	白灰色	A4,A5 盛土層	B1 群。釉発泡により白味がかかる
	12	青花・皿				中国	白色	C2 ベルト表土	B1 群
	13	青花・皿				中国	白色	B3 表土	B1 群
	14	青花・皿				中国	白色	表採	C 群。ややくすむ
	15	青花・皿				中国	灰色	B1 表土	C 群
	16	青花・皿				中国	灰色	C2 表土	C 群
	17	青花・皿		6.7		中国	白色	A3 表土	B2 群。高台砂付着
	18	青花・皿		8.6		中国	白色	表採	B2 群。
	19	青花				中国	明褐色	B1 表土	漳州窯（B2 群相当）。釉調、ややくすむ。やや土っぽい
	20	青花・皿				中国	白色	B2、D1 床やや上	E 群。内面四方禪文
	21	青花・碗	12.7	7.7	2.9	中国	白色	表採	E 群。内面四方禪文
	22	青花・皿				中国	白色	A3 ベルト	E 群。折枝文か。薄く発泡
	23	青花・皿	6.8			中国	白色	9T 床、D3・9T 盛 土層、D3・9T 盛 土層	E 群。底部内面獅子図。底部外面字款。高台若干砂付着。 発色非常に良。
	24	青花・皿				中国	白色	B4 表土	E 群。獅子図。
	25	青花・皿				中国	白色	D2・5T 東	E 群。内外面 口縁部界線。
	26	青花・皿				中国	白色	表採	E 群。内外面口縁部界線
	27	青花・皿				中国	白（灰）色	B1 表土	E 群。内外面口縁部界線。
	28	青花・皿				中国	白灰色	B2 表土	E 群。内外面口縁部界線。
	29	青花・皿				中国	白色	C4 床やや上	E 群。獅子図。
	30	青花・皿				中国	白色	D3・1T 盛土層最 上部	E 群。にじみほとんどなく発色良。砂付着なし。草鳥文
	31	青花・皿				中国	白色	B4 床やや上	E 群。雲文
	32	青花・皿				中国	白色	A2 北	E 群。草文か。やや発泡、亀裂有。
	33	青花・皿				中国	白灰色	A5 表土	E 群。
	34	青花・鉢	21.2			中国	白灰色	B3 表土、C3 表土	口縁部やや波打つ。外面ソギ有り。亀裂やや目立つ
	35	青花・碗				中国	白色	A3 南	C 群。発泡顕著。
	36	青花・碗				中国		C1 ベルト	C 群。発泡。波清文帯。芭蕉葉文
	37	青花・碗				中国	白色	C4 表土	C 群。唐草文
	38	青花・碗	12.6			中国	白色	C3・18T 盛土層	E 群。内外面口縁部界線。一部断面に赤色物付着（漆か）。 焼継か
	39	青花・碗				中国	白色	B4 表土	E 群。
	40	青花・碗				中国	白色	P50	蓮子碗（17C 前半）。内外面界線
	41	青花・小 杯				中国	白色	D1 表土	E 群相当。
	42	青花・碗 鉢				中国	白色	B2 表土	16C 後半。
	43	青花・盤				中国	白灰色	A3 表土	微細な気泡により白濁
第 43 図	44	白磁・端 反皿	14.6			中国	白色	C2 表土	C1 群
	45	白磁・端 反皿			3.1	中国	白色	表土	C1 群
	46	白磁・端 反皿	13.9			中国	白色	B4	C1 群
	47	白磁・皿	10.6			中国	白色	表採	C1 群
	48	白磁・端 反皿	12			中国	白灰色	表採	C1 群
	49	白磁		4.2		中国	白灰色	D3・1T 盛土層	C1 群
	50	白磁・皿				中国	白色	D4 表土	C1 群
	51	白磁・皿 底部				中国	白色	B1・3T 盛土層	C1 群
	52	白磁・皿 底部				中国	白色	D2	C1 群
	53	白磁・皿				中国	白色	A2	C1 群
	54	白磁・皿				中国	白色	C4 表土	C1 群
	55	白磁・皿				中国	白色	B2 表土	C1 群内面砂少量付着。外面穴少量
	56	白磁・端 反皿				中国	白灰色	表採	C1 群
	57	白磁・端 反皿				中国	白灰色	A2	C1 群
	58	白磁・端 反皿				中国	白灰色	A2	C1 群
	59	白磁・端 反皿				中国	白色	D2 表土	C1 群
	60	白磁・端 反皿				中国	白灰色	B1・3T 盛土層	C1 群
	61	白磁・皿				中国	白灰色	表採	C 群
	62	白磁・皿				中国	白灰色	B4	C 群。少し青味がかかる



第 276 図 06 三の丸・蔵屋敷地区出土遺物 2